

# BEASTARS



© 板垣巴留 (秋田書店) 2017

## マンガ大賞2018決定！ 選考員コメント掲載！



# マンガ大賞2018 大賞受賞作品

週刊少年チャンピオン / 秋田書店

## 「BEASTARS」板垣巴留

### 選考員コメント・1次選考

- 少年誌は刊行スピードが早い。この漫画も、マンガ大賞の「既刊8巻まで」の対象条件を満たせるのは今回のみになるはずなので、全力で推したい。理性は本能にまさるのか？それとも逆なのか？という普遍的なテーマに、学園モノならではの強烈なエンタメ性は、まさに今年一番「人に勧めたくなる」作品でした。板垣先生はお若いのに、同世代のマンガのいずれにも似ていない、圧倒的なオリジナルを感じます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 「動物版人間讃歌」の惹句に「なんじゃそりゃ！」とツッコむも、読めば納得してしまう。肉食獣と草食獣が共存する世界で、平和な学園生活を送りつつも、水面下では食う側と食われる側であることを意識する両者。あの娘が気になるのは異性としてなのか食肉としてなのか。カウンセリングの先生が肉食もするパンダというのが面白い。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- こういう読みは正しくないかもしれないが、一種のSFとして読んでいます。「ジャングル大帝」で、人間社会を知ったレオが、動物たちを“文明化”しようと頑張るくだりがありますが、レオたちはレオの末裔ではないかと勝手に思っています。種族を超える言葉を得て、人間のようにパンツをはいた動物たち。しかし内なる「本能」は完全には飼い慣らせず、一皮むけば世界は暴力に満ちている。主人公を「食われる側」の草食動物にせず、「食う側」のハイロオオカミにしたことがすばらしく、「ズートピア」に設定がちょっと似てるのだが、この点だけでディズニーをはるかにしのぐと思う。24年組的な感性を思わせるころもあって、もうこの作品については、一晩だっってしゃべり続けられます。

読売新聞東京本社文化部編集委員 / 石田 汗太

- 本屋でさいしょこの本を見かけた時、まさか週刊少年誌のコミックスだとは思いませんでした。獣の擬人化といえどディズニーだ手塚治虫だと真っ先に連想されてしまうものですが(しかも割と直近で『ズートピア』とかやってみました)、読んでみれば、「ある意味これほど少年マンガ誌に相応しい作品はなかろう」という感動しかない、素晴らしい作品でした。生物としての性能はあまり差のない私たちの世間でも容姿や生活環境でヒエラルキーや断絶はどうしたって生まれます。そんな不平等を極端に表したのが『BEASTARS』の世界だと思っていて、生きものとしての強弱や性格が種々のケモノに戯画化されたことでコミカルかつ残酷にその不平等がわかりやすく描かれています。どうしようもなく不平等な世界を、自分とどう折り合いをつけていくのか。そんなことはまさに少年少女が向き合っていく最重要事項です。だから、このマンガは週刊少年誌にこそ載っているべきお話だと思うのです。ECHOESの歌じゃありませんが、なーんか自分と価値観や境遇の似ているケモノがこのマンガのどこかにいる気がしてなりません。どこかの彼と自分を重ねながら、生臭い青春を追体験していきたい気になる作品です。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 他の作品にはない独特の雰囲気を持つ作品。引き込まれるストーリーも見事

会社員 / 齋藤隼

- 獣人たちが暮らす世界で繰り広げられる学園群像劇。獣人たちが自らの「獣性」を理性でもって克服しなければならない、それが絶対正義として掲げられている社会を描いているのが本当に面白い。「ジャングル大帝のレオは何を食べて生きているのか問題」に対して真向から相対した作品と言っても良い。ジャングル大帝のレオが何を食べているのかが明らかになったあとでも、レオは、レオとして光り輝くことができるのか？を問うマンガだ。その光輝を保証するのは何なのか？を問うマンガでもあるビターな世界のなかで、未熟で、迷い、悩み、傷つき、恋する年若い子らの鮮烈なこと鮮烈なこと。週刊連載でさっさとしないと賞の候補から外れてしまうので急ぎで推す。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第弐齋藤

- すっごい新人現るという気持ち。面白く読んでますが、最新刊まで読んで若干一番言いたいことが分からなくなってきたような。でも本当にこれからが楽しみな作家さんです。応援してます！

bar 図書室 / 岡部 愛

- 動物擬人化で生々しい人間関係？を表現。新鮮です！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 「名探偵ホームズ」から30余年、動物擬人化キャラのネクストが現れた。肉食・草食動物の設定をそのままに活かした学園もの。本能が出てしまうレゴシのナイーブな葛藤に目が離せない。殺害事件から禁断の肉体関係、はたまた次々現れる個性的な動物たち。目が離せないとはこのことだ。

ネットラジオ「ザ・ノイジーズ」パーソナリティ / 北山友之

- サスペンスあり、人間（動物？）関係の複雑さあり、学園ものの面白さありと、てんこもりの一作。わくわくしながら次のページを開き続けてました。面白い！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- キャラがよくつくりこまれていて、ワクワクする展開。全員動物。個人的にはウサギのハルちゃんの下着を常にチェックしています。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 選考員コメント・2次選考

- 不覚にも、これまで全く知らなかったマンガでした。読み始めたら止まらない！動物青春群像劇。なにより世界観が素晴らしい。肉食と草食の共存する学園生活。ハイイロオオカミらしくない主人公に好印象。他の登場動物も魅力的。面白いです！

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- どうして肉食獣と草食獣が併存しているのか？とか、このマンガの世界観がわからずに最初は苦労したけど、読み進めるうちにどんどんとキャラたちの魅力にやられました。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- まさに、「今」人におすすめすべき作品。サスペンス？学園青春もの？擬人化動物？いろんな要素が詰めこまれているけどバランスが良く、ぐいぐい読み進めてしまう魅力がある。本能と理性の間で揺れる肉食動物である主人公の今後、タブーを犯したのは誰なのか。気になる…気になる…。

主婦 / 赤坂真実

- なんかすごい。すごく変な漫画なんだけどなんか納得してしまうパワー。

PENICILLIN / HAKUEI

- 単に人間を動物に置き換えただけでも、動物のあるあるネタで楽しませるというのでもない、ドラマを描くためのはっきりした必然性のある「擬人化された動物だけの世界」って初めて見た気がします。この、動物たちの世界ならではの歪み、苦悩、戦いをひたすら突き詰めて描くことが、人間社会に暮らす私の心をもゆさぶる普遍的な感動につながるという、素晴らしい逆説。結局のところ、この作品は凄まじく王道の青春群像劇なんですよ。そのドラマを本当に丁寧に組み立てているなって、連載当初から惚れ惚れと読んでました。それにしても主人公のレゴシ君……君は本当に真面目でいい奴だなあ。

会社員 / 末永龍介

- ダイバーシティが叫ばれる昨今。人がときめく瞬間は千差万別、けれども自身との「差」で興味が湧くことがときめく要因のひとつだとしたら、等しい世の中で他者との「気づき」はもしかしたら出にくいでは、と考えることもありましたが、本作を読んだ後そんなことは杞憂であると感じました。どんな時も己と己以外と常に闘い、やさしい世界を獲得していく主人公・レゴシやその他のキャラクターから巻数を重ねてもなお、目が離せない。認め合い、さまざまな感情や状況と格闘していくことこそがフラットな世界を気づくのでは、と思わせてくれたこの作品。この時代に出会えて良かったです。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 鳩岡桃子

- 映画やファッションショーなど、劇場型エンターテインメントを題材にした作品が際立つ今回でしたが、中でも出色の出来がこの作品。某ディズニー映画のような設定と学園物がここまでマッチするのも驚きだし、キャラにもストーリーにも引き込まれました。

公務員 / 東くるみ

- 多分、これが人間であれば普通の学園生活なのであろうが、ここは動物の世界。肉食動物と草食動物の性質を残したまま、人間の生活に置き換えている所が作品に引き込まれる。獰猛な性格であろう狼がおとなしく優しい。そんな彼が少し変えていく世界に、どうなるのだろうと楽しみを持たせてくれます。

デザイナー / 平沼寛史

- 面白い！本能と理性との戦い動物たちの表情がとても豊かで、なんの違和感もなく物語に入った。擬人化しすぎず動物らしさは残っているのに何故色気があるんだろうか…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 今までにない設定で動物が人間になるだけでこんなに深いとは！と思いました。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 独特の世界観。レゴシくんがかわいい。肉食動物と草食動物が人間の生活をするとこういう仕組みになるっていう社会ルールがおもしろいです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 動物って絵になるんだなあ、見るたびに思う。表紙のデザインも素敵。最初に起きた事件の行方も気になりつつ、その種に生まれた葛藤やそれゆえに生じた出来事は実に人間らしくて、物語としても気になる。今年推すならやっぱりこの作品、まとめて読むことを推奨します！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- キャラひとりひとりの生っぽさがたまりません。表と裏のようできて似た者同士であるような、レゴシとルイのこの先が気になって仕方ありません。

会社員 / 工藤圭

- 面白さだけなら「約束のネバーランド」の方が上。絵も巧みとは言えないし、物語の欠点も目立つ。それでも、「これまで読んだことのないマンガ」として最高点をつけたい。動物が服を着て二足歩行するマンガなんて、「のらくろ」の時代からあるんじゃないかと言われそうですが、本作の新しさは、動物の戯画化が、キャラの内面と深く結びついているところにある。例えばバンドデシネの「ブラックサッド」は絵がメチャクチャうまいけれど、そこに描かれている二足歩行の動物たちは、表面的なキャラ属性しか表現していないわけです。しかし本作は、ハイイロオオカミであること、アカシカであること、ドワーフウサギであることが、いわばキャラの「宿命」を決定づけていて、それがとてつもない陰影を物語に与えていると感じます。比較するのは変かもしれないが、同じくアイデンティティーの問題を掘り下げた24年組の少女マンガと同じにおいがする。作者はディズニーに影響を受けたと語っていますが、肉食動物 vs 草食動物の確執というテーマだけでも「ズートピア」を超えていると思う。それに加えて、キャラの個性が一筋縄でなく、ステレオタイプがまったくない。ヒロインのハルなんて最たるもので、この作品が「刃牙道」や「弱虫ペダル」と並んで少年チャンピオン連載というのもクラクラする。言葉だけは流行りの「多様性」というテーマを、ここまで深く描いた作品は見たことがない。ある意味、日本マンガの歴史の最先端に立つ作品です。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 一言で言うなら擬人化した動物たちの青春ドラマ。しかし、彼らがその種族の本能を留めたままの存在であることがややこしい。肉食動物・草食動物が微妙な距離感を保ちながら、同じ制服を着て学校に通い、寮で共同生活を営む。ハイイロオオカミはコンプレックスが強く、アカシカは誇り高く、トラは貪欲で、ウサギは多情だ。そこに描かれるのは、まるで青春学園ドラマの戯画化のようだ。いや、だからこそ、そのベタな展開もドキドキハラハラしながら読めるのだろう。恐らくそこらの「人間ドラマ」では終わりそうにないから…。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- けものフレンズで感動した人も驚く、動物擬人化キャラのネクスト漫画。肉食・草食動物の設定をそのままに活かした学園、そして社会。本能が出てしまうレゴシのナイーブな葛藤に目が離せない。殺害事件から禁断の肉肉関係、はたまた次々現れる個性的な動物たち。どんどん複雑でどんどん深くなっていくストーリー。文句なしの1位かと。

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

- 肉食獣草食獣の中があることを除けばそう、学生時代のそれであり、あるある、そうそう、学生ってこういう価値観なんだよ。だから不思議な文化もすっとはいっていった。これは革新。自分の常識の延長にある不明が多い2つの常識を掛け合わせると、非常識もすんなりうけいられるということ。

プロデューサー / 小林智之

- なんで面白いと思ったのか説明するのがとても難しい・・・一つ思うのは、この作品の主人公レゴシはあまり漫画の主人公っぽくないというか、本当に普通の学生っぽい感じがします。擬人化された動物という点を除くと、何らか性格的に誇張された部分が見られない。キャラ付けのための誇張という漫画の常とう手段があまり前面に出ないところが、擬人化された動物たちの集まりというファンタジックな設定のこの作品にリアリティを与えているように思います。言い換えれば、動物たちなのにすごく人間くさい。本能と理性、異種の共存という哲学的な難しいテーマを持つ作品ですが、理屈っぽくもないし面白い。よくよく考えぬかれた世界観の作品だと思います。

会社員 / 林礼春

- 見たことのない雰囲気、ハラハラしながら読みました。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 弱肉強食は世の理か、それとも理性で打ち克つべきものか。現実社会とシンクロさせてしまう骨太のテーマに、動物たちに感情移入せざるを得ない心理描写と少女漫画的な叙情性。ほかにない強烈なオリジナリティを感じた作品でした。2月に発売された「BEASTCOMPLEX」には、板垣先生の創作のルーツが説明されていましたが、やはりあの某世界的アニメとは関係なく、作者が幼いころから培われた世界観だったようです。文字通り、いま一番人に勧めたい漫画。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 知性を持った肉食動物と草食動物たちがともに暮らす世界。というものをみて思う矛盾を「社会の闇」という形で物語化しているところがすごい。それぞれの動物の性質に準じたキャラ立ちをしているのも良し。物語の良さ、描写の良さ、圧倒的に良い。この世界をどうやって回収するのか、どうやって成り立ちを読者に納得させていくのか、楽しみ。

ブロガー / サイトウマサトク

- 語弊を恐れずに言えば、ストーリー仕立てになった現代版『鳥獣戯画』。肉食獣と草食獣が共存する学園で、それぞれの動物の特質に投影された"人間の業"のようなものに時にクスリと、時にギクリとさせられる。主人公はどこかに肉食獣としての本能を持ちながら、その本能との付き合い方に戸惑うハイイロオオカミ。人間よりも人間くさい葛藤だらけの動物。外面に象徴されるイメージと、性格を反映する内面が乖離しているのは、人間社会で暮らす僕らがいつかの日常で見た光景だ。投票対象となる刊行巻数は6巻、最新刊は7巻と既刊の数も十分だが、読み応えは十二分。

編集者 / ライター / 松浦達也

- 愛よ、種を超えろ！！このマンガにかかっている帯の言葉です。このマンガをととてもよく表していると思います。肉食獣と草食獣がなんとかバランスを取って共存している世界で、主人公は本能や自分の性格に悩みつつ、成長していきます。他のキャラクターもとても個性的で物語があり、全員が主人公といってもいいぐらい。いろいろな種が、一人ひとり違う個性を持ち、自分の本性と、性質の中で、もがきながら生きている。動物が主体で人間は一切出てこないのに、人間の本質をえぐってくる、特濃のヒューマンドラマ。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬公将

- 単純に人間社会を動物に投影しただけではない奥深さが、深読みする楽しみをさらに深めてくれる。丁寧に描かれているのが伝わってきます。

医師 / 岸本倫太郎

- 基本は学園ドラマです。それも結構ボンクラ男子の。時折不穏な空気も流れるけれど、ここにあるのは青春の蹉跎。おとなしくて弱気な男の子が悩み、傷つき、少しずつ強くなっていく。まあそれでも、女子のほうがしたたかですっかりしてますが。負けずに頑張れ男の子。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 描かれるのは草食動物と肉食動物が共存して生きる世界。気弱な大型肉食動物、堂々と振る舞う草食動物の意外性を描くに留まらず、番狂わせの連続に引き込まれる。やたらと悩まくる（でも、めちゃくちゃ強い）主人公はもちろん、脇を固めるキャラクター勢もとにかくにもチャーミング。異種間のすれ違いは現実の人づきあいもほうふつとさせる。最初の謎が今後、どう解き明かされていくのかも楽しみな作品です。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 肉食動物と草食動物が共存した学園生活を舞台に殺人事件、恋愛、友情、部活、裏のマフィア組織、とこれでもかと中身の濃ゆ～～展開がスピーディに描かれています！今年一番の熱さある作品だと思いました！女性作家さんだというのは、ノミネートのタイミングで知りました。意外にも感じましたが、ウサギの描写がエロくて、妙に納得（笑）

会社員 / 佐々木つむぎ

- 今回の選考にあたって読み直してみたが、ストーリー性だけでなく、その背景となる動物のみの世界の緻密な設定に改めて感動。今後の展開も楽しみ。

会社員 / 齋藤隼

- いま『BEASTARS』をリアルタイムで、週刊少年チャンピオン本誌で読んでいる少年たちは幸福である、と思います。動物たちが人間のように暮らしているという世界は一見とてもファンタジックで現実離れた物に見えて、そこで描かれる恋愛、格差、危険な世界への憧れ、挫折に葛藤。レゴシ達の青春は、週刊少年誌がターゲットにしている少年たちの現在の世界と大きく重なるだろうからです。思春期の人間が持っている承認欲求や動物的本能の衝動の強さ、生臭さが動物の形を取って生き生きと描かれています。これほどまでに生臭い「青春」に肉薄した少年マンガがいま他にあるでしょうか。週刊少年マンガ誌の連載作品というもバトルものやスポーツものなど王道的な物もあれば、ディープな恋愛ものあり、本格サスペンスありと日に日に多様化してきている様に見えますが『BEASTARS』のような作品が週刊少年誌に連載されていることそのものがとても意味のあることに思えてなりません。いま青春真っ只中の少年少女たちには是非読んでほしいと思い、票を入れさせていただきます。

株式会社アニメイト / 岡部真矢

- すごい作品が出てきたと読んでいて震えが止まりませんでした。動物版青春ヒューマンドラマとは思ってもよらないところに目を向けたなあと読む前から期待で目を輝かせていました。そして思ったとおり、むしろ想像していた以上に繊細な感情表現をしていて、動物ならではの超えられない壁、肉食と草食という部分を上手く作品にしていると感じました。夢や希望だけでなく青春時代にありがちな妬みや嫉妬、そして憧れなども人で表現するよりもずっと難しく、同じようでもあり全然違うのがこの物語を楽しむ上での重要な部分ではないでしょうか。主人公・レゴシを例えば人間に置き換えて同じような作品が生まれたか？それは否です。動物であるからこそ出てくる問題、肉食動物が草食動物を食べてしまうかもしれないという恐怖にも似た葛藤…人では表現できなかったと思います。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

- ウサギのはるちゃんのために、二人の主人公の人生が変わっていく。とにかく設定が細かくて、様々な展開が期待できて、驚かせてくれる。キャラクターが動物なので嫌だと考える人もいるかもしれないが、敬遠しないで、読んでみてほしいです。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 「ジャングル大帝のレオは何を食べて生きているのか問題」に対して真向から向きあった作品。ジャングル大帝のレオが何を食べているのかが明らかになったあとでも、レオは、レオとして光り輝くことができるのか？を問うマンガ。その光輝を保証するのは何なのか？を問うマンガでもある。獣人たちが自らの「獣性」克服しなければならぬ、それが絶対の正義として掲げられている社会。肉食は肉食としての獣性を。草食は草食としての獣性を。認めつつも、克服しなければならぬ。そのような社会。(彼らは、どのような歴史を辿って、あるいはどのような犠牲を払って、そのような社会を築こうと決意したのだろうか?) その社会があげる軋みに、年若い学生たちがぶつかると。そのコンフリクト。強烈さ、鮮烈さ、輝きが眩しい。だからこそ目が離せない。週刊連載なのでここで推しておかないと賞の候補から外れてしまうので急ぎで推す。最近、同じ世界観の短編集『BEAST COMPLEX』も出てて、そっちも良かった。ピターで。お洒落で。良い意味で日本人離れしてて。登場する獣人たちが、みんな格好良くて、妙に「リアル」なんだよな。ちっこいドワーフウサギJKが小さいなりのスタイルの良さと奔放に服脱ぎ捨てるとことかドキッとものね。主人公のオオカミ、レゴシくんも妙にソリッドでセクシーで、ちょっとだけBLマンガ的な色気も感じる。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第弐齋藤

- シビアなテーマですが絵のかわさや説得力のあるキャラ作りでぐいぐい読める作品です。重厚なので読むのに精神力使うけど、読み応えあります。獣人っていいよね。

WEB デザイナー / 河本智芳

- 新しいのに、古典的。動物たちが通う学校、ってある意味「のらくろ」からある最も牧歌的な発想なのに、そこに載せてきたのがひりひりするような青春群像劇。内気なハイイロオオカミが「1 回寝たオスからの情けは受けないの」と嘯くドワーフウサギとの恋愛に悩みながら学園祭の準備をする、という新しさの一方で、男として暴力団に殴り込む、という古典展開にクラクラニヤニヤします。肉食獣が小動物に対して抱く暴力的な本能、というはっきり言ってまったく共感はないテーマなのにぐいぐい読んでしまう、テーマも共感も、もしかしたらマンガとしてはむしろ逃げなんじゃないか、「マンガは面白けりゃそれで勝ちなんだよ!!!」とドワーフウサギとちょっと付き合ってみたくなりながら、思うのです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

アフタヌーン / 講談社

## 「我らコンタクティ」森田るい

### 選考員コメント・1次選考

- コミュ障の男の子が、小学生の時の思い出をもとにロケットを打ち上げる。中高生、大学生のような青春ではないんだけど、このマンガからは大人なりの青春を感じる。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 読んでいる途中から「なんじゃこりゃあ！」と叫びました…。お、面白い…。絵も構成もキャラクターも全てが素晴らしい。急にUFOの話が出てきて、なんぞや??と思うのだけれども、そこからロケットを打ち上げるというトンデモ展開にぐいぐい引きこまれます。しかし、ひとつだけ納得いかない点が、この作品、まだ重版していないんじゃないかしら!?もしそうなら、アフタヌーンさんの関係者さん…重版よろしくお願いします…(涙)

会社員 / 佐々木つむぎ

- 2017年ダントツの一押し!!本屋で運良く平積みされているのを手に取って、読んですぐ友人達に布教しました。1話目のひねくれた雰囲気からどんどん加速して、最終的にはポロ泣きしました。もっと話題になってほしい…本屋に在庫がないのがもったいない!漫画好きに紙の本で勧めたいので、ぜひ重版してほしいです。

WEBデザイナー / 河本智芳

- 全編を通して漂う青春感がなんとも素晴らしい作品。常識に囚われずにやりたいことを突き通す人、それを支える人達、とにかくカッコいいです。あらすじを説明しろって言われたら一言で済んじゃいそうなんだけど、それを実現するためにアクションを起こす主人公達の熱量や純粋さがただひたすらに胸を打ちます。こんなにスカッとする漫画に久しぶりに出会えて嬉しい!味のある絵柄と、曲者揃いの登場人物達も最高です。

しょうゆ製造業 / 小野塚博之

- 主人公ふたりの行動の動機が純粋で、読んでいて気持ち良い。

医師 / 岸本 倫太郎

- 一巻完結の本作品、おもしろい!と勧められたままに読んでみたのですが、近年稀に見る勢いのある名作が出たなという感じです。物語のスタートからゴールにいくまでの物語の膨らみが尋常じゃないです。日々何気なく暮らしていく中から夢が湧いてくる、それを叶える、なんでもない日常から非日常への変化、なんでもなかった小さな繋がりが大きな夢を結んでいく…この作品を語る言葉が見つかりません。だからこそ読んでもらいたい!!というイチオシの作品です。電子書籍では読めるようですが、増刷されていないとのことでもったいない!手に取って出会ってほしい作品です。後半の勢いからラスまでのスピード感、そして余韻。漫画でこういう体験できるんだと感じるほどです。わくわくしっぱなし。夢って、それだけでパワーです。夢を叶えるって、さらにものすごいパワーを生み出します。つまらないと思っている日々で隠れている夢って、もしかしたら誰かの人生や夢をいい意味で狂わせるんだな、と思います。メインのふたりの連鎖反応、本当に気持ちがいいです。この日々を変えたい、でも夢ってなんだっけ?なんて思うことがあったら、まずはこの漫画を読んでみてほしいです。勇気ですよ。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 不覚にも、この作品を読んだときには紙の単行本が手に入らず電子書籍でしか読めなかったのですが、そのことを死ぬほど後悔しております。不純のカタマリみたいなところから始まったカナエが夢みたい目標に巻き込まれていく、その心の変化やかずきとの信頼関係が出来上がっていくさまが決してドラマチック過ぎない形で描かれている温度感というかバランス感覚というか、作品世界や絵柄との調和が素晴らしかったと思います。しっかり間を取って、穏やかな空気感がありながらも、これだけ丁寧なお話が単行本1巻で綺麗に完結しているということが実にヤバイですこれ本当。紙の本で読みたかった……!!

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 世にまつろわぬ我らはしかし星を夢見る。片田舎の爪弾きものがロケット飛ばそうとするマンガロケット飛ばそうぜ! みたいこと言っている割に作っているのは手製の爆弾、みたいな感じ。梶井基次郎の檸檬が爆弾であると同様に、ロケットだって爆弾だよな、的な。突拍子意味も意義もないんだけど、それはたぶんこの宇宙でまだ誰もみたことなくて、きれいなんだよ、みたいな。そういうことをやってみせるマンガで謎の鬱屈感と爽快感が同居しててなんなんだろうねこれ?という感じ。よくわからないんですけど

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第式齋藤

## 選考員コメント・2次選考

- 後ろから頭を鈍器で殴られたような衝撃的な作品。これまで読んできたどの漫画よりもスピード感があり、セリフや効果音が勝手に頭の中で駆け巡ってしまう。久々に何度も読み返した。  
(株)エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介
- 1巻の中に収められた熱量とスピード感は感動もの。読後感も最高！ひたすら自分達のロマンを追い求める主人公2人のひたむきさに心打たれます。学生時代だけが青春じゃない！  
しょうゆ製菓業 / 小野塚博之
- 仕事に不満たらたかなカナエは幼馴染のかずきと再会。彼がやっているロケット開発がカナエになると思ったカナエだったが…。わたしにとって2017年の一番はこれでした。雑誌で読んでいたときには終わるのが惜しくてたまらなかつたのですが、まとめて読むと一巻で終わる切れ味の良さが際立ちます。  
鳥取県立図書館司書 / 野間勤
- 面白い！画にクセがありますが、そんなもの気にならないぐらいのめり込んで読んでしまいました。ロケットを飛ばすという目的が一本真っ直ぐにあって、それを軸に描かれており、ただ本格的にロケットを製作するような専門的部分は置いておいて、誰もが読みやすいようになっていると感じました。目的をひたすらまっすぐに見つめ果たす、読後感はとても良い印象でした。単巻漫画ではありますが、とても満足ゆく作品でした。  
三省堂書店海老名店・囀託社員 / 近西良昌
- これがマンガじゃないでしょうか。傑作です。  
音楽プロダクションマネージャー / 樋口健
- 読んでいる途中から、1本の映画を見ているような気持ちにさせられた。ロケットを個人で作って飛ばす夢のある話に、飛ばして乗せたい物がまた夢がある。途中で出てくる兄との対立のシーンが更に深みを増してくれてるのかな。終盤の加速感が読後の良い物を読んだという気持ちにしてくれた。  
デザイナー / 平沼寛史
- 読み終わって一番に『あ～～マンガ読んだァァ！！』という気持ちが押しよせてきた。始めはカナエというキャラがあまり好きになれずなかなか本の中に入っていけなかったけどカナエがかずきの手伝いに真剣になっていくと同じに私もどんどん本の中に引きずり込まれていきました。最後のカウント！ドッキドキしたー！  
カメラマン / 平沼久奈
- いわゆる社会的には「はみだしてる」人たちの、夢と野望と愛と〇〇がロケットに乗せられて宇宙に飛び出していった。単巻作品とは思えない充実感に、完全にしてやられた。フィクションにしておくのがもったいないので、どなたかこれ実現させてくださいよろしくおねがいします。ヒューイ、ヒューイ。  
オリオン書房ノルテ店 / 池本美和
- 単行本1冊分、254ページのこの作品がマンガ大賞2018にノミネートされるまでのプロセスに、世のマンガ好きは予測不可能な社会現象的要素を感じてワクワクしたのではないだろうか。2013年のアフタヌーン四季賞、初の連載(2017年5月号～11月号)と単行本化、そして版元の在庫切れで紙の単行本が手に入らないというプレミアム感あふれる展開。そして息も付かせぬラストまで(紙好きとしては仕方なく)電子書籍で読み切った時の震えはたとえようもなくミラクルで、今回いちばんの収穫でした。滝田ゆう、高野文子を想起させる、読んでいて背筋がぞわぞわとするシャープな絵。とりわけ小柄でキツネ顔、前髪ぱつつんで性格のきつい主人公「カナエちゃん」のくるくる動く意志の強い目と表情豊かな眉はめっぽう魅力的で、デザイン処理された絵柄なのに生身のリアリティーがある。流麗で迷いのない描線は火や水や風の「動き」を感じさせるし、縦長のコマを多用した大胆で闊達なカメラワークからは映画にはできないリズムが生まれる。影絵のような、版画のような明暗がはっきりした画面も魅力的。ファンタジックな作品世界のあちこちにビターな挿話を紛れ込ませるバランス感覚が素晴らしい。町工場でロケットをつくって打ち上げるという、大人になるつもりもなければ自分がすでに大人であるという自覚もない小学校時代の同級生・かずきのまっすぐさと、カナエが最後にみせる大人の駆け引きと必死の能弁、その裏にある祈りのような気持ちが何ともいとおしい。こんな作品が大賞になったら、と想像するのは至福です。  
会社員 / 天野賢一
- 1本面白い映画を見た、みたいな感じのする1冊でした。性格いいやつ全然出てこないのに、いい話になって面白かったです。  
会社員 / 林礼春

- 宇宙人に映画を見せるためにロケット開発という、夢の「夢らしさ」をぎゅっと凝縮したようなテーマ。でもこれこそ青春映画になりそう。ただ、この作品に出てくるのは、下町の工場の「ぬぼー」とした男、かずき、そしてさえない日々を送っていたOLカナエ。青春を謳歌する高校生とかじゃないのがよりファンタジーって感じがする。このような年、このような生活をしていて、夢を追いかけていたいという気持ちを持ち続けたり、または再び持つことが出来るなんて・・・！そしてそれは、物語が進むにつれて、大人の夢をかなえてくれる。カナエが水を得た魚のように元気になっていく、エネルギーになっていく姿は、読んでいるこっちもワクワクしてくるし、夢のつまったロケットが、完成するまで、そして完成してからの展開も、毎日通勤電車で揺られている大人たちに、癒しと勇気を与えてくれるはず。そして最後は、にくい演出が待っている。後半からラストまで、一気に読める。この味のある絵もすてきだ。

会社員 / 西尾美里

- ページをめくった最初から魅了された、独特なタッチの絵。「あ、これは最後まで読ませられるな」と思った期待感は裏切られませんでした。ロケットを打ち上げたい浮世離れ男子と、何とか彼を騙して一攫千金を試みる女子。クラスタの違う2人が次第に気持ちをひとつにひ、タッグを組む過程もさわやか。長期連載の作品が増える中、こういう一巻完結の名作が増えるといいな、と思わされました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ダメそうな中年がたくさん出てくるのに、うっかりロケット発射に胸が踊ってしまった。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 独特の絵だからこそ引き込まれる感じ。ストーリー自体も凄く良いけど、変に小綺麗な絵だったり実写だったりしたら「ふ〜ん」で終わってたと思います。漫画力が高い、こういう作品こそ売りたい。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出麻悠美

- はしごを降りる動きを1コマで描いちゃうシーン、脳にきました。

往来堂書店 / 三木雄太

- 登場人物全員がとにかく愛おしくて、ラスト数ページをめくるのが寂しくて辛かったです。悲しい事なんかないのに、涙が出そうな余韻を味あわせていただきました。こんな作品に出会うたび、改めて「漫画っていいわぁ」となりますね。絵柄もかなりタイプなので先生の次回作が楽しみです。

バンドマン / TA-SHI

- 何故か引き込まれるものがありました。生っぽい人間関係や織り成すドラマが妙におもしろく、キャラも個性が際立っていました。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- ロケットを開発して宇宙へ飛ばしたいという突飛な導入に最初面食らいましたが、とにかく魅力的な登場人物が多く引き込まれます。特に昼は町工場勤務で夜はロケット開発をする中平かずきの、科学技術にパラメーターを全振りした天才肌の立ち回りが面白いし、ヒロインである椎ノ木カナエは、一見大人しく冴えないOLかと思いきや内面はかなり生意気で穿っていて、かずきが作るロケットに便乗して一発儲けようとしたりする辺りが最高。彼らの何気ないやり取り、その空気感が読んでて非常に楽しいです。1冊完結という限られたリソースの中で、ロケットを完成させて打ち上げようとするまでの顛末を、スピード感を落とさずに上手くまとめてあるのが素晴らしいです。

会社員 / 三浦佑樹

- 候補作品の中でも最も「引力」が強かった一冊。独創性の一言では表現しきれないストーリーの妙もさることながら、なにより最後まで一気に読ませる力強さは圧巻。気付いたら、あっという間に最後まで動き回るかずきとカナエを追いかけていた。決して絵がうまいわけでない。それなのに、少ない線、音を表す言葉の独特な挿入によって、しっかりと登場人物の動きと感情が伝わってくる。暗闇のシーンにおける、黒と白の効果的かつ端的な活用。そして、それらと対照的な、鮮烈な打ち上げシーン。是非ともマンガ大賞を通じて、多くの漫画ファンがこの作品と出会ってほしい。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村量一

- パッと見は平凡で、でも変わり者で、素直に感情移入できるわけじゃないのに引き込まれる、そんな不思議な魅力がどのキャラクターからもあふれていて、何度も読みたくなる。このマンガの中に入りたい感じと言うか。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 絵柄だけを見た時想像するのは、さらっとしたキャラクターやストーリーだが、実際はそれとはまるで違う、熱っぽくて勢いのあるエンタメが展開していくのがいい。食い合わせの妙というか、よい意味での違和感があることが、この作品を個性的で魅力的なものにしていると思う。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 一次選考で投票していたので、ノミネートされていて、とても嬉しかったです！「漫画好きな誰かに薦めたい」というコンセプトに、今年最も当てはまると思います。まず絵が好きすぎる。線が味わい深く、独特ですっと見ていられます。ちょっと癖がある登場人物たちも皆、可愛い。映画みたいに誰かと共有して、語りたくなるような作品です。もっとたくさんの人にこの作品が読んでもらえますように♪ヒュ〜イヒュ〜イ♪

会社員 / 佐々木つむぎ

- 「画」での好き嫌いはあるものの、「才能」の迸りを感じる。グイグイ読ませます！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 昨夜読んだこの「目の前をものすごい勢いで転がっていった物語」が、通勤中の自転車の上で、仕事の合間のトイレで、コンビニのお釣りを待ちの時間で、何度もフラッシュバックしてくるので、たいへん困っています。仕方ないので、ふたりが「我ら」になっていくのを、特等席で何度も楽しみたいと思います。

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- 休日の夜、少し酔っ払いながら、静かで小さな薄暗い誰もいない部屋で、アンビエントな音楽を小音量で流しながら、ソファに寝っ転がって読みたくなるような、とても素敵な漫画。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- めちゃくちゃカッコいい！ぬぼーっとしたかずきがだんだんイケメンに見えてくるから不思議。キャラの一人一人が魅力的でマンガの中では描かれていない部分も気になるし、こういうところが物語に奥行きを持たせている。優れた作品に出会うと、マンガ以外の媒体でも見てみたいと思う。これは絶対映画化してほしい。今までこの作品を知らなかった私のバカッ！と思うのと同時に、こうやって未知の作品に出会うきっかけを作ってくれるマンガ大賞に感謝！

三省堂書店 / 内野智未

- 荒削りなところもだけれど、とにかく一途な登場人物。青春小説のような読後感。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 去年出会えた作品のなかで一番の感動を得た作品！一巻完結物好きとしてたくさんの方に勧めたいです。最初はひねくれ系マンガかな…と思いきや主人公含めてどんどんキャラを好きになっていき、最終的には泣きながら応援してしまった。独特の絵柄と構成もすごくよく、一冊の宝物に出会えた気分です。また読み直したい。

WEB デザイナー / 河本智芳

- やっぱり今年一番のヒット作です。映像ではなく、マンガだからこそそのドラマ、ラストの余韻が味わえると思います。ありふれた日常から始まって、メインのふたりが突拍子もない夢を手繰りよせていく感じには胸が熱くなりました。前半のゆるさから中盤のキャラクターにまつわるストーリー、そして後半のスピード感、そのなかでメインのふたりの魅力が深まり、そしてあのラスト。一巻完結作品ですが、なんだろう、この充実感。自分が夢を叶えた訳じゃないのに、不思議と手応えを感じます。この作品に出会えてよかったです。文句なしで一位です。

会社員 / 宇田川結衣子

- たった1巻の中にいろいろが要素がぎゅうぎゅうに詰まっていて、ものすごく食べ応えがあるお菓子みたいでした。美味しいし、栄養価高いし、腹持ちもイイ！本当はすごく好きなのに「趣味なんで」とか言い訳しながら何かやってる大人にはとくに読んで欲しいと思いました。「くすぶってる大人向け」と言ったら変かもしれませんが、大人たちが背中を押してもらえるマンガであることは間違いありません。

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

Elegance イブ / 秋田書店

## 「風のお暇」コナリミサト

### 選考員コメント・1次選考

- 読めば読むほど、自分にも覚えのある感覚のオンパレード！「空気を読む」という言葉自体の息苦しさが可愛い絵柄で軽減されているかと思いきや、その愛らしい世界の中に広がるナチュラルな毒でかえってえぐってくるというギャップにすっかり完敗です。ラブコメ、生活の知恵ネタ、風の内面の闘い、すべての配分のバランスがとれているので、風の苦しみに共感して悶えてしまうようなところがあっても、その後によさしいエピソードがあったりして後味が悪くならないところも良かったです。1巻発売前から単行本化を心待ちにしており、発売からは個人的に購入して友人に配りまくりました。そう言う意味で、今年のわたしの中で「友達にオススメしたい」というこのマンガ大賞の趣旨に一番合致した作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- とにかく引き込まれました。「空気を読んでいた」つもりで追い込まれてしまった女子がすべてを捨てて一からやり直す話、かと思っていたら大間違い。この作品凄いですよ。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- いままでいそうでいなかったヒロイン像に釘付け。脇を固めるキャラたちの濃さ（というかめんどくささ）も最高。今後の展開が楽しみでなりません！

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 秋田書店の女性誌ってなんだか昔から独特の魅力があります。こういう傾向だから好き、とは明確に言えないんですが（語彙力）。本作もなんだか、いいんです。主人公の風は、空気を読むことに必死になりすぎて、過呼吸でぶっ倒れた28歳。会社をやめて東京都下の片隅で取りあえずは貯金が尽きるまでとリセット生活をはじめたわけですが、パワハラな元彼はおしかけるは、隣人は人証しの自由人だはで、結構大変。「タイプ違いの選べないくらい素敵男子2人から求愛され、どっちも好きになっちゃった私、モテモテで困る、どうしよう??」がティーン女子向け少女マンガの鉄板骨子ですが、本作はその構造を換骨奪胎していて、残念だけど実際はこうだよな？感が凄まじい。そしてそれがやたら物悲しくもおもしろい。けどもきっとこの先、なんらかの救いや希望が描かれそうで、今後の展開から目が離せません。

菓子研究家 / 福田里香

- 主人公に感情移入して読み進めていたのに登場人物たちのひとりひとりいろんな裏のストーリーを知り最初はなんだこいつ！と思った人の印象が変わり、まんまとだんだん好きに…面白いなあ

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- あーいるいるこういうキャラ的ステレオタイプな描写からの裏切りが心地よい感じ。二面性からのさらに深掘り！みたいな展開も毎回作者の思惑通りに続き気になっちゃう。結果的にどのキャラもとても人間味があっていい。いろんな気持ちがある（c長嶋有）だし。絶妙に古い感じの漫符も個人的にツボ！

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部 店舗開発課 / 大山敏樹

- ルールがあるわけではないのに毎年一作はラブコメを推している私ですが、今季はこの作品を挙げたいと思います。他人の目が気になって本当の気持ちを伝えることができないって、SNS全盛の昨今は多くの人にとってあるある！な気持ちなんじゃないかなと思います。見せる自分と見せたくない自分、なりたい自分と素の自分、作り物の自分を窮屈に感じるときもあるけど、こっちのが生きやすい、こうでありたいと思う気持ちはニセものじゃない。じゃあ、どの部分が本物？なんて考え出したらキリがない。主人公の女の子が作り物の自分に疲れて少し社会から離れて人生を休憩する、というところから始まるストーリー。無い物ねだりで無理をして、彼氏もまた結局は似たもの同士で、すれ違うところもまた同じ。でも、似てるからって、本当の気持ちを伝えたからって、同じぶきっちゃだからって、結ばれるわけじゃないんですよね。あー、あるあるすぎて自分のことのように苦しいです（笑）読んでる側からすると、丸裸にされたキャラクターを愛さずにはられないかも。等身大の悩みを抱えるみんなを応援しています。傍観者、求む！！

会社員 / 宇田川 結衣子

■ 場の空気を読むのは大切ですが、読みすぎた凧が崩壊し、徐々に変わっていく姿に共感できる人多いはず。

コミック担当 / 実松由夏

■ 主人公の凧は会社も家も、パワハラ気味の彼氏もぜんぶリセットして心機一転。自由で、とらわれない自分を手にしたはずなのに、気づけば次のしがらみに巻き込まれてる。脱力系ゆるふわ作品だと油断していると、ヒリヒリ痛い。誰にでも、ひとつやふたつはあるであろう、“黒歴史”がガンガンよみがえる。さっさと手を切ったほうが良さそうなのに、どうもムダにチャーミングな男性陣に惑わされることなく、なんとか幸せになっていただきたいと願っています。凧ちゃんに、幸あれ！

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

## 選考員コメント・2次選考

- タッチの軽やかさがとてもいいです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- とても共感出来る漫画でした。空気を読んで周りに合わせるのは自分自身もそうだし、仕事をしていく上では、特に日本人は良く感じる事だと思います。重い暗い漫画ではなく、さらっと描かれていて読みやすく好印象です。女性読者が多そうですが、是非男性にも読んでもらいたい作品だと思います。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西良昌

- 出てくるキャラクター全てにクセがあり、どうとんでもみんな幸せになりそう感じがないのだが・・・結構、元力レがクズとの意見も見るが、凧も流されすぎ・・・お互いになにか一つ素直になっていれば慎二も凧も上手くいったのにと第三者視点で見て楽しんでます。やはり他人の不幸は蜜の味なのかこの二人の上手くいかなさが面白いです。慎二が諦めて絡まなくなったら凧にはお暇ではなく日常になるのだろうか

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- これはきつこうだ、と思ったことは、見方が違えばまったくちがったものになる。それをおそろしい精度で見せてくれるマンガ。普段そういった物語はあまり好まないのだけれど、このマンガはおもしろい。あ、凧ちゃん。○○さんはやめておいたほうがいいとおもうよ……。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 女心、男心、どちらも勉強になります。傷口えぐられますが。

音楽プロダクションマネージャー / 樋口健

- 出てくる男性の見事なクズっぷり。。。慎二の実は好きだけど優しくできない感じは意地悪を通り越しちゃってるし、ゴンの優しさも天然過ぎてたちが悪い。。。凧ちゃんせっかく変わるために頑張ってるんだから、そこ！大事なそこをふんばろうよ！

カメラマン / 平沼久奈

- やっと素の自分が出せる場所が見つかったと思ったら…落ちてく落ちてく凧ちゃんから目が離せない。いろんな登場人物の裏の面、背後が見えてくると人はぱっとでは判断できないと思い知らされるまんまと最初は嫌いだった慎二が今では大好きに…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- せかせかと忙しく過ぎていく日々ですが、一旦リセットして新しい環境に身を置いてみたい気持ちもある。でもなかなかどうして…、と思っていたところにこの作品ですよ。凧ちゃんの、試行錯誤ながらも前に進もうとする様子を応援しつつ、実生活にも活かしていきたいところ。コナリミサト先生の作品には、常にそこはかたないやささとあたたかさがつまっているので、気持ちに余裕がなくなった時のための常備薬としておすすめいたします。

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

- この漫画をジャンル分けするのなら、なに漫画になるのかなと考えてみました。1人の女性が自分の生き方を見つめ直すことが主題でありながら恋愛漫画でもあり、生活豆知識や暮らしの楽しみを見つける漫画でもある。結果、明確にジャンル分けできないのがこの漫画の魅力だなと思いました。凧の性格や生き方に共感まわってしまう人もいでしょう。また、まったく共感できない人もいでしょう。そのどちらもの人が「面白い」と言って読んでいるこの作品。ジャンル分けできない側面がたくさんあるということは、読む人読む人がまったく違う楽しみ方を出る漫画なのではないかと思います。わたしはこの漫画が好き過ぎて何人かの友人に買って配りましたが、みんなからそれぞれ違った感想が返ってきたのがその証拠です。今度はこのマンガ大賞から読者さんが増え、たくさんの方のいろんな感想がもっと聞けたらいいなと思います。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 恋と生活、というよりも生活の中の恋の位置、という感じ。陳腐な物言いだ人が人には表と裏があり、善悪もまだらに存在するのが世の常なんだなあと読みながら思った。それを丁寧に、ある局面だけでなく両方を描き、光のあたる方へ寄り添って描かれる部分にホッとした。でも、続きはどうなんだ、という気持ちもあったり……。ともかく、薦められなければ読まなかったと思うので、そう言う意味でマンガ大賞ありがとう！的な選考となりました。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- 最初の方は凧にも我聞くんにもイライラして、我聞くんはタコ殴りにしたいと思ってたんですが、2巻では我聞くんの心情が分かって、やっぱりタコ殴りにしたいと思いました。この小3野郎…。凧はだんだんかわいく見えてきた。うらちちゃんの話泣けました。ゴンさんは好きです。初登場時から好きです。が、どうやら地獄の予感…。続きが楽しみでわくわくしています。コメントが小学生の作文みたいすみません。小3野郎は私でした。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 凧がもがいている姿が、たまらなく愛しい。要所要所でしっかりカタルシスを感じられるところも素晴らしいと思います。個人的には作中に登場する料理が美味しそうなのが特にポイント高いですね。

東京海上日動キャリアサービス / 江本ちひろ

- 彼氏の酷い一言がきっかけで、過呼吸に。会社を辞め、ワンルームのアパートに引っ越し、失業保険をもらいながら始めた節約生活。ちょっとした食のアイデアや生活の知恵はまるで伊東家の食卓のよう。そして恋愛も隣人と元彼との関係がどうなるのかとても気になる。魅力的な登場人物が沢山登場し、誰もがみんなそれぞれの個性を放っている。ある種、日常をここまで切り取ったような漫画はそうそうないのでは？

ネットラジオ「ザ・ノイジーズ」パーソナリティ / 北山友之

- ゆるふわに描いているけれど、実は結構ヘビーな話。『解ってはいてもやめられない』をやめたは良いものの、確実に限界が来る『お暇』生活なので、憧れはしても真似出来ないからヒリヒリする。人生リセット、やってみたくけど無理だな、と思いながら読んでます。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出麻悠美

- 周りの空気を読みすぎちゃう主人公の凧ちゃんが会社を辞め全てを捨ててお暇中のお話。絵がキャッチーで可愛くて、キャラクターも個性的なのですが、こういう人達いる！！空気を読みすぎて疲れちゃうときあるよね、馴染めないときあるよね、こんなダメな奴いるよね、そういう言い方する人いるよね、いい子だなあ、ちゃんと言わなきゃ伝わらないよこのモラハラ男！！…ととても共感できます。それから、凧ちゃんの簡単節約レシピが載っているのも嬉しい！白菜とツナの煮浸しや土鍋丸ごとプリンなど実際に作って食べてます♪

声優 / 冨岡美沙子

- 誠実に、素直に生きて、あゝ幸福はつかめない……。心地よい所へ着地するかと思えば、暗い深淵へ落ちてゆく。このままならなさが、クラクラするほどもどかしく、ヒリヒリするほどスリリング。登場する料理もシンプルでうまそう！

朝日新聞記者 / 小原篤

- ドラマ化されたら、面白いですね。テンポが心地よいです。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 空気を読むのに疲れて人間関係すべてリセットした主人公が人生をリスタートさせる話、かと思いきや……。なんだこれ？主人公も元カレもラブコメなのに闇抱えすぎだろ。もちろんラブコメでも暗い心は出てくるが、たいていはライバルに対する気持ちだ。でもそうじゃない。心の闇。辛い。なのにラブコメ。このバランスが凄い。笑った後に思う。気持ちはちゃんと口に出して伝えよう。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- これはもうとにかく、凧にがんばってほしい！応援したくなる。そしてそれは、本当は読者が自分自身を応援したい気持ちなのではないか。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- ああ～～～こういう奴いる～～～！！と叫びまくりました。人生グラグラな凧ちゃんの姿にイライラしたりハラハラしたり。あとレシピが秀逸です。真似します。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- 空気を読む、人に合わせる、凧のような人は結構いるはず。これほどまで、主人公に共感できて、感情移入できる作品は最近なかった気がします。

コミック担当 / 実松由夏

- 今、一番人に薦めたい作品です。自分と向き合って一からやり直す事を決めたのに、周りの人に振り回される。凄く身につまされる話。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 正直ノミネートされた時は、えっと思いました。ただ、読んだら変わりました。この漫画の絵が苦手で、売れてましたが読む気になりませんでした。今回ノミネートされたので読みましたが、今まで読んでなくて後悔しました。主人公の葛藤だったり、ちょっとしたことがなぜか自分のことのように入ってきて、一気に読んでしまいました。絵だけで読まなかったことに反省しました。この作品に思い当たるもの、みんなあるんじゃないかと思います。

マネージャー / 中村哲彰

- ありきたりな日常にある“残酷な空気”の切り取り方がえげつなくリアルで、読むのがつらくて応援したくなって、圧倒的に面白い！フィクションでは収まらないリアリティナンバーワンのタイトルです。物語は主人公とウザい元彼の関係から始まり、登場人物たちの弱さや、表と裏をどこまでも丁寧に描いてあるのですが、伝わってくる感情の揺らぎは本当にリアルです。読んでいて驚くのは、主人公の凧（たち）は弱い自分を認めて、凹んで凹み抜いて、墓穴を掘って掘りぬいて、そうして物語が進むにつれ、実は彼らは逃げているのではなく自分を守るために戦い抜こうとしているんだな、と気づかされることです。そうすると今度はポジティブとネガティブの境界線てなんだろう、とか考えさせられて読んでいる方も悶えるわけです。多分10年前でも10年後でもなく、現代でしか表現できない事象が集約されているのでは？と思えるマンガです。

会社員 / 佐藤優

- 凧がお暇の間に本当の自分探しをできるのか。笑いあり、涙あり、口の中にハートあり。凧の人生リセットを応援したくなる作品です。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 「面白いもの+面白いもの=面白いもの」という感じで、面白いです（笑）この方程式が成り立つのは、案外難しいものだと思っているので、とても良いバランスで成り立っている作品だという印象を受けました。老若男女楽しめると思います。

音楽屋 / 杉本善徳

- 出てくるキャラクターみんなが大好きです。アクが強くて、一筋縄ではいかなくて、でも愛すべき人達ですよ。みんな本当に作品世界の中で生きているなあと思います。主人公・凧ちゃん性格（空気を読みすぎてしまう）は、いまを生きる人達の多くが密かに抱える悩みだとも思うので、それがどう変化していくのか、今後の展開がとても楽しみです。

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 3巻が出て、ますますヒロイン・凧から目が離せない。隣の自由人への執着や、どうやら毒母らしい凧のお母さん、元彼の家庭の事情など、問題山積み。凧だって完璧ないいひとではないわけで、自分の恋に夢中になりすぎて反対隣に住むかわいがってた小学生の女の子にぜんぜんかまわなくなったというエピソードが痛くていい。4巻はこの感情の泥沼から抜け出せるか？が読みどころでしょうか。凧の節約レシピもおいしそうでお得感あります。

菓子研究家 / 福田里香

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

ハルタ / KADOKAWA

## 「ダンジョン飯」九井 諒子

---

### 選考員コメント・1次選考

- 「倒したスライムは食えるのか?」「動く鎧はどうやって食べる?」「ドラゴンは? ゴーレムは?」等々、奇想天外の展開で楽しませてくれています。最新刊では、展開がだいぶシリアス寄りになり、「ダンジョンで出会ったモンスターを食べる!」というテーマが薄くなっているのは残念ですが、それでも大事な要素となっています。でも、シリアス方面の展開もなかなか読みごたえがあります。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 巻を重ねるごとにダンジョン自体の謎に迫っていつているので、これからの展開が気になります。九井さんのことだから一筋縄ではいかないはず…。あと新キャラ含め、登場人物の濃さがどんどん増しているのも良いです。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- 最新刊で新展開あり。なるほど? そう続くのか! と物語が加速した。聞きかじった話ですが、もともとは読み切りで書いたものが、評判で連載になったという経緯らしいですが、それがここまで広がるとは。作者の「連載力」たるや! 短篇作品以外は、連載作なわけで、まんがは完結した作品を発表するジャンルではないという側面がありますから、それは終わりの見えないマラソンを全力疾走しながら、同時に複雑で高度な3つ星料理を作るくらいの難易度だと感じます。そして何度も書きますが、フードまんがとして最高におもしろい。冒険の仲間の珍道中を最高の画力で描いた傑作です。登場するのはゲームにありがちな魔物を素材に、まんがで調理法を描いたメディアミックス料理。おかしなことに私達は、あらかじめ実態を持たない幻の味が一番食べたいのだ。よくよく読むと皮肉すごくも効いていて、作品に通底する批評的な目線がやみつきの味なのです。うまい!

菓子研究家 / 福田里香

- 妹を助けたら終わりかと思っていましたが、気になるフラグを立てて物語に深みが追加されてこの先もまだ楽しめそうな展開です。とにかく! 想像上のモンスターなどを料理する場面は実際には食べられないけど美味しいそうで、お腹すいてきます。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

- 衰え知らずのストーリーテラー九井諒子による、何度読んでも楽しめる、RPGの「ある視点とことん」の作品。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- コミカルな寓話と思って読み進めていたら、ここにきてグッとシリアスな展開に振れはじめた。この予想を軽々と裏切る大胆さが九井諒子の真骨頂だろう。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 5巻で新展開となってきましたが、相変わらずの面白さ! 九井涼子先生の漫画は構成力がずば抜けているので、初の長編連載としてどう描き切るかこれからも楽しみにしています。掲載雑誌の応募者全員サービスでもらえた「手ぬぐい」のデザインがとても素敵でした~!

会社員 / 佐々木つむぎ

## 選考員コメント・2次選考

- ドラクエやウイザードリィに接して以来 30 年、ファンタジーの世界の見方がある意味で根本から覆してくれたのがこの作品です。「モンスターを食べる」、特定の（おいしそう）ものではなく、むしろゲテモノ（スライム、動く鎧、ゴーレム、コイン虫等）をどう料理するのがポイントです。新しい気付きも多々あり、目が離せません。最近の急展開も見どころです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- モンスター料理という独創的なテーマもさることながら、この作品のキモはキャラクターにあると思います。様々な種族が登場する作品ですが、その種族間の思想や理念の違いなど、読んでいてとても妙味深い。妹を助けるのライオス一行も普段はモンスター食を巡るコメディ調なやりとりですが戦闘になるとキリッと引き締まった表情になって緊張感を与えてくれる。本当に読んでいて飽きさせません。まだまだ、もっと多くの方に知って欲しいと思う作品です。この作品を味わっていないなんて勿体ない！

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- ダンジョン潜入系は浪漫！というのもあるんですが、設定や世界観に奥行きがあって作品としての完成度が高い。話が進むほど面白くなってきました。

公務員 / 東くるみ

- RPG やってて、終わってほしくないのとクリアしたいのと、よくわからない気持ちを思い出します。ずっと読んでいたいです。

音楽プロダクションマネージャー / 樋口健

- そう、確かにダンジョンにはモンスターがいっぱいて、冒険中に食料にしたら…とあり得る事なのに漫画では初めて！グルメ漫画？なのか？しかし、モンスターなのに、できあがった料理は美味しそうで…！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- コミカルな寓話からシリアスな群像劇へ。これまで安心して楽しんでいたものが、急に足元がぐらつくような不安に襲われる。ストーリーテラー・九井諒子の本領発揮はまだまだこれからなのかもしれない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- このタイトルは諸刃の剣。ずっと引き寄せられる人もいれば、逆に関心をなくしてしまう人も多だろう。しかし、大人ならばこそもったいないのは「食わず嫌い」。本作品は、タイトル通りの出オチのネタと実はシリアスなストーリーがしっかり共存する稀有な一品。それを可能にするのが、著者ならではの緩急の効いたユーモアととちょっと引いたところから現実を活写するような視点による絶妙な距離感。とにかく大人にこそおすすめの一作です。

会社員 / 矢野耕次

- ショクマンの中ではすでに数年前から秀逸だったダンジョン飯。順当にいけば文句なしのグランプリなんだけど、天邪鬼な心がいよいよ、ここはここは、と囁く。がやっぱり結果、選んだやっぱり 1 位の風格だなど。そんな理由です。

プロデューサー / 小林智之

- 毎回ダンジョン飯が出てくるたびにストーリーを追うことを中座して、味のイメージを脳内で繰り広げて 2 度楽しむことができる稀有な作品！

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 数年前からご飯漫画がたくさん出ていて、私も好きでたくさん持っているのですが、そんな中でダンジョン飯は異色で面白かったです！ RPG でお馴染みのスライムやミミックなどのモンスターが美味しそうに調理されるので、ゲーム好きな人にぜひ読んでほしいです。面白ご飯漫画かと思いきや、芯のストーリーはしっかりとありドキドキしますし衝撃的。ストーリーも気になるけど次は何を食べるかも気になる！！

声優 / 富岡美沙子

- メシ漫画の革命だと思います

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

- 読み始めとっつきにくさを感じたが、だんだんと世界観に慣れた。慣れたころストーリーが展開して引き込まれた。家族で楽しく読める作品。

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

- 安定の面白さ。始めは突拍子なさが面白かったはずなのに、今や心地よさすら感じる。人間の食の恐ろしさよ…。  
医師 / 岸本倫太郎
- タイミングに恵まれず大賞候補として長かった「ダンジョン飯」ですが、新展開を踏まえても既刊6冊というアニメ化のタイミングを見据えても、未だ他の追随を許さない圧倒的なクオリティ&発想であり、ジャンルを切り開いたパイオニアとして受賞すべき作品ではないかと。  
住職 / 蟬丸P
- ダンジョンの謎や冒険者たちの人間模様など、「ダンジョン×飯」のその先の展開からも目が離せません！  
商品企画 / 畑中瀬路奈
- 今年こそ、大賞をとって欲しい作品です。ファンタジーの世界における、謎な部分でもある食事の材料はどこからきているのかを、意表をついて描いている。時には納得、時には目をつぶりたい食材と向き合っているのが面白い。個人的には巻末の「モンスターよもやま話」が毎回楽しみだったりする。  
コミック担当 / 実松由夏
- すでに大人気作品となっており、書店でもメディアでも紹介されまくってますが、やはり何度でも推したい…！5巻では、シリアス展開になってきましたが、相変わらずマルシルは残念で可愛らしく、センシはいいおっちゃん感が半端なく、料理のシーンは笑えます！九井先生の長編で、しかも謎が謎を呼ぶ展開！まだ見たことない九井ワールドに、ますます目が離せません！どう描いてくれるのか、ファンとしてこれからも楽しみです！  
会社員 / 佐々木つむぎ
- 「何度読み返しても面白い！飽きのこない物語」私はそういうマンガを沢山のの人に読んで欲しいと思っています。そういう理由で今回の私の1位は「ダンジョン飯」です。連載を開始してから3年以上が経過している作品にも関わらず、未だその新鮮さは失われていません。今回読み返して発見した複線や登場人物のちょっとした表情や動きが、ずっと読んでいたと思いました。初めて読んだときのことを少しお話ししたいと思います。ダンジョン飯1巻が発売されたとき今までにない斬新な設定に「このマンガは絶対面白い。」という確信が発売される前からありました。というのもダンジョン飯と同じような世界観のファンタジー作品はRPGのような冒険ファンタジーものでどこかで読んだことのあるような既視感がありました。まったく同じではない作品なのに飽きてしまうのは致命的です。でもそれがなかったのです。それもそのはず、冒険しているダンジョンに現れるモンスターを調理して腹を満たし旅には欠かせないエネルギー源にするのですから。そして実際にはない料理なのに具体的な調理方法を記していて、想像するだけでお腹が鳴りそうでした。表現力、発想力、そして秀逸な物語、ノミネート作品の中で抜きん出ているかと思います。  
丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子
- 1巻が発行されて既に数年。その発売当初から大反響だっただけに正直「鮮度」は落ちます。が、実力は十二分。未読の方には是非読んでいただきたい作品です。  
本と文具ツモリ / 津守晋祐
- 安定のノミネート。マンガ大賞にノミネートされなくても続刊が出たら買ってしまう作品です。  
ブックファースト新宿店 / 渋谷孝
- ただただ面白い漫画。初めて読んだ時の衝撃未だに忘れないです。そして、未だに読み返しても楽しめる。ファンタジーの食の部分を取り取る考えに脱帽です。こういう、みんなが楽しめる漫画がもっと増えて欲しいと個人的には思っています。老若男女楽しく読める漫画です。  
ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村哲彰
- 深く深く潜っていくためにあるダンジョン。ダンジョンには、モンスターがいる。戦わなければならない。しかし、腹が減っては戦はできないわけで。何を食べる？街から運んできた食料はいずれ尽きる。最も合理的に考えるなら、食べるべきはモンスター。サバイバルの極意が詰め込まれた上で、あくまでポップに、しかしリアルに、ひたすら面白く描かれるファンタジー。毎年、新しい面白い漫画は出てくるけど、やっぱり投票してしまうのであった。  
音楽家・農家 / 谷澤智文

- ダンジョンに生息するモンスターを美味しくいただくマンガ。ダンジョンマスターでスクリーマーの肉食ったり、ちょっと毛色は違うがミュータント犬のグリルで RAD 回復していたりする人はマストバイ、マストリードな作品。如何にモンスターを美味しくいただくか、を通じてモンスターの生態系や、ファンタジー世界の文化・文明論が垣間見える「世界観ごっこ遊びマンガ」でもあるのが面白いかな。2017年にでた5巻で冒険には一区切りがついて、これまでの、冒険をしながら淡々とモンスターを食っていくスタイルからは外れたのが良くもあり悪くもあり、今後の展開が楽しみでもあるな。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第貳齋藤

- 何度も何度も書きますが、フードまんがとして最高におもしろい。冒険の仲間の珍道中を最高の画力で描いた傑作です。ぜんぜんゲームをやらないわたしでも、これはゲームのお約束をギャグにしたり皮肉ったりしているんだな、とちゃんとわかっておもしろいってすごい構成力だと思います。ゲーム好きにはたまらないだろうなと想像にかたくない。最新刊で新展開があったのも押した理由です。まだまだ連載は続きそうなのもたのしみです。

菓子研究家 / 福田里香

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

週刊少年マガジン / 講談社

## 「不滅のあなたへ」大今 良時

### 選考員コメント・1次選考

- 『聲の形』の大今良時先生の最新作、ファンタジー作品？と気軽に読み始め、ほどなく愕然。たしかにファンタジーの要素はあるんだけど、「ファンタジー」の枠に押し込めるなんてとてもできない。予想はほとんど裏切られるし、安易なハッピーエンドに連れて行って欲しくない。でも、虐げられている存在への視線はどこまでも優しい。どこにたどりつくのかわからない壮大な旅に連れて行って欲しがる作品です。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- よくよく練られたものすごい世界観だと思います。人が人であるためには、人を人たらしめるには、ということを手帳に追っていく作品。観念的で難しいテーマかと思いますが、ストーリーも絵も設定も細部までぶれずにしっかり描かれているせいか、読み心地は決して重たくありません。人との出会いのなかで、傷つきながら失いながら、その身を持って経験し、獲得していく様は、成長というより進化を見ているかのようです。「人間」を経て、主人公は何になっていくのか、どこに辿り着くのか。目が離せません。この内容で少年週刊誌で連載されていることに当初驚いたのですが、このむき出しの進化の物語こそ、やはりジュブナイル世代に相応しいのかなとも思います。といいつつ、幅広い世代に読んでいただきたいです。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 1巻を読んだとき、なんだこれは！？と衝撃をうけました。1巻が出たときに人に薦めていたのですが、あらずじ説明してと言われても上手く説明できなかったです(笑)読み進めるうちに、こういう物語なのかというのが見えてきて、今後を考えるととても辛い。それでも、主人公を見届けたいとも思ってしまう。

声優 / 富岡美沙子

- 圧倒的な世界観。次々と気になってしまいページをめくる手が止まらない。前作の聲の形とは全く違う漫画にチャレンジし、読者を引き込む力。本当に凄い一言につきます。

ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村 哲彰

- 根底に伝えたいことは普遍的な気がするんだけど、ギミックが新しい！どこに行き着くのか、この先が楽しみです。

WEB デザイナー / 河本智芳

- 巻を重ねるごとに面白くなって。選ばれなくても、もう買ってるだろうし、知ってはいるだろうけど、まだ知らないという人いればぜひ買ってほしいし、読んでもらいたい。もちろん前作「聲の形」も。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- 不思議で切なくて深くて熱くてかっこいい漫画。

PENICILLIN / HAKUEI

- 時代と場所を超え、「フシ」という媒体を通して受け継がれる人の営みの行き着く先はどこか。新世代版の「火の鳥」を思わせる、スケールの大きさに圧倒されます。ミニマムなテーマの作品が多い近年、真正面から人間を描こうとする姿勢と力量に感服しました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- マンガ界に一石を投じたある種の"問題作"、『聲の形』の作者による新作。キャリアや年齢に比して(と申し上げるのはたいへん失礼ながら)、なんとスケールの大きな世界観を描くのか。正体不明の何者かが人になり、動物になり、さまざまな有機物に姿を変えていく。今後、ストーリーは何を目指し、どう展開するのか。この作品は、生命、意識、存在とは何かということ突きつけてくる。万人が好むタイプの作品ではないかもしれないが、それでも一度、この壮大なスケール感にぜひ一度触れていただきたい。

編集者/ライター / 松浦達也

- 限りある命と共に過ごす日々が、不滅の何かを何者かにしていく命の物語。何度も繰り返す別れが、少し切ないです。

教師 / 持丸宏司

- 次第に氷解してゆくストーリー。じっくり楽しめる作品です。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 選考員コメント・2次選考

- 「フシ」の変身できる条件なども少しずつ明らかになってきて、最初は話すことも出来なかったのが考えるようになり意思をもって行動し始め、巻を増すごとに面白さが増してきている。まだ1年ちょっとしか連載してないとは思えない。「聲の形」も「不滅のあなたへ」も主人公の成長を見ていくのが楽しい。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- 考えさせられることが多く、胃と胸がずきゅずきゅする。読んでてしんどい。疲れる。それでも、先が気になって読み進めてしまう。「知らないというのは、ある意味しあわせ。絶望しなくてすむ。」という作中の言葉が忘れられない。

主婦 / 赤坂真実

- 難解なのに面白い。異端なのに普遍。他と見分けることが可能な絵姿をした主人公を軸に物語が展開するのがマンガだとしたら、この作品は普通のマンガのセオリーを超越している。なんせ「主人公」は決まった絵姿を持たない「思念」なのだ。つるつとした球のような思念が思考し、経験を積み、つまりは「成長」していく過程を、週刊少年マガジンというメジャー誌ではありえないほど丹念に描く。それはもはや奇跡だと思う。ポイントは主人公たるこの思念が「不死身」であることだ（思念だから当たり前とも言えるが）。生きとし生きるものは思考や思索、経験や学習の成果を「知」として口述したり、記録に残したり、遺伝子に乗せたりして次世代に託す。そこにドラマが、物語が生まれるわけだけど、この作品の主人公である思念（フシという名で呼ばれる）は死なない。未来とも、中世とも、そもそも地球上とも明示されない世界で、狼だったり、狼を友とした孤独な少年だったり、宗教儀式の生け贄にされる少女だったり、少女を襲う猛獣だったりする、ある期間に関わった相手（他者）のカタチをコピーし、生体的なダメージを受けても再生することで、思念はただ長い時間を渡っていく。しかしそうであっても、やっぱり「成長」はある。ことばを覚え、コミュニケーションし、感情をはぐくむ。生きるのにつきもののそんな営為を描くことが本作のテーマに違いないと勝手に思っている。そんな営為がもたらす自己と他者の関わりこそが普遍的なドラマになるのだから、主人公がカタチを持たない思念であっても構わないのだ。むしろ、思念と関わる他者こそが主人公なのかもしれない。フシの親友となる仮面の少年・グーグーと彼の属する世界の、なんていとおもしろいことだろうか。

会社員 / 天野賢一

- 命というものの意味について怖くなるほど深く考えさせられる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 一次選考では「きっとこれは他の方々からも挙がることだろう」と思い他の作品を選んでしまったのですが、やっぱり挙がってきましたね！と納得の作品。生命とは何か、死ぬとは何か、人の想いとは何か…。たくさんの「何か」をフシとともに考えていくことが、ある時は辛くもありまたある時は喜びでもあり、自分でコントロールできないくらいに感情が揺さぶられます。生命と死がめぐりめぐる重いテーマの物語でありながらも、掲載誌は週刊少年マガジンなので子供から大人までどの年代の方が読んでも心に響く絶妙な温度で描かれているのもすごいと思います。大事な人たちとの永遠の別れを何度も経験し、多くのものを学んでいくフシ。フシが良くも悪くもどんどん人間らしくなっていくことで彼がこの世界でどういう存在になっていくのか、読むことで一緒に旅をしながら見届けていきたいです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 繊細な絵で紡がれる人間ドラマ。人の心を徐々に獲得していく「フシ」を通して読み手もまた人の心を得ていくかのような表現が秀逸だと思いました。

会社員 / 工藤圭

- 新解釈の『火の鳥』という印象。壮大なテーマながら人物や場面の描写が丁寧なので読み易いです。こういったお話を続きが気になるように構成している点も見事。どこをとってもレベルの高い作品だと思います。

東京海上日動キャリアサービス / 江本ちひろ

- 作者が前作で描いた、人間が人間であるがゆえに抱えるコミュニケーションという行為の限界と、しかし同時に存在する可能性。本作ではファンタジー世界という新たなフィールドを得たことで、より鮮やかに、そして多様に、コミュニケーションが持つ可能性と希望が描かれています！

会社員 / 矢野耕次

- 死ぬことのない不滅の主人公・フシの目を通して、人間社会の歴史を原始に近いところから追体験できるような作品です。読んでみると、作者から直球で「人間とは何か」を問いかけてられているような気になります。悲しいことや辛いことの多い話なので読み進めるのにとってもエネルギーを要したのですが、読み終えた後、いつまでも心にひっかかるような強い力を持った物語なのですよね。タイトルにある「不滅のあなた」が本当は誰のことを指すのか、最後まで読んでみないとわからないのかもしれませんが。

映画館スタッフ / 堀江千秋

- スケール感のある物語の一方で、ひとの生き死にに丁寧に触れていて、漫画として読ませるなあと思った。

大日本印刷 / 佐々木愛

- この人の才能はどんな形に結実するのだろうか。"問題作"としても話題を呼んだ『聲の形』の作者による新作。まだどこかあどけなさの残る作者が描く、とてつもなくスケールの大きな物語。正体不明の何者かが人になり、動物になり、さまざまな有機物に姿を変えていく。ストーリーが何を目指し、どう展開するのか、まだ見えない部分もあるが、その不透明感にすらワクワクする。この作品は、生命、意識、存在とは何かという抽象をさまざまな形で突きつけてくる。壮大なスケール感にぜひ一度触れてほしい。

編集者/ライター / 松浦達也

- 永遠に生きる主人公の傍で、先に失われていく命。でも、共に過ごした日々も、切ない別れも、ずっと覚えていられたら・・・。

教師 / 持丸宏司

- 主人公の出会い、別れを読んでいくたびに、この漫画のタイトルがじんわり心に沁みます。起承転結の転が毎回素晴らしく、毎回読むたびに足元のおぼつかない様な不安な気持ちに落とされ、そしてその後に訪れる悲しい別れの中に、救いのような温かみを味わえて、読み終えた後にいつも大今先生の力量に圧倒されます。

バンドマン / TA-SHI

- 感情や自我を持たなかった「フシ」という存在が様々な出逢いや別れという「刺激」をきっかけに成長（というか進化？）していくという物語。生命について俯瞰で見ているかと思えば感情や自我を持つにつれて、生命について深く考えていく話になってきました。様々な人や動物との別れは悲しいものですが、それによる「フシ」の成長と「ノッカー」との戦いもどうなるのか気になります。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- ストーリーを中心キャラクターたちが変わるからか、一気にテンポが良く読み進みたくなる。これからの展開が楽しみな作品。

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

- 不思議な世界観で、凄く引き込まれました。続きが気になります。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 日本のマンガ・アニメ文化の蓄積の上にながら、ゲド戦記などの哲学的な海外ファンタジーの影響も強く感じる。生きること、考えることとは何か、読者にも常に問いかけてくるマンガ。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- みんな自分の人生を一生懸命もがいていて、その姿にグッときました。あと幼女が可愛い…。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- 「流して」描いているなど思わせるようなところが一瞬も現れない（流して描くようなマンガもありだし、大好きなのだが）。壮大なテーマをどこまでも真摯に描き切ろうとする作者の姿勢に敬意を表したくなってくる。このまま最後まで走ってほしい。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 主人公フシが関わった人の死によって、その悲しみを乗り越え成長していく過程が共感し、没入できる。

明文堂書店 商品部 / 木村俊介

- 主人公は何者なのか。主人公を追うのは何者なのか。たくさんの謎を投げかけながら物語が進んでいく。読み始めたときの「きっとこういう物語だろう」「こんな世界が描かれるのだろう」という予想は早々に裏切られる。まったく想像もしていなかった方向に大きく舵を切られる物語に、必死でついていく楽しみを味わわせてくれる。どちらかというと無機質な気配を漂わせていた主人公は無数の喪失と獲得を繰り返し、どんどん、人間らしくなっていく。これからどこに行くのか。その旅にどこまでもついていきたい。そんな気持ちにさせてくれる作品です。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 前作とまったく異なるテーマに挑むと知った時に若干の不安を覚えたけれど、すごいクリエイターというのは表現したいものが内側からどんどん溢れてくるのかもしれない。「無」から始まったフシが多くの人や生き物に出会い、経験を積んでゆく。出会いと別れを繰り返し、それがフシの身体の一部になっている。この作品ではズバリ経験がフシの肉体を構成しているわけだけでも、私たち自身を創り上げているのもまたこれまでに出会ってきた人やモノ、経験なんだなあという気づきを与えてくれた。

三省堂書店 / 内野智未

- これは、「火の鳥」だ。「聲の形」で緻密に現代の我々の半径5メートルを一ミリも違和感なく描いていた、最強の描写力を持つ大今良時さんが、ここで描いているのは時代も洋の東西も過去も未来もわからないファンタジー。しかも、その世界を、フィクションではなくドキュメンタリーかのように眼前に持ってきてくれてる、のだ。冲方丁さんと去年話をした時に、『『マルドゥック・スクランブル』と一緒に仕事して『食われる!』と初めて思った』とおっしゃってましたが、現段階の作品ももちろん面白いのですが、どう考えてもテーマが「命」「生きること」なので、いまを超越した作品、そしてとんでもない作家さんになっていきそう。それにしてもグーグーは熱い。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- やや観念的な作品ですので読む人を選ぶのかもしれませんが、だからこそたくさんの人に読んでいただいて色々感じてもらいたいと思う一作です。ヒトがヒトとなるには、ということをも主人公に寄り添って共に体験し、失い、獲得していける気がします。感受性の強い世代にこそ読んで欲しいと一次選考の時にはコメントしましたが、ちょうど育児中の私にとって、命とは何か、人を育てるということはどういうことかを今一度反芻した作品でした。読む人それぞれの根幹にある、人である、というアイデンティティに何かしら刺さるものがあるんじゃないかなと思います。エンターテインメントというにはあまりにも痛々しい物語ですが、より多くの人に手にいただきたいです。

会社員 / 宇田川結衣子

- 冒険モノとしてのドライブ感と、人間ドラマの繊細さが、絶妙なバランスで融合しており、読んでいてすごく楽しいです。主人公はすごく特別な存在のハズなのに、どこかで、ふつうの人間の一生とも通じるところがあり（誰かから何かを学ぶことで大人になるとか、大事な誰かのことをいつの間にか忘れてしまうとか）、非現実的な話なのに共感している瞬間もあるのが、個人的にはすごく好きです。

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

週刊少年マガジン / 講談社

## 「ランウェイで笑って」猪ノ谷 言葉

---

### 選考員コメント・1次選考

- 今、毎週読むことを最も楽しみにしている作品です。少年誌で向きではない（ように思える）「ファッション」を題材にしながらも、キャラクターたちの魅力にぐっと引き込まれ、心を奪われてしまいました！

ゲーム会社 / もちづき かずよし

- ファッション・モデル業界を舞台にした漫画作品は複数あるが、その中では珍しい少年漫画らしい熱い成長ストーリーで、シンプルにワクワクする

会社員 / 齋藤隼

- 恵まれた環境の中で育ち、恵まれなかった身長でも前向きにモデルという夢を追いかける少女と、恵まれない環境の中で育ち、類まれな才能を持つデザイナーの原石である少年が切磋琢磨して成長していく姿がとてもいい。所々に一枚絵が挟み込まれ、読み手を引き付ける魅力があり、画も素晴らしい。あと目力がいい。夢を追いかける少年少女に読んでほしい。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- モデルとファッションデザイナーを目指す、若き二人の物語がいいですね。まだこの始まり感が今後のマンガの展開を色々想像させてくれます。厳しい世界の描写がまたいいですね。

デザイナー / 平沼寛史

- 王道少年漫画。これに尽きる。次から次へと事故や事件やトラブルが起こり、謎の人物が現れ、難題奇問を乗り越えて成長していく主人公。これをスポーツではなく、ファッションという世界でやっている。ファッションなんか欠片も興味がない人間が読んでもすごく面白い。すごいんじゃないだろうか。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

- 熱意と才能のある若者と、それを支える大人との関係。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

## 選考員コメント・2次選考

- 才能と情熱のある若者と、お膳立てして鍛え上げる大人が上手く噛み合っていました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 服飾業界を舞台にしていますが、まぎれもなくスポ根のストーリー。なかなかうかがい知れない業界の裏側も描かれて、ストーリーを輝かせる綺麗な絵。もっと世に広まってほしいマンガです。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- ストーリーが主人公男女二人の目線でそれぞれ描かれているのが面白い。一人はモデルでパリコレを目指す少女。一人はファッションデザイナーを目指す少年。それぞれが逆境を超えながら、逆境を糧にしながら乗り越えて目指す一本の道。熱いものを感じました。また、大事なシーンの表情や立ち姿に惚れ惚れします。魅せる漫画でもあると感じました。今後二人の目指す先にどんな障害がありそれを乗り越えていくのか、楽しみです。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西良昌

- やりたいことがあるならば、なにもかもふっとばして先に進んで欲しい。主人公たちにはその言葉を贈りたい。柳田さんの着てた最初のドレスがとても好きだなあ……。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 叶ったか、挫折したかは人それぞれですが、将来への「夢」って誰しもが思い描いていたと思います。そんな「夢」へと向かってひたすら走り続ける千雪と育人に共感しないはずがない。本当に心から応援したくなる作品です。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- 「わたしの人生全部がああ場所に行きたいって叫ぶの」、このセリフひとつからほとぼる熱量に圧倒されます。ふたりの主人公の諦めない意志に鳥肌がたつ、これぞマンガの醍醐味！「俺とお前で世界をとろう」なんて劇画時代からある定番のストーリーを、ファッション業界を舞台にモデルとデザイナーでやる（しかも「少年マガジン」で！）ってところには「やられた！」って感じました。東京コレクションでのクライマックスでは、この物語は「夢を追いかける話」というだけでなく、まさしく「世界を変える」ものなんだって確信できます。あれほど大きな山場を序盤で見せてくれたあとに、ぼっと物語世界が広がっていく感覚にもわくわくしました。家族のこと、職場のこと、業界のこと、そして将来のライバル。どのシーンもひりひりするような意志に溢れていて泣かされます。まだまだ物語は始まったばかりですが、この勢いはとにかく今読まなきゃ！って思えます。

会社員 / 末永龍介

- 近年稀にみる、完璧な1話。まさに掴みはOK！という感じ。主人公たちの境遇や才能が過不足なく語られ、それでいて説明臭さが全くなく、ラストはこれからの活躍を期待させるワクワク感に満ちている。もちろん2話目以降も面白いのだが、とにかく1話が素晴らしい。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

- 登場人物同士のやり取りやストーリーの見せ方に作者の個性が光っている。その個性と少年漫画らしい熱いストーリーとを両立したユニークな漫画になって欲しい。

会社員 / 齋藤隼

- 毎日たしかに着ている服、なのに、その実作の裏側はまったく、まったく知らない…！それをビビッドに知ることができるお仕事マンガの王道！なのですが、それが少年マガジンに連載されている衝撃。こ、このクオリティの絵、そして読者が飲まれるような新しいファッションデザインを次々画面に乗せてくるなんて！主人公が才能があって努力家のいいやつスポーツマンが王道ですが、クリエイティブな主人公で才能があるのにいいやつ、逆にヒロインは無意識に人を傷つけることもあってそれにまた後悔もして異様に行動力もある、というあんまりなかったパターン。ページをめくった先に、新しいデザインか知識かキャラか、何が出てくるのかが常に楽しみ！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- ページを繰らせる力がすごい！毎巻あつという間に読み終えて「え、もう終わり？」とってしまう。エンタメとしての絶対的な強さみたいなものに惹かれた。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 千雪と育人の切磋琢磨感。若い子の初々しさ。お母さん目線で頑張れー！と思って読みました。実写で観ても楽しめるようなマンガでした。

カメラマン / 平沼久奈

- 個人的ですみませんが、服は基本ユニクロです。なので価格・機能性重視なのですが、ランウェイを読んで世界観は変わりました。業界をまだ深くまでは描いているわけではないと思いますが、華やかなファッションショーの裏での戦場や服飾の厳しさ大変さも垣間見つつイラストも映える作家さんですので気に行き読んでおります。

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉雄

- 物語の最後まで到達した時に、このタイトルがどれだけ生きてくるのか、それを見届けてみたいです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 少年漫画だけどファッションモデル？と思いましたが面白い！あきらめない心に自分も励まされます。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 熱意と挫折、努力、諦めない気持ち。そういったものを正面から描こうとする強さと、優しさが嬉しい。勝手な希望だが、主人公や創られた服の魅力がもっと伝わるとさらに人に薦めやすい気もした。こういった場所に着地するのか、これからが楽しみ。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- 主人公2人（育人と千雪）の成長を同時に追えるのが、とてつもなく気持ちが良い！それぞれの立場で感情移入がしやすいと同時に、見守る立場でもストーリーが楽しめる上に、捨て回がないのはただただ驚かされました。また、嫌味なキャラクターや無駄なキャラクターもほとんど出ることがなく、風呂敷を無駄に広げることもない展開で、専門的な知識がなくても楽しめることから、性別を問わず、幅広い年齢層を夢中にさせる作品だと感じます。主人公の設定背景を考慮すれば、もっと重苦しい見え方になってもおかしくないのですが、悲壮感や後味の悪さはなく、むしろバトルや冒険をテーマにした作品の人気回のような爽快感を感じ、何度も読み直してしまいましたし、展開が分かっているにもかかわらず楽しめるのがスゴいなぁと思います。

ゲーム会社 / もちづきかずよし

- 158cmの小柄な少女がスーパーモデルを、そして経済的に厳しい家庭の少年がデザイナーを目指す物語です。最初、タイトルだけで勝手に少女漫画なのだと思い込んでいましたが、どうしてどうして、胸が熱くなる王道の少年漫画でした。小柄でも気の強い女の子と、実力があっても気の弱い男の子という組み合わせもよく、これから二人がどう切磋琢磨して成長していくのか楽しみです。物語はまだ始まったばかりという感じなので、これからの期待を込めて投票します！

映画館スタッフ / 堀江千秋

- 諦めても諦めきれない夢のために自分を奮い立たせ、一生かけても叶わない夢を叶えるために、一生をかける覚悟。読んでいて心が躍り、胸が熱くなります。

教師 / 持丸宏司

- ケレン味たっぷりの感動への演出が気持ちよく刺さってくる。たった3巻の間で主人公とヒロインの決意、記者の脱皮で2回も涙腺が緩みました。

往来堂書店 / 三木雄太

- 題材がとてもいいですね

ホームパーティー研究者 / 高橋ひでつう

- ファッションに興味があるので単純に面白かったです。昨今ではモデルの痩せすぎ問題などもありますが、やはりモデルの方の体型維持やウォーキングに対するプロ意識はスゴいと思いますし、デザイナーやパタンナーの方も常人にはない発想を持っていてワクワクさせられます。この作品では画力にはまだ未熟な部分を感じますが、それを補って余りある熱量を感じました。作品の先を楽しみにしています。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 男女問わず読めて、夢がある作品。読んでみて初めてタイトルの深い意味が分かる。

明文堂書店 商品部 / 木村俊介

■ 高校生の少年が、卒業してすぐプロのファッションデザイナーになることと、158センチしか身長がない少女が、ファッションモデルとしてパリ・コレクションのランウェイに立つことでは、どちらがより困難なのだろう。先に挙がるとしたら、やはり158センチの少女がパリコレのショーモデルになることか。数多くのブランドなりデザイナーがショーを開いて新作のファッションを見せようとする中で、そのフォルムを圧倒的な肢体でバイヤーに伝え、ジャーナリストに伝えるモデルには、やはり高い身長が必要だ。幾つものファッションをモデルたちが着替えていくこともあって、ひとり158センチの少女を混せて専用のファッションを何着もデザインする手間はかけられない。もっとも、そんな常識がファッションモデルの世界に今なお濃く残っているのかと思ったら、だんだんと変わり始めているらしい。ミュージシャンで音楽プロデューサーでもあるカニエ・ウェストが手掛けるファッションブランドYEEZY（イージー）のランウェイに立ったアミナ・ブルーの身長は155センチ。トップモデルから20センチから30センチは低い。それでも、コンパクトながらもメリハリの利いたボディにYEEZYのどこかハードさが残ったファッションをまとい、ランウェイから、そしてファッション誌のグラビアから強烈なパワーをその視線と共に放ってみせた。カニエ・ウェストという本業がミュージシャンで、ファッション界では異端だったからこそその起用であり、名だたるプレタポルテによるパリ・コレクションなりミラノ・コレクションへの抜擢ではないと言える。とはいえ、そうした固定観念がいつまで続くかはもう誰にも分からない。価値観が多様化する中でファッションデザイナーがあらゆる場所を舞台に、あらゆる層にとってビビッドなデザインを送りだそうとするなら、180センチを超えるモデルがまとう衣装だけでは追いつかない。猪ノ谷言葉の『ランウェイで笑って』に登場する158センチの少女、藤戸千雪がそのスキルを発揮し、持って生まれたボディのままパリとミラノとニューヨークのランウェイを歩くのも、そう遠い話ではないのかもしれない。何より千雪には思いの強さがあった。ファッションブランドを運営する父親と、ファッションモデルを集めた事務所を運営し、自らもパリ・コレクションのランウェイを歩いた母親を持つ千雪は、子供の頃からショーモデルになるという夢を抱いて歩くこと、ファッションをまとうことの研鑽を重ねてきた。身長だけが伸びず、常識としてショーモデルとしては難しいと思われていたところを、自身にピッタリとあったファッションをまとうことによって大逆転に成功した。世界の女性のすべてが180センチを超えていないのなら、160センチの女性にだってアピールするファッションはあって、それを全身で着こなすアピールするファッションモデルがいても不思議ではない。藤戸千雪という少女のストーリーからそんな道が浮かび上がる。もっとも、そのためにはアミナ・ブルーにカニエ・ウェストがいたように、藤戸千雪にも彼女の最大を引っ張り出すファッションデザイナーが必要だ。『ランウェイで笑って』ではそこに都村育人という高校生の少年が登場する。母親が病気で入院し、3人の妹たちを学ばせ大学にも送り出したいという思いも一方に抱きつつ、本心からファッションが好きだから大学よりもその道に進みたいと思っていた育人は、同じ高校に通っていた千雪のために服を作り、それがストリートファッションのコーナーで紹介されて評判を呼んで、千雪の父親から会社へと誘われる。高校生が大学にも専門学校にも行かないでファッションデザイナーになる、ということも案外に容易いかというとプロの道は甘くなかった。やはり経験の問題があった。そして独学でしかファッションを実践していない育人にはセンスはあっても技術がなかった。これではプロの仕事は任せられない。とはいえ迷惑をかけた育人が持つ才能を気にした千雪の父親は、育人を気むずかしさはあっても良いものを作る新進気鋭のデザイナー、柳田一のところへと送り込む。案の定、基本を知らない育人は柳田の不興を買う物の、そこにしがみつくしかない状況、しがみついてもファッションデザイナーになりたいという熱情、そして現場で学びながら実践して且つ期待を超えてみせる才能を見せて、柳田が出た東京コレクションのショーで起こったトラブルをしのいでもみせる。偶然だったかもしれない。藤戸社長のいたずら心もあって送り込まれた千雪がいたからこそ、発揮された火事場の馬鹿力だったのかもしれない。それでも、目の前に現れた158センチのショーモデルをランウェイに立たせて衆目を集めるファッションを仕立てる才能を、育人は見せて柳田に認められてファッションデザイナーとしての道を歩み始めた。常識ではありえない、現実には起こりえないことだとしても、それがいつまでも真理として通用するとは限らない。現実には155センチのファッションモデルがランウェイを歩いているのだから、高校を卒業して間もない少年がファッションデザイナーとしてデビューし、人気となることだって起こりえる。そんな可能性を見せてくれるマンガであり、ファッションという世界の厳しさ、ファッションモデルという存在の表からは見えない裏を教えてくれるマンガ、それが『ランウェイで笑って』だ。第3巻、すさまじい才能の登場が育人をどう変えるかに興味を誘われる。とりあえずスチールモデルの道を歩みつつ、ショーモデルへの道も諦めないで模索し続ける千雪との“再会”を経た先に来る、素晴らしいファッションとファッションショーの世界が今から気になって仕方がない。

- ファッション業界を舞台とした王道の少年漫画。ピンチをチャンスに変えて乗り越えていく小さなモデル・千雪と駆け出しのファッションデザイナー・育人の姿に、読むたびに、元気と立ち向かう勇気を貰える。才能という意味で対極にいる2人の関係性を軸にしたしっかりとしたストーリーが、「空気を変える一瞬」の描写の美しさ・印象強さによって活かされている。モデルもデザイナーも、登場人物の「動き」が重要になることから、表現面では、得意の「静」の絵のみならず、躍動感ある「動」の絵にも磨きがかかれば、さらに読み応えが増すと思われる。才能を見出された育人だが、今後もこれまでの勢いそのままに伸びていくのか。熱く、緊張感のあるストーリー展開を期待したい。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村量一

- むかしむかし『モンシェリ CoCo』や『ミニの女王』なんかを読んでいた頃を思い出した。ごめんねオバチャンだから古い漫画しか出てこないのよ。でも主人公がファッションデザイナーを目指して「戦う」漫画は、最近見ていない気がする。なぜ少女漫画から生まれてこなかったのかと悔しくなるほど、少年漫画の王道を行くファッション漫画。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

モーニング・ツー / 講談社

## 「とんがり帽子のアトリエ」白浜 鷗

### 選考員コメント・1次選考

- 圧倒的な世界観と、その世界をさらに広げる画力の素晴らしさ。他にあまり見ない、そして漫画だからこそ生きる「描く」魔法という設定の良さもさることながら、智慧で道を切り拓く主人公の描き方も説得力がありました。どんどん読まれて欲しい作品です。

会社員 / 工藤圭

- 緻密な絵と魔法の世界に魅せられる新進気鋭の漫画。絵は何度も見てしまうほど独創的で、アートブックと位置づけることもできる（実際画集がセットになっているのが購入動機になるほど）。お話は魔法使い見習いの少女ココの成長物語を基礎としているが、最初からずっとある不穏な空気がこの漫画を支配していて、大きな絶望へと繋がりそうな怖さを秘めている。だが、その悲しさこそがこの作品の骨を作っている。壮大な中盤へと進みそうでとても楽しみだ。

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

- 初めて使う魔法にワクワクする気持ちが抑えきれない主人公。「知らざる者」だからこそ出来るようになる喜びに溢れていて、縛られない発想にドキドキします。魔法使いの弟子の4人で作った「ドラゴンをダメにするクッション」にはクスリと笑ってしまいました。

教師 / 持丸宏司

- 繊細で不思議な建物の造形や風景、魅力的なキャラクター、作り込まれた魔方陣や道具の設定、それらを取り巻く不思議に満ちた世界観。どれもこれもとても丁寧に作られていて、心が別の世界につれていかれる気がします。魔法の世界にどっぷり浸りたい人におすすめのマンガ。魔方陣の設定だけでご飯三杯は行けますよ。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬 公将

- ココやアガットたちが悩んだり試したりするさまをみて、この世界の「魔法」って、絵だったり歌だったり、何となく私たちの身の回りにある、いろんな表現活動と似てるなァと思ったりしました。ひとくちに魔法といっても各々で得手不得手が違い、魔法のできることでできないこと、その才能への各々の向き合い方などがこのマンガではさまざまに描かれています。王道ファンタジーと謳われていますが、アイディアがあるけど基礎がない。上手だけど華がない、など、自分で何かを表現することに関わったことのある人にとっては、とてもリアルなイロイロがこのマンガには沢山詰まっているように感じました。当代屈指の美しい絵柄で、隅々まで丁寧に作り上げられた世界で、こんなに活きたお話が読めることに感動です。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- まず第一話の物語の密度が凄まじく、読んだ瞬間に引き込まれてめちゃくちゃわくわくしたのを覚えています。ミもフタもない言い方をすると、魔女っこ奮闘記ですが、こういうファンタジー待ってました！と興奮しました。一話からこんなにたっぷり大丈夫！？と心配しましたが、既に出ている2巻まで勢いもそのままに、ますます展開が楽しみです。個人的に、ファンタジー作品を楽しく読むための重要な要素の一つに「ストーリーの進むスピード」があると思っているのですが、こちらは世界観に置いてけぼりになることもなく、かといってもたつくこともなく、おいしく食べられるタイミングで提供されるコース料理のような、絶妙な物語の進み具合が素晴らしいです。主人公の女の子の純粋なキャラクターもとても魅力的で、読んでいるこちら素直に応援したくなります。それと絵の綺麗さも抜群です！もうファンタジーの優等生と言っても過言ではないと思います。普段なら優等生と聞くと身構えてしまうほうですが(笑)、ここまでよくできていると胸を張って推さないわけにはいきません。普段こういうジャンル苦手だなと感じている人にこそお勧めしたいです。好きなら言わんをや。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 魔法の世界を素敵に描いた作品。絵のテイストと世界観が好感を持てます。まだ拙い魔法を勉強中の子どもたちが一つずつ魔法を覚えていき、失敗し、学んでいく姿がいいですね。子どもながらの魔法の使い方も面白いです！

デザイナー / 平沼寛史

## 選考員コメント・2次選考

- 非常に緻密なタッチ。計算された構図は芸術的でもあります。それもそのはず、作者の白浜さんは東京藝術大学デザイン科卒。美しい絵柄に見とれてしまいます。ストーリーは王道ファンタジー。ところどころの今風な表現がなければ、古典作品なのかなと思ってしまうほどの安心感があります。誰にでも進められる、とても素敵なマンガです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- これはこれは、面白い魔法の話がでてきたものです。特別なインクで正確に書いて魔法が使えるが、それぞれ得意不得意があって、そんなところも今までにない新鮮な物語だと思いました。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 久々に王道ファンタジーな物語を読んだ気がする。異世界転生が多すぎて魔法の価値が下がっていたような気がするが、やっぱり魔法は隠されたもので、一部のものしか使えずが王道。そして、それを何も知らないものに使わせて悪事？を企む組織のような存在。こういうファンタジーを読みたかった。一緒にいる仲間のキャラクターも王道。安心して読め、薦められる一冊。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- あらたなファンタジーの書き手がまたひとり出てきたなあ、と続きを楽しみにしているマンガ。物語が動き出すのが楽しみ。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 王道ファンタジー、まだまだ世の中にはまんがをうまく書ける方がたくさん残っていらっしゃるのだと感じました。魔法使いと竜とまさに王道！この作品はまだまだじっくりと時間をかけて書いてほしい作品です。背景含めその画力のすごさも魅力です。

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉雄

- ぐいぐいと引き込まれる画力とストーリーにワクワクしながら読んでいます。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 外国の絵本みたいな美しさ。すべてのコマが緻密で丁寧で美しい。じーっとガン見しながら読み進めました。キーフリー先生好きです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- これを選ぶしかない！と思わせる構成力と虚構の説得力。画面の持つ力が素晴らしいです。止め絵でも流れのある絵は、それに気づいた時少し背筋がぞくりとしたほど。続きを楽しみにしています！

会社員 / 工藤圭

- 緻密な絵と魔法の世界に魅せられる新進気鋭作。絵は何度も見てしまうほど独創的、アートブックと位置づけることもできる（実際画集がセットになっているのが購入動機になるほどの出来）。お話は魔法使い見習いの少女ココの成長物語を基礎としてはいるが、最初からずっとある不穏な空気がどうにも怖く、大きな絶望へと繋がりそうでハラハラしてしまう。だが、その悲しさこそがこの作品の真骨頂。壮大な中盤へと進みそうでもとても楽しみ。

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

- テーマは「魔法」という、超王道を行く正統派ファンタジー。本作を読んで「そもそもマンガとはファンタジーである」ということを改めて思い出した。この作品は「魔法」「ファンタジー」をとうに忘れた読者を作中に引きずり込み、没頭させてくれる世界観がある。細密な画風も物語の世界にピタリと合うし、どんな魔法がどのように発動するのか、ディテールがわかる自然な説明もとても親切。作中における「魔法」とはある意味ではハイテク。魔法使用場面の高揚感は最新テクノロジーを詰め込んだギアに出会った時のようでもある。「魔法なんて」「ファンタジーとかいうガラじゃない」と作品を遠ざける前に、まずは読んでどっぷり作品世界に浸っていただきたい。

編集者 / ライター / 松浦達也

- 建物や背景、設定や世界観など、すべてが魔法に丁寧で美しく、読んでいると別の世界に迷い込んで旅をしているような感覚に陥ります。魔法の設定も細かくて楽しいし、未熟な魔法使いである主人公があきらめず、発想の力でいろいろなことを乗り越える姿も痛快。わくわくするのに心地いい。魔法にかかったような不思議な感覚をもたらしてくれるマンガです。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬公将

- 魔法使いと見習いのお話ですが、まず白浜鷗先生の画力に驚きました。背景の緻密さや人物の柔らかさ、色使いも素敵で惹き込まれました。またストーリーも絵本のようにわかりやすく、それでいて今後の展開も大いに期待させられる作品でした。「“生きる”ことより教えるのが上手い先生はいない」など大切な事を学べる事も漫画として作品として好感が持てます。まだ理解は出来なくても子供にも読んでもらいたい作品だと思いました。続きも非常に期待しております！

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 描写が細かい絵柄で選考作品でなければ手に取らなかったかもしれない。伏線がつながっていくだろう物語の展開と少女たちの関わり合いや成長がどうなるのか期待したい。

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

- 作者がイラストレーターということで、絵が綺麗でファンタジーの世界観に合っている。絵だけでなくストーリーも続きが気になる。

明文堂書店 商品部 / 木村俊介

- 今作における「魔法」というものが、我々がいる世界のなかの色々なものと重なるなァと思ってやみません。たとえば、魔法陣に必要な円を描くのがうまいとか、描くのが早いとか、あるいは組み合わせ方が独特だとか。それは料理とか、歌とか絵とか、私たちの日常にあるものの得手不得手、スタイル、才能に似ていると思うのです。基礎も何もないけど、気持ちだけで魔法の世界に飛び込んでいくココの姿は色んなことを始めてやってみる、へたっぴなときの私たちのようにも見えます。精緻で温かい画風で描かれていながら、どこか不穏な空気が漂う世界で、ココがどう成長して行くのか、沢山の人の見まもってほしいと思います。

株式会社アニメイト / 岡部真矢

- 絵本の中で繰り広げられているようなファンタジーで、読んでいて次のページめくるのが楽しみで仕方がないです。まだ巻数が浅く、もしかしたら物足りないかもしれないですが、巻数が多くなるにつれてもっとファンタジー感が増し読後感がすごい作品になってくれそう。

マネージャー / 中村哲彰

- 子供の頃に読んでいた海外のジュブナイル小説を彷彿とさせる、オーソドックスながら完成度の高い物語。老若男女全ての世代にお薦めできる漫画です。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

- 読み返してみても、今年を代表する一作だと思います。等身大のキャラクター達はとても身近に感じられますし、テンポのよいストーリー展開はファンタジー慣れしていない方でもぐいぐい世界へ引き込んでくれます。ファンタジー大好きな私は、魔法に憧れる気持ち、忘れてたなあ、なんて初心に返りました。魔法使いの成長譚なんてたいへんな王道ですが、王道ゆえにありそうでなかった題材でもあり、上記の魅力を支える美しい作画もあいまって、たくさんの人の心にまっすぐ届く作品だと思います。

会社員 / 宇田川結衣子

- キャラクター、ストーリー、ヴィジュアル、設定、全てが素敵！なファンタジー！迷わず投票です。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

WEBコミックガンマ / 竹書房

## 「メイドインアビス」つくしあきひと

### 選考員コメント・1次選考

- 美しいファンタジーなのにキャラクターの心情が痛々しくリアルで切ない。

PENICILLIN / HAKUEI

- 萌え系のファンタジーなのかと、最初拒絶反応をおこしそうでしたは、読んだら描写、世界観、全部かっこよかったです。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 特に絵柄は同人誌調なのですが、侮ることなかれ。本格冒険譚マンガです。特徴はよくあるバトルものや恋愛などに一切浮気(?)せず徹底して冒険をテーマに描かれていることです。それが意外と新鮮に感じられるくらいテーマの幹は太く、想像力を刺激する点では純粹です。ただし、それ以外の横道は消して太くはないため、冒頭に描いたように”冒険”マンガが読みたければお勧めなマンガです。が!絵柄は極めて柔らかい(?)ので、そこが全体の雰囲気柔らかくしています。特に読み手の嗜好に対してピーキーな反応を示す漫画ですが、端的な面白さが際立っているマンガです。

会社員 / 佐藤 優

- 恥ずかしながらアニメ放送で初めて読んだコミック。画のかわいさから想像も出来ない(褒めてます)冒険と危険さとグロさがあるととてもギャップが大きく、非常に引き込まれた。主人公たちの冒険心と危険でも前向きな姿勢、そしてキャラの愛くるしさが一気に読ませる漫画。続きが早く読みたい。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 4、5巻で恐ろしい存在感を示したポンドルドというキャラクターがこの作品の魅力を決定づけたように感じます。現世にないものを求めるからこそ深淵に手を伸ばすわけで、そのとき現世と同じ姿のままにどうだなんて虫が良すぎるんじゃないか。現世の常識、倫理、自己同一性、そういうものを捨ててもその先へ向かおうと思えるのかどうか。その残酷で純粹な問いを突きつけられることの快感を堪能しました。

会社員 / 末永龍介

- 恐らく最後、みんな戻れて大団円、ということにはならないんだろうなと思います。行ったが最後戻れないことは十分わかった上で、何があるかもわからないのに何が何でも行こうとする。そんな彼らが最後に何を見るのかがとても気になります。

会社員 / 林礼春

- とにかくかわいい絵柄にハードなストーリーで、表紙のイメージとは全然違う。もしあの表紙の雰囲気「ほんわかかわいいファンタジーかな」と思って遠ざけていた人はぜひ一度読んでみて欲しい。作りこまれた世界観で、植物や動物も空想上のものなんだけどどこもリアル。椎名誠さんのSF作品のような・完全に作り物なのに、生々しい。また、ストーリー展開も実は結構ハード。主人公の女の子がこれまたかわいいが全然甘やかされない。むしろシビアな現実などもバンバン見せられるのも見所のひとつ。正直、たぶん合わないかな?と思って手に取った。でもそのあとすぐに購入しまくり毎日1冊買ってしまっただけはまった。そういう意味では自分の考えを変えさせてくれた作品であった!

会社員 / 西尾美里

- アニメの最終回で号泣してから原作読んだ周回遅れなんですけど猛省を込めて。まだ未完なのでアビス自体の謎は残ったままで、それが何だろう、とワクワクする気持ちとまあそれはもう何でもいいや、という気持ちと両方半分ずつくらい。それくらい今までに描かれた魅力的な世界観と骨太な物語にどっぷりハマった!何回スルーしてたんだ俺…と本当に猛省。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 営業戦略部 店舗開発課 / 大山敏樹

## 選考員コメント・2次選考

- 作者の趣味が生きてると思います。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 想像の上の上を行く世界観に度肝を抜かれた。厳しすぎる「アビス」の困難に何度もハラハラドキドキさせられました。こんな冒険活劇は見た事ありません。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- ナウシカ級の壮大な作品に出会ってしまった、と1巻を読んですぐ2巻のシュリンクを開封。アニメ化された時にあらすじを読んで、お。これは売れそうな予感…と思い、そしてその予感は裏切られることはなかった。今でも売れ続けています。いつかスタート地点に帰ることが約束された冒険ではなく、もう二度と戻ることはできない、それでも知りたい！という小さな2人の冒険に今もまだ胸が熱い。早く続き！読ませて！

三省堂書店 / 内野智未

- 他の冒険マンガはバトルしたり恋愛したりありますが、そんな不純物をギリギリまで削り取った超が付くほどの純冒険マンガです。登場人物があんまりいないからこそ、余計に背景が広大で深く暗く感じるこの漫画は、引くに引けない冒険と理不尽が盛りだくさん！この世界には仕掛けしかないです（笑）。もちろん主人公とそれを取り巻くキャラクターたちはいますし、冒険を乗り越えた先の成長の物語はあるのですが、この漫画の主食はキャラではなく世界背景そのもののように思えますし、そこまで純粋に割り切ったマンガってちょっとないと思います。加えて実はすごいのは、冒険ものですので残酷な描写も盛りだくさんなのですが、だからこそこの幼児的な設定画が際立ち嫌悪感を感じなく先に進めれるのもすごい。そうやってサクサクと読み進めてゆくと、この漫画（冒険）はどこまで行くんだろうと、設定を読むだけでワクワクドキドキできます。考察好き、設定好きにはたまらないマンガです。

会社員 / 佐藤優

- たいへんかわいらしいキャラクターたちが、度し難い危険生物と邪悪な人物がひしめく巨穴「アビス」へと挑むファンタジー冒険マンガ。たいへんかわいらしいキャラクターたちが、過酷すぎる状況のなかで取り返しのつかない不可逆な傷を得るのは、煽情的で、過激で、偽悪的で、悪趣味にすぎて、実質ただのポルノではある、んだろうけど。「だが、それでも進むのが冒険なのだ、それでこそ彼女らの意志は進むことを望むのだ」という輝きを生むのが、たいへんタチが悪い。今後も楽しみだ。アニメ化どうすんだこれと思ったけど、すげえ良かったじゃないかアニメ。みなさんもお好きですなあ…。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第弐齋藤

- 個人的には以前から推薦していた作品なので、アニメ化を経て読者が増えたのか、ここにきてのノミネートには正直なところ驚きました。ともあれ、本当に素敵な作品だと心から思います。

音楽屋 / 杉本善徳

- ほんわかした絵柄に隠された「痛み」と「苦悩」がたまらないです。素直に応援したくなるキャラクターも好み。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

- アニメ化によって「可愛い絵とキャラで展開される王道探検ジャンル・ボーイミーツ&ガール」の皮を被った暴れ馬という存在感を遺憾なく発揮して、タイムラインに「んなー」の嵐を巻き起こした功績は大きく、アニメから原作へという幸せな逆流現象を体現した作品

住職 / 蟬丸P

- かわいい絵柄なのに度し難いエグい作品でした。でもそこがいい。なんでもかんでもサクッと物事が進んでしまう物語を私は読みたいと思っていません。リコやレグが「奈落の底」に近づくにつれ、絶望にも近い経験をしているのにそれでも諦めない姿に胸が熱くなるのを感じました。あまりにもグロテスクな場面で読むのが途中で辛く泣きそうにもなりました。それでも読み続けたのは「こんなに面白い作品を今読まないでどうするんだ」という思いからです。読んでいなかったことが勿体なかったです。これまでの展開を考えるとこれからの旅はよりいっそう辛く、険しいものになると思います。しっかりと見届けたい。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

- 可愛くてカッコイイ漫画。ファンタジーなのにリアルな説得力があって引き込まれる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 怪物を追う者は、自らが怪物と化さぬよう心せよ。おまえが深淵を覗くとき、深淵もまたおまえを見返している。まさしく深淵を探求する物語『メイドインアビス』を読むとき、このよく知られた言葉を思い起こさずにいられません。未知なるものへの強烈な憧れ、それを掴もうとする不屈の意志、それは冒険ドラマのヒーローには必須のもので、日常を暮らす社会においては狂気ともみなされます。冒険から戻らない親を追いかけるという点で同じ構造を持った『HUNTER × HUNTER』でも、主人公ゴンの真っ直ぐ前を見る意志はときに読者からして「イカれてる」とすら思えます。宮崎駿の映画『風立ちぬ』では、主人公の堀越二郎はサバの骨にすら飛行機的设计を重ねる天才肌の夢追い人として描かれますが、仕事に夢中になれば結核の妻のそばでも平然とタバコを吹かし、やはり日常的感覚からするとあまりに異様な人物に見えます。そして重要なのが、彼らのこの狂気こそが物語を駆動し、読み手を日常から解き放ってくれる源だということ。逆に言えば、日常に適合した感性のままに冒険をするだなんて、私としては生ぬるく、虫の良い話だと思えてしまいます。さて『メイドインアビス』の4巻、5巻では、主人公達がポンドルドという敵役と対峙するエピソードが描かれます。この人物は深淵へ至るためには手段を選ばない狂気じみた怪物として描かれていて、非道な人体実験や環境破壊を何の呵責も感じずに繰り返すだけでなく、自らの精神や肉体すら探求の道具として消費していて、すでに日常的な意味での人間ですらなくなっています。彼の行為は本当におぞましく、彼が編み出した「カートリッジ」という技術には絶句する他ありません（ちなみにその内容を知ってから4巻の無邪気な表紙を眺めると、下手なホラー映画DVDのジャケットより吐き気がするという仕掛け）。ですが、いやだからこそ、私にはポンドルドがヒーローに見えるのです。深淵を見つめ続ける彼の憧れ、そこへ手を伸ばす彼の意志……ぐじぐじと悩む凡百の主人公達よりよほど純粹じゃないですか！5巻ではポンドルドと本編の主人公リコがこんな会話を交わします。「君は私が思ってるよりずっとこちら側なのかもしれないね」「私は…ロマンは分かるのよ」この一瞬、日常的な善悪の彼岸——ただ未知なるものを目指すという境地でふたりが理解し合う。もちろんリコはすぐに「あなたはこれっぽっちも許せないけど」と続け、ふたりは激しく対立します。ですが日常に住まう私からすると、ふたりともすでに怪物なのです。生きては戻れない深淵を覗き、深淵から魅入られた怪物たるヒーローたち。冒険ドラマを紡ぐならそれでこそ！と心で喝采を上げる私も、怪物に近付いているのかも知れません。そこで、ああこのマンガそのものがひとつの深淵なんだな、と思い至るんです。

会社員 / 末永龍介

- 映像化と漫画の世界。どちらの世界も「メイドインアビス」であることが損なわれず存在する。1巻が出た当初から、その枠線に惚れっぱなしです。決してナナチがかわいすぎるからといって選んだわけではありません、決して！彼ら・彼女らが探し求めるものが、彼ら・彼女らが見つけたかったものかどうか分からない、そんな展開で今後も目が離せないストーリーテリングと、大穴に広がる限りある底なしの世界観、大好きです。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 鳩岡桃子

- 絵によるイメージが読み進める内に払拭され、その後の展開が楽しみに読ませてくれました。地下世界に広がる冒険ファンタジー。その中で出会うキャラクターがまた印象的で良いです。なんとなく、ゲームの聖剣伝説2を思い出しつつ読んでしまった。そんなRPG的な雰囲気もあります。

デザイナー / 平沼寛史

- 元々店舗でも押していた作品でしたが、映像化に伴いのノミネートだと思います。この作品の良さは、リアルファンタジー（等身大）ではないかと思います。RPGのゲームや凄い能力を備えて無敵の主人公ではなく、一歩間違えば常に死と隣り合わせの冒険…。そしてその独特の世界観も更にその緊張感に一役買っていると思います。絵が独特なので手に取りにくい方もいらっしゃると思いますが、そこは勇気を持って読んでみ欲しいです！

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉雄

- 過酷さ、凄惨さ、そして面白さ、度し難い。

教師 / 持丸宏司

- かわいい……。それぞれのページ、それぞれのコマが、ひとつのイラストとして成立しているように感じられるくらい魅力的でした。自分がファンタジー好きなこともあるのかもしれませんが、絵画のように絵そのものを楽しみながらページをめくることに幸せをおぼえました！ 大好きなものがたくさん詰まったおもちゃ箱をほじくり返した時の感覚、図鑑をずっと眺めているときの感覚に近いかもしれません。本として手元に置いておける幸せを強く感じさせてくれたという意味ではダントツでした。

ゲーム会社 / もちづきかずよし

- 片道切符の冒険の果てに、何が待つのか。決してハッピーとは言えない何かを見るような気がするのですが、それでも結末まで全部見たい、と思います。一番最後まで読まない後悔すると思う作品だったので1位です。

会社員 / 林礼春

- この作品が特別なのは、私自身に限っていうと、絵柄の苦手さを超えておもしろかったことに尽きる。とても可愛い表紙を見て、私は勝手に「自分の好みとは合わないんだろうな」と思っていた。もちろんすごく可愛いんだけど、なんとなく【ファンシー】とか【癒し】みたいな内容なのかな、と思っていたから。でも、読んでみたら全然違った。むしろこのイラストだから、余計この世界のダークサイドが際立っていた。作りこまれた世界観。アビスという「大穴」。そこに住む生き物や自然、アイテムなどの存在感。読めば読むほど深みにはまり、気づいたらすぐに現在までの発売巻までを買い揃えていた。冒険譚としても、主人公達の成長物語としても、そしてミステリーとしても、この世界に没頭できるはず。それもすべてこの「世界」の作りこみのなせる業。絵が苦手と思う人でも、だまされたと思って一度読んでみてほしい。すでにアニメ化された作品だが、ゲーム化されても面白いだろうと思う。

会社員 / 西尾美里

- 古今東西のストーリーのパターンは「日常から非日常に行き、日常に帰る」構造にあるといいます。しかし本作で描かれる、底知れぬ穴・アビスへの道のりの背景には、冒険譚につきものの希望ではなく、死への旅路としての「二度と帰れない日常」があり、だからこそさまざまな出会いと別れのシーンにぐっとくるのかもしれません。穴の底には何が待っているのか。深淵を覗く本能から逃れられない人間の性をついた作品だと思います。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- まさに大穴にどっぷりハマる没入感。エグい。イタい。あと、ちょっとエロい。いや、かなりエロい。対ボンボルド戦は、敵の造形、戦略の緻密さ、どんでん返し、すべて秀逸で圧巻。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 最初は萌え系のやつかー、と思ったら中身は勝ちでした。世界観の設定画が非常にレベルが高く、ストーリーもワクワクするもの。今後の展開が楽しみです。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- アニメが非常に良い出来栄でしたので興味を持ち、原作のマンガを読み始めたのですが、とにかく考え込まれ、作り込まれ、描き込まれた世界観に魅入られますし、アイテムや設定の1つ1つに作者自身の拘りをひしひしと感じます。アビスという大穴の最深部で行方不明となった母親を探すべく、主人公達は冒険していきます。表紙のかわいい絵柄を見る限りでは単なる少年少女の冒険譚と捉えられるかもしれませんが、内容は一言では表現できないほどの困難と苦悩の連続があり、血生臭い描写も多く、息を飲むシーンがたくさんあります。それでも屈しない主人公達に引き込まれるし、アビスの様々な謎が気になってどんどん読み耽ってしまう。そんな魅力が非常に詰まっている作品です。

会社員 / 三浦佑樹

- 今更感はありますが、それでもやはり一読の価値あるお勧めの作品。「しっかりとした設定があるんだから、描写過多でも咀嚼してくればいいじゃない。」「冒険の内容は過酷だけれど、かわければ、ちょっときわどい表現もいいじゃない。」と言わんばかりの作品。伏線を含め、作り込まれた世界観と大穴の深淵にどっぷりと落ちていきたいところ。漫画ですもの、手に取る理由は何でもよし、まずは登場人物のかわいさに騙されてみましょう。でもそれを越えると本当のお楽しみが。空想を凌駕する切迫感のある冒険が漫画好きのあなたを待っている。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村量一

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

ビッグコミック スピリッツ / 小学館

## 「映像研には手を出すな！」大童澄瞳

### 選考員コメント・1次選考

- ニッチを深く隅々までいく。これは今後のものづくりの根になっていくと思います。「よくぞ！」と叫んでしまった。  
音楽家・農家 / 谷澤智文
- 道に落ちてる手ごろなサイズの木の棒を無暗に拾ったりミヤマカラスアゲハを見つけて興奮したりするの、なんかすっごいわかる。他にも、自分の考える最強の世界を妄想するとか、子供の頃に感じたようなワクワク感が作品全体に溢れていて楽しい！部室であれこれ妄想していた3人が次のページをめくるとドーンとその世界の中に入り込んで居るっていう、まさにマンガならではの表現方法にハッとさせられたり、セリフの吹き出しにZ軸の概念をプラスして立体的に表現する手法もとても新鮮に感じられ、読んでいて驚きとワクワクが止まらない作品です。  
しょうゆ製造業 / 小野塚博之
- 何者でもないとき、人は何者かになりたいと願う。自身が多かれ少なかれ感じた「あの時の気持ち」がまさかアニメをつくるという気持ちで表現されるなんて！と思った人がたくさんいるとかいないとか。  
KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 鳩岡桃子
- 迷路的な街とか、秘密基地のような部室とか、ワクワクする設定がたくさん詰まった舞台で、日々空想を屈託なく実行に移す主人公たち。子供の頃って、みんなこんなだったんじゃないかな。実行に移す前にリスクばかり考えるようになったのはいつ頃からか。少年の心を凝縮したようなマンガ。子供の心を取り戻したい時にお勧めです。  
Sler・システムエンジニア / 廣瀬 公将
- 脱帽。小ネタやウンチクでまったり遊ぶオタサー日常ものか？と思ったら、ストレートで熱く硬派な青春成長もの。キャラ配置も抜かりなく、アニメへの愛を謳う。上手い。  
朝日新聞記者 / 小原篤
- あまりメタ的な作品は好まないタイプなのですが、これは独特な角度からの視線が非常に愉快かつ痛快だと感じました。今後、キャラクターのパーソナルな部分も掘り下げられそうで、期待しています。  
音楽屋 / 杉本善徳
- これはもう良いところを挙げていけばキリがなくなるので、とりあえず一言「めっちゃんか創りたくなる！！！！」クリエイター志望者増員マンガです。最高かよ？。  
オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

## 選考員コメント・2次選考

- いいですね、このサークル内部全開的なノリ。高校時代のバイブル「究極超人あ〜る」を思い出しました。前触れもなくふっと空想に遊ぶ当たり、マンガならではのシームレス感がとても心地よいです。キャラも立ちすぎ！ですが、それぞれのバックグラウンドの深掘りをこれから期待したいところです。若さの爆発がたまらないです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 描写やマニャックな表現が細かすぎて完読できるか心配でした。しかし、読み始めるとスーッと入り込んでどっぷり浸かってしまい、結局のところハマってしまった。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介

- 映像研の3人がとにかく「愛すべき3人組」って感じで、もうこの3人が話しているのをずっと聞いていたい！と思うほど魅力的。好きなことを、好きなように、徹底的にやる、っていうある種の狂気のようなエネルギーがほとばしっており、読んでいてとても爽快！一方、その姿が自分には少し眩しすぎてなんだか泣けてきたりもします。

しょうゆ製造業 / 小野塚博之

- 「ものづくり」への愛と執着が単純にかっこいい。2017年、最大級のエモさを感じる作品。最高かよ。

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

- 映像を見た時の、生徒会書記 さかき・ソワンのあの表情！アレを描けるのがすごいなーと私は思います。映像研の三人もそうだけど、みんな何か一つ、突き抜けたものを持ってたりするし、それが発露したのを見る人の目って輝いてるんですね。金森氏には気持ち悪いって言われそうだけど。:)

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 内弁慶ながら「設定」に天才的なセンスをみせる浅草、カリスマ読モながら「動き」の演出に強いアニメーター志望の水崎、能弁で頭がきれて「ビジネス」にさとい金森。そんな女子高生3人が映像研究同好会を立ち上げてアニメづくりに熱中するという話。マンガやイラストなどの線画を自分で描くことに熱中した体験を隠し持っている人なら分かる、自分自身が創造主である世界に自分が遊ぶ「あの感じ」、自分の内なる世界観が現実には立ち上がってきたような「あの感じ」、つまりは妄想の楽しさが、読み進めるにつけてどんどんよみがえって盛り上がりまくるはず。たとえばテレビやネットで好んでアニメをみるほどではないものの、古くは「ヤマト」や「999」とかに始まって宮崎、庵野、さらには細田、新海作品くらいなら映画館で観る程度にはアニメに対する関心を持ち続けてきた人ならば、アニメならではの「設定」や「動き」（「金田動き」みたいなのもあったな）や「演出」を、普通の（いや、普通ではないか）高校生が自らの手で映像化していく過程にワクワク感とほのかな羨望を覚えずにはられないだろう。膨大な蓄積をいつでもどこでも参照可能なデジタル環境に育ついまどき世代ならではの強みなのだけど、最後にモノを言うのはほんだけ「好き」であるかという古今東西変わらぬ真理が、高校生活の日常を描く中できちんと表現されている点が良いのだ。設定といえば舞台となる高校が何より素晴らしい。こんな校舎に通いたかった。

会社員 / 天野賢一

- 青春部活モノとしてすばらしく面白いだけでなく、アニメーション映画に対する愛と理想がピンピン感じられる逸品。ハリウッドのSF・ファンタジー映画で最も重要視されているのは、キャラでも脚本でもなく「世界観」だと聞いたことがあります。世界観に圧倒的オリジナリティーがあれば、実はキャラも物語も取り替え可能。世界観とは、つまるところ「設定」と「美術」で表現される。で、そのことは、アニメにも（にこそ）ぴったり当てはまるわけです。だから、主人公がアニメーター志望の水崎ツバメでなく、地味な設定オタクの浅草みどりなのは、極めて正しい。もう一人が、金にしか興味がないプロデューサーの金森さやかというのは、さらに正しい。確かにこの3人なら「最強の世界」を作れると信じられる。2巻のラストでは、現実に存在しないフィルムが、確かに目の前で回った気がしました。このマンガも大好きだけれど、私はこの作者のアニメを見てみたい。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 何となく、マンガ家が描いたアニメーションの話というより、アニメーション作家が描いたマンガという感じがする。アニメーションならではのイマジネーションの飛躍を、上手にマンガの文法に落とし込んだアイデアは斬新だ。物語は現実世界を描きながら、主人公JK3人組のアニメ設定の妄想回路がしばしばストーリーラインに侵入し、メカ設定書やイメージボードがさらりと挿入される。そしていつの間にか違和感なく元の世界に戻るのだ。彼女たちがいつかどんな創作の高みに到達するのか、それをどう描くのか、これからの展開が楽しみでならない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 人物の描き方がリアル。ちょっとした仕草に人間性を込めるのが非常に上手いですね。それによって突飛な設定にもすんなり入り込むことが出来ました。説得力のある絵と少年マンガ的な熱さに心を掴まれます。

東京海上日動キャリアサービス / 江本ちひろ

- 女子高校生三人組がアニメーションを作る物語です。絵柄もテンポも個性的、最初はそのいかにもサブカルチャーな世界観とスピード感に乗り切れなかったのですが、読み進めるにつれて三人の背景や役割がわかってくると面白い！とくに資金繰りと機材調達をする金森さんを見ていると、プロデューサーが映像制作においていかに重要なかがわかり、天才だけでは成り立たない世界であることを教えてくれます。緻密に描き込まれ、アクが強いと思った絵柄も後半になると映像のように見えてくるから不思議です。

映画館スタッフ / 堀江千秋

- 女子高生三人組のアニメ制作部活マンガ。妄想パートと現実パートのバランスが良いし、読ませる。密度感もいい。プログラマー / サイトウマサトク

- アクの強いキャラクター群と、リアリティなさそうな状況なのに、リアルとイメージを自在に行ったり来たりする構成がすごくハマる。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 誰かが面白いことを言ったら、その発言に影響された他の誰かがまた面白いアイデアを付加する。こんなことが、テンポよく繰り返され積み重なって、空想がだんだん形を成して、実現への道筋が見えてくる。こんな楽しいプレストに参加したことはありませんか？これは、まさにこの体験を味あわせてくれるマンガです。秘密基地、おかしなところにある階段、水上の建物といった、ワクワクがたくさん詰まった3D迷路のような学園を舞台に、三人の映像研のメンバーが空想で遊び、アニメーションという形で空想を具現化してゆく物語。人の想像力の素晴らしさ、物を作る喜びを教えてくれるマンガだと思います。物を作ることが好きな人、モノを作りたいと思っているすべての人にお勧めのマンガです。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬公将

- メカや怪物の設定集は、いい意味で理屈っぽくてリアルでワンダー。浅草の夢が突き進む世界の広々として爽快なこと！アニメーションの動きはなぜ魅力的なのか、細部のこだわりがいかにか全体の悦びに結びつくのか、アニメーション論・映像論としても的確で分かりやすく何よりマンガとして面白いなんて。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 行動を起こす動機の純粋さが眩しい。主人公たち3人の役回りも面白い。プロデューサー的なキャラクターって、必ず必要なんだなと実感。

医師 / 岸本倫太郎

- いわゆる「お仕事モノ」を更に捻って「アニメ制作」に必要な要素を、設定好きの子・アニメーターで動きを表現したい子、それらに興味が無いが金を引っ張って商売をしたい子と分けて、見事に学園モノとしつつ、独自の空想をベースとした画面作りを混ぜ込んだ意欲作。

住職 / 蟬丸P

- 2巻14話の最後、「そのこだわりで私は生き延びる」はすべての作り手にとって、「ああ、もう、よく言ってくれた！」って表現ではないでしょうか。そうか、そう言うのか、そういう言い方できちゃうのか！と衝撃を受けた僕は100回胸に刻みました。ユニークな演出の見事さとかセリフの素晴らしさとかはもちろんの本作ですが、こういう熱いハートがこのマンガの魅力だと思います。まったく「好き」って最強です！

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- 何かに特化した人間ってというのは、面白い。何かにひたすらめり込むことができるということは、それだけで才能。何かを本気で好きだしたら、それが才能ということだと思う。この漫画の中では、読んでいて痛快なほどに、そんな才能⇨狂気が渦巻いている。「これが好きだ！」というエネルギーの心地よさ。マニアックであることは、かくも美しきものなのだなあ、と。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 一次選考の際にもコメントしたことなのですが、独特な角度から描かれたメタ描写が、非常に愉快かつ痛快です。今後、各キャラクターのパーソナルな部分が見えてくることで、より面白くなることを楽しみにしている作品です。  
音楽屋 / 杉本善徳

- 圧巻のアニメ（制作）マンガ。まんが技法の粋をさりげなく広げる画力に思わず息を飲む。場面のペースに応じて台詞のフォントにペースがついているところとか、すばらしい工夫で、デジタル時代の賜物をうまく作品の取り入れる作者のセンスが秀逸です。アニメ制作について議論を交わしたり、日常会話からふいに脳内空想に切れ目なく突入する塩梅が本当に気持ちいい。まるで自分が考えついたかのような気持ちになるくらい、キャラと一体感が持てる。期せずして純粋な創作意欲に触れてしまい、読み返すたびになんというか、泣きたくなる。  
菓子研究家 / 福田里香

- 物語としても面白いのですが、本作に描かれているスピリットは一人でも多くの方にしてもらいたい。それがわかる人は、好きな人はここにいるのだ！

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

MFC ジーンピクシブシリーズ/KADOKAWA

## 「映画大好きポンポさん」杉谷 庄吾【人間プラモ】

### 選考員コメント・1次選考

- 常々「オタクとはどうあるべきか」ということを考えて生きているのですが、本作でその一つの回答を得た気分です。絵や小説、音楽など、極論一人でもできるものと違い映画は種々の表現活動のなかでも、どうしたってチームプレイをしなければ実現できないものです。その中でただひたすらにオタクであることしか強みのない人間はどうすればその価値を発揮できるのか？という気持ちでジーンくんの活躍を追いかけていました。結論は、どこまでもオタクであれ。自分がイカすと思ったものに殉じよ。これに尽きます。映画が好きだからこそ、それに関わる人たちに最高のパフォーマンスをさせる。こだわらなきゃ気が済まないからこそ、チーム全員を巻き込む。すべては自分がイカすと思った作品のために。このマンガのジーンくんの生きざま、オタクかくあるべし、というお手本と言っても過言ではありませんまい。ラストのセリフが、シャレていつつ、とある人間関係にもスマートに決着をつけるという絶妙なオチをくれています。このマンガじたいのあり方とも相まってとても粋な締め方でした。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 挫折や絶望を乗り越えて主人公が成長するという要素は全くない。既に必要な才能は持っていて、見つけてもらい、成功する話。そこが逆にリアリティがある。映画監督になりたいから映画を見て勉強をするのではなく、映画が好きで沢山映画を見るし関連書も読むから詳しくなる。頑張るオタク賛歌。読むと元気になります。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

- 短いストーリーの中に濃いエンタメが凝縮されている。話のまとめ方が見事

会社員 / 齋藤隼

- 2017年春、オフィスにひとり残って徹夜作業をしていた僕は、なんだかもう眠くて辛くて、気分転換にSNSでまわってきたマンガのリンクをクリックした。それがポンポさん。序盤から強いキャラクターたちに無理やり持たれて、そこから最後の最高に素敵なセリフまでワクワクしっぱなし！それで読後はしっかり影響され、眠かった自分はどこへやら、朝までにしっかりいい仕事（だったと思う）を完遂できた。ありがとうポンポさん！こんなふうにSNSでシェアされてきたマンガに衝撃を受けるっていうのも新しいマンガとの出会い方だなあと思いつつ、コミックスも出してくれてありがとう！

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- twitterでバズって話題になった、有名映画監督の孫娘、ぼんぼさんのマンガ。映画オタクのアシスタントのジーン君がぼんぼさんに見出され、映画監督デビューするところから話が動き出すわけですが、ジーン君のその才能が開花するカタルシスが読んでいて気持ちいいです。1冊完結というテンポの良さも評価したいです。

会社員 / 三浦 佑樹

- これは夢を見続ける者たちの物語だ。そして夢を叶える道を見せてくれる物語だ。人間プラモという人によって、画像投稿サイトのpixivに発表された漫画『映画大好きポンポさん』が、140ページほどの分量があるにも関わらず、読み始めから読み終わりまで息をつかせず一気に読ませて楽しませた。そしてちょっぴり泣かせもした。大評判になった。至極当然の流れ。物語はこんな感じ。「道」のディノ・デ・ラウレンティスを父親に持つラファエラ・デ・ラウレンティスみたいに、祖父が偉大な映画プロデューサーだったという孫娘の映画プロデューサーがいた。名をポンポさんといって、面白い映画を作ることに熱心で、美人俳優を使ってB級スペクタクルめいたものをいっぱい作って、それなりに当てていたりする。祖父のような大作文芸映画が嫌いという訳ではないけれど、2時間を超えるような長い映画は苦手で、90分がベストというポリシーの持ち主。何より面白い映画が作りたいからといった姿勢から、そういった作品が得意なコルベット監督といつも2人で悪巧みしている。その傍らにいたのが、映画だけが人生といったジーンという青年で、いつもポンポさんに振り回されていた。ほかに取り柄がなく、映画だけが大好きで熱心に観続けて来たけれど、だからといって自分で映画を作った経験はなく、作れるだけの自信もない。そんなジーンの才能を見いだしたのがポンポさん。コルベット監督の映画の予告編を作らせて、短いけれどもそれゆえに才能が試される映像で見事に期待に応えたジーンを抜擢し、自分が脚本を書いた1本の映画を撮らせることにする。それが「マイスター」という映画。主演は祖父の伝手で引退すらささやかれていた大物俳優のマーティン・ブラドッグを読んできた。そしてヒロインにはジーンと同様に新人の女優を抜擢した。それがナタリー・

ウッドワードという少女。女優になりたいと田舎から出てきたものの、すぐに役は得られず、交通整理のアルバイトをしながらオーディションを受け続けてい。ポンポさんが行ったオーディションにも参加していて、ちょっとだけ「ピン！」と関心を持たれながらもその場では地味だから失格となったナタリーを、ポンポさんは自分の映画のヒロインにピッタリだと思い出し、コルベット監督の映画でモンスターに襲われ続けている女優のミスティアに預けて芝居の勉強をさせる。事務所が売り込んでくる人気取り柄のタレントではなく、撮りたい映画にピッタリの才能を見つけ、育てていくスタンスがどうにも羨ましい。そして美しい。そうやって取られた映画の結果は……。それは読んでのお楽しみとして、未だ世に出ていない才能が、優れたプロデューサーの炯眼によって集められては大きな仕事を成し遂げるストーリーの、ポジティブさにあふれた展開が読んでいて心地良い。巧くいき過ぎといった声も浴びそうだけれど、決して誰もが偶然に起用された訳ではない。自分に怠惰な人間などおらず、ジーンなら映画に関する知識なら誰にも負けないつもりでメモを取り続け、ナタリーは女優になる夢を諦めないでハリウッドなる映画の都に居続けた。だから夢を叶えられた。そんな過程において、すでに幸せを感じている人にクリエイティブな仕事なんてできない、自分に満足していないからこそ何か作りたいといった思いが出てくるのだといった指摘があり、あるいは毎日毎日映画を見続けて来たのだから、映画を作る準備なんてとっくにできているはずだといった宣言があって、もの作りに悩んでいたり迷っている人たちにとってある種の警句となっている。それを読んで誰もが思うだろう。自分に才能がないと嘆くより、ある才能を信じて進もうと。面白い何かを作るためには、誰か1人にでも喜んでもらいたいと思おうと。そんなメッセージを活かして明日から自分の道を歩めるか。歩かねばならないのならまずは向かえ、物書きならば原稿用紙に、映像作家ならカメラを手にして街に、人に。作者自身がそうやって前向きに取り組んだ結果が、ネット上で人気作品となっただけでなく、杉谷庄吾【人間ポンプ】による単行本の『映画大好きポンポさん』として刊行され、ふたたび注目を集めたことなのかもしれない。動き出さなければ何も変わらないのだと改めて知ろう。すごいのはさらに夢の続きがあることで、まずはアニメーション化の企画が進んでいるという。誰が監督を務めるか。ポンポさんの声を誰が演じるか。楽しみだしこれがヒットしたらな次は実写映画化といった夢も浮かぶ。配役はポンポさんが広瀬すずでナタリーが土屋太鳳でジーンが山崎賢人でミスティアが吉高由里子でペーターゼンさんが仲代達矢でマーティン・ブラドッグが渡辺謙でコルベット監督が樋口真嗣監督。夢のようだが願えばかなうかもしれない。いっそハリウッド版が作られてロバート・デ・ニーロがマーティン・ブラドッグを演じると？ それも遠い夢だけれどかなわない夢がないのなら、あるいは、いつか。

書評家 / タニグチリウイチ

## 選考員コメント・2次選考

- 表紙の絵の感じからは想像できないような映画愛にあふれる一冊でした。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 二次投票まで気づかなかった作品のひとつです。漫画の世界は2018年どこまでも広がっていく。映画の世界もどこまでも広がっていく。そんな中で映画を愛し、映画に捧げる人物たちを漫画の世界で目の当たりにすることができてとても幸福でした。好きな映画三本、この漫画を読んだ後に考えてみたのですが、まだ絞りきれませんでした。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 嶋岡桃子

- 「えっ、こういう漫画だと思わなかった！」というのが、この漫画を初めて読んだ時の最初の感想です。自店の棚で平積みこそしていたのですが恥ずかしながら今回のノミネートまで未読で、数ヶ月表紙を眺めていた時のイメージからは「わかる人にはわかるマニア系の作品」を勝手に想像しておりました。でも全然違いました！ストーリーもキャラクターもマニア系どころか王道かつユニーク。ベタな感想ですが、この作品こそがまるで一本の映画のようで最後まで夢中になって読んでしまいました。わたしは映画の知識があまり無いので、映画のマニアックな知識があればもっと深く共感できたのかも？とも思いますが、この漫画自体が魅力的なのでそういう人のことも決しておいてきぼりにはしないでくれます。優しく、人の心の熱いところに訴えかけるこの漫画がもっとたくさんの人に読まれて欲しいと思います。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- とてもテンポのいい作品で大好きです。比べるのはあまり意味のないことかもしれませんが、最近、お話を丁寧に描こうとするばかりに間延びする作品が増えているような気がする中、ストンと腹落ちする気持ちのいい展開でした。最後のセリフを作品として地で行ってるのも素敵ですね。何より、ものづくりの本質を喝破してみせているのが、読んで楽しい笑いを抑えきれません。社会不適合者の才能、博覧強記、一瞬のイメージをモノにするための積み上げ。自分がなかなか手の届かない境地ではありますが、それが何より素敵なことだということが、シンプルで力強い描線からも伝わってきます。ジーン君の編集作業タイム、惚れますね(笑)

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 準備はいいか？ だったら大丈夫。どんなに大変な日々が続いても、いつか花開く時が来る。そして世界に認められる。そんな絶対の可能性を、人間プラモこと杉谷庄吾の『映画大好きポンポさん』というマンガが2つの意味から教えてくれる。1つは映画監督であり、それを含むクリエイティブの仕事であり、それらをも含んだ自分の将来への可能性。ポンポさんという、祖父に偉大な映画プロデューサーを持つ女性映画プロデューサーの助手として働くジーンは無類の映画好きで、子供の頃から観た映画に関するメモをとり続けては、それを自分の血肉として身につけている。キラキラとした青春を振りまきながら将来への夢を語る若者たちと違って、ほかに居場所もないまま今は映画界の最底辺であえぎながらも、他に道はないとひたすらに映画に浸る日々を送っている。出会う人からもらう言葉のすべてが勉強。それをメモして噛みしめ覚えていった先で、ジーンはいきなり最先端へと放り込まれることになる。ポンポさんが作ろうとしている映画の監督。主演は名優マーティン・ブラドックというとてもつもない事態に怯え、引込み辞退するかと思いきや、ジーンは不安こそ抱きながらもそれが自分には出来ないとは考えてないようだった。なぜ？ ジーンには準備が出来ていた。とてつもない時間をかけて映画に関する知識を溜めて感想を抱き、良さを感じ至らなさも知って自分ならどうするか、どうすれば良いかを分かっていた。だから撮れた。それ以前に撮らせてもらった。ポンポさんと組んでよくB級映画を撮っているコルベット監督の作品の予告編を任せられ、ポンポさんもコルベット監督も驚くフィルムを作って見せた。そしてポンポさんが書いた脚本から、どの場面が1番のクライマックスかを即座に見抜いて言い当てた。脚本を読んで映画を観る目ならとくにできあがっていた。それは映画を撮り上げる腕をも作っていた。やりたいことがあるのなら、それに向けての準備は決して怠るな。そんな言葉をジーンから贈られ、ポンポさんの態度から感じさせられる作品、それが『映画大好きポンポさん』だ。映画に限らず何か自分で生み出したいのなら、そのために日々の準備を積みかさねておく。そうすることで道は開ける。もしくはそうすることでしか道は開かれないものなのだと知ろう。それは1つの可能性にも関係してくる。pixivにある日突然に登場して、とてつもなく面白いストーリーから多大なアクセスを得て評判となり、紙での出版へと至ったサクセスストーリーであり、シンデレラストーリーの主とも言える『映画大好きポンポさん』という作品と、それを描いた杉谷庄吾【人間プラモ】だが、決して一朝一夕で世に出た訳ではない。描きたいものがあっても、それを描くためにはとてつもない時間をかけての研鑽がいる。商業誌でのデビューという、働きながら稼ぎながら研鑽を詰める場所が与えられているならまだしも、そうした連載を持たない漫画描

きは どうやって研鑽を積んでいったのか。たとえ将来は見えなくても、準備だけは怠らない気持ちから日々、ページを描き継いでいったと考えるのが普通だろう。そして、雑誌への連載ではないネットの画像投稿サイトへ無償で公開することもまた、描きたいものを描いて読んでもらいたい人たちに読んでもらうための準備だった。そうした準備があったからこそ、『映画大好きポンポさん』は世に広まり、紙の本にもなって出版され、そしてマンガ大賞2018に最終候補としてノミネートされた。準備あってこそこのひとつのこうした到達は、さらに先へと進む可能性を持っている。作者の怠らなかった準備を感じ取り、ジーンという青年が積みかさねた準備への経緯を抱きつつ、そうした準備のひとつとしてここに票を投じて、『映画大好きポンポさん』がどこまでも突き進み、果てしなく広がるための後押しをしよう。

書評家 / タニグチリウイチ

- 作り手の努力や葛藤の塊という点では、本も映画も音楽も同じ。それを商品として扱う側の人間は、意識していないとそこに込められた作り手の感情も共感する人の存在も忘れがちなので、偶にこういった作品に触れるとハッとさせられます。仕事雑になっていたかも……。やりたかった事やれてないかも……。出て来るのはサラリーマンでもOLでもないけれど、モチベーションを上げてくれる良いお仕事漫画だと思います。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出麻悠美

- 構造的に配置されたキャラクターたちが影響し合う様に科学を感じた。「好き」を突き詰めて欲しい作家。

往来堂書店 / 三木雄太

- ホッコリ

ホームパーティー研究者 / 高橋ひでつう

- 超有名映画監督の孫娘で天才と名高いポンポさんが、暗い映画オタクであるアシスタントのジーン君を、ポンポさん脚本の映画監督に抜擢するところから物語が動き出します。ポンポさんがジーン君の才能を見出す過程等、ストーリーの筋がしっかり通っていて引き込まれるし、スピード感もあり、まったくテンションが落ちることなく最高のラストを迎えます。実際に映画の撮影が始まるシーンでは鳥肌まで立つほどでした。1冊完結のマンガなのですが、1本の素晴らしい映画を見終えたような高揚感を得ることができるかと思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 本作は「オタク賛歌」である。と、オタク気質を持った全ての人に伝えたいです。常々「オタク的要素を持つ仕事はその道のオタクにやらせるべし」と思っているのですが、本作はまさにそれを地で行くマンガでした。映画が大好きで、映画以外で生きていく方法を知らないジーンくん。キョドるしバツと見冴えない男ですが、映画オタクとして生きてきた彼の中には世にも美しい「画」があります。そのことは、インプットをひたすら続けてきたオタク的人種に対してのこの上ない讃美歌であると思うのです。何かを世に出したいと、グツグツ頭の中にナニかのあるオタク的人種にとってのアンセムになりうるマンガです。

株式会社アニメイト / 岡部真矢

- 才能のあるなしというのは残酷だ。いつかどこかで読んだそんな言葉が、デザイナーだったりコピーライターだったりをうにやらうにやらとやってきた僕の中で、長年ぐるぐると現れたり消えたりを繰り返すこともあったのだけれども。そんな過去の結果をがんばって測ることよりも「今、好きなもの」に全自分を捧げている人をいつだってカッコいいと憧れるし、なんならもうそれだけでいいじゃないかと、節目になる40歳に改めて思い出させてくれた「ポンポさん」は、2017年最も友人にオススメしたい1冊でした。そんなモリサワの好きな映画3本「ブレードランナー」「東京ゴッドファーザーズ」「ピンポン」ポンポさんの幕間に倣って。

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- 全1巻で綺麗にまとまっている作品。映画を全く見ない私ですが、ちょっとだけ映画を映画館で見たくになりました。「映像研」や「コンタクティ」など今回のノミネートは映画を絡めた作品が3つもあってびっくり。それぞれ良かったのですが、一番響いたのはこの作品でした。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- もし主人公がポンポさんに出会わなくとも、彼は変わらず一生映画を愛して生きていっただろう。そういうものだと思う。私の好きな3作は「セックスと嘘とビデオテープ」「機動戦士ガンダムIIIめぐりあい宇宙編」「破稿 銀河鉄道之夜（映画ではなく演劇ですが）」。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

- 話のまとめ方が見事。キャラクターごとの個性も確立しており、読んでいる間に一切の飽きがこない素晴らしい一巻完結作品

会社員 / 齋藤隼

## 「約束のネバーランド」出水ぽすか・白井カイウ

### 選考員コメント・1次選考

- 読んだらこのドキドキや今後どうなるかを誰かと話したくなる！だから誰かに薦めたくなる！マンガ大賞にとってもふさわしい作品だと思います。予測できないストーリー、伏線の数々、毎話毎話の引きの強さ、絵の中で生き生きとしているキャラクター達。ハラハラドキドキする物語もお薦めするポイントなのですが、つねに「命を頂く」ということを考えさせられます。読み進めるにつれて、1話から描かれている「いただきます」と食事をとるシーンの重みを感じます。物語とはズレるかもですが、漫画を読んでいる子供達（もちろん大人も）の食育になればいいなと思いました。食育というほど説教くさくなくて、面白い物語の中に溶け込んでいるのが素晴らしい。私も、約束のネバーランドを読んでから、命を頂く、食べる、ということをより意識するようになり、調べること、知ること、選ぶことをするようになりました。物語を楽しみながら学べるのがたくさんあります。そんな作品が今、子供達も読んでいる週刊少年ジャンプで連載されているっていいなあと思いました。内容やキャラクターについてもっと触れたいのですがどうしたってネタバレになってしまう... 第1話が衝撃なので、これ以上のネタバレを知らずに、とりあえず読んでみてください！！

声優 / 富岡美沙子

- 連載当初から注目している作品。食用プラントとしての孤児院で「鬼」の餌として育てられている子供たちが、どうやって生き残って行くのか。最新刊では、他のプラントの人たちとも出会い、鬼と戦う方法を模索して行く過程に手に汗握ってしまいます。

舞台女優・Generalist / 大倉照結

- この作品に対して、これがJUMPの作品なの!? という良い意味でのギャップの声をよく聞きますが、勇気や知恵、努力を通じて勝利を目指そうとする主人公たちの姿はまさにJUMPの作品なのではないでしょうか。聡明な子どもたちが如何にして、狡猾な大人たちの檻から逃げ出すか。展開が進むにつれ世界が広がって、解ける謎、深まる謎など面白い要素がどんどん出てきます。いま続きを早く読みたい1番の作品です。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- 読みだしたら止まらないっこの先どうなるんだろうか！早く次の巻お願いします！と、みな思っているはず。

アナウンサー / 松尾翠

- 今、一番続きが気になる連載。毎週、少年ジャンプの発売をわくわくしながら待っています。毎回、読者の予想を裏切る展開で、まさにハラハラドキドキ。作者のイメージーションに今後も期待しています。

主婦 / 安田奈緒美

- ぶっ飛んでる世界観だけど子供達がピュアなので、不思議なバランス感覚が楽しい。展開もスリリング。

PENICILLIN / HAKUEI

- 昨年、1巻の段階でブレイクを予感しましたが、それが間違ってたなとわかって大変よい気持ちです。脱獄編が終わってもテンションが落ちないのはすばらしい。この先まだまだ、いくつもサプライズがあるんだろうなあ。カズオ・イシグロの「わたしを離さないで」に出だしの設定が似てるのは、意識したのかどうか、一度作者に聞いてみたい。

読売新聞東京本社文化部編集委員 / 石田 汗太

- 「楽園」という檻からの脱出、王道なのに思わず読み進んでしまう。

コミック担当 / 実松由夏

- スリリングな展開。こども達が次々と様々な危機に立ち向かい、切り抜ける様から目が離せない。もし、最終巻が100巻まであったとしても、一気に読みしていたと思います。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 農園から脱出までがかなりハラハラドキドキで面白かったため、その後はどうだろう?と思ったこともあったのだが、全く心配いらなかった。むしろなぞはどんどん深まり、おもしろさを増していく。さらにコミックス自体のおまけも読み応えがあった。ヒントが隠されている、などの情報を作者からもらえると、ファンなら嬉しくて探してしまう。キャラクターそれぞれの個性の違いと、問題の対処にあたっての解決の取り方が議論されたり、読者の予想を裏切ったりと、読んでいる間の時間はとても楽しく、ストレスを忘れる。それなのに、どんなときにでも肩の力をいれることなく読めるというところも嬉しい。続きが待ち遠しいです！

会社員 / 西尾美里

## 選考員コメント・2次選考

- 一巻を読んだときにすごい！と思ったが、巻を増すごとに更に面白くなった。一つ区切りがついたところで失速するかと思ったが、そんなこともなく。新たな展開も楽しみ。

主婦 / 赤坂真実

- とにかく続きが気になって、読み出すと止まりません！

公務員 / 東くるみ

- いろんなところで褒めちぎられている作品なので、今さら感もありますが、改めて読むと、やっぱり圧倒的なストーリーテリングで止まらなくなる。GF 農園編が終わった後も、面白さのテンションがまったく下がらないのも驚き。まずセリフの密度がすごいし、それを滑らかに読ませる絵力とコマ運びもすごい。エンターテインメントとしては文句なしの収穫だと思えますが、さらに高い点数をつけた作品もあるので、去年は豊作だったということでしょう。GF 農園からの脱獄を果たした子どもたちが、なおも檻に捕らわれていることを知り、さらに外の世界への脱獄を決意するところがいい。この世界は、目をつぶって妥協する者には樂園だし、目を開いて自由を求め続ける者には牢獄となる。生きることは、決して脱獄を諦めないことなんですね。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 希望と絶望。まるで正反対の感情がぶつかり合う場所に放り込まれて、人はどちらの感情に身を寄せていくのだろう。出水ぽすかが作画し、白井カイウが原作を担当しているマンガ『約束のネバーランド』を読んで浮かぶ疑問であり、期待だ。1000年も前に人は人を襲って食らう鬼と袂を分かって交流を閉ざし、そして鬼の住み処で新たに人が工業生産とも栽培とも言える状況下、ただ美味なる食糧として鬼に食われ、育てられ、生み出されていた。すなわち人肉工場。あるいは人間養殖場。従って最初から出口など存在しない場所。そうとは知らずエマはレイやノーマンらと謀って、自分たちが生み出され、育てられた施設「GF (グレイスフィールド)」から逃げだそうとする。GFの周りをぐるりと囲った高い壁を乗り越え、その向こうに広くて深い溝があっても道具を使って飛び越えて森へと逃げたエマやレイや子供たち。ノーマンだけは“出荷”が来て連れ去られていき、救えなかったエマやレイは自分たちが彼らも生き延びようとして森を走ってW. ミネルヴァなる人物の元へと赴こうとする。その人物こそがエマたちが暮らす、ただ鬼の食糧として育てられ、成長したら出荷されて食われるだけの場所から逃げ出すための道を示してくれるはずだった。希望。ミネルヴァという人物が支持した場所まで走りきれば、鬼に食われることなく生き延びられるという希望。鬼の手を逃れて自由を手に入れられるという希望にあふれた少女少女たちに同情の喜びを抱いたのもつかの間、GFの外が深い溝に囲われていたという状況にも勝る絶望がエマたちを襲う。1000年も前の地球で人と鬼との間に結ばれたある“契約”。それが本当だとしたら、エマたち人間が鬼たちの暮らす世界に生まれ、育ててそして食われるような状況はあり得ない。けれどエマたちは鬼に食われる将来を知って逃げ出した。そして知った。GFの外に広がった世界の向こう側には、通り抜けることのできない壁が控えていることを。まさに絶体絶命。そこで踏みとどまって鬼の目を逃れながらせいぜいの生を享受するしか道はなくなった。それならいっそGFに戻って安寧の中で最長で12歳までの生を精一杯に謳歌する方が楽ではないのか。絶望から浮かぶ諦めの中に身を委ねる安易へと傾きかけた心を叱咤し、奮い立たせるものがあつた。それが希望。エマが抱く、エマだけが強く抱き続けるとどこかに絶対にある場所なら、いつか必ずたどり着けるという希望。箱を出たらそこも箱の中だったという恐怖にも似た状況が、どれだけ繰り返されようとも永遠に連なる箱などないと信じて進む心の強さをエマからもらい、そしてエマに従い進んでいくレイやGFの少女少女たちから感じ取る。第6巻で絶望の淵から咲いたかすかな希望を育てながら、進んでいく一行の前に第7巻で現れた人物の突きつけてくる絶望混じりの諦めを、エマたちはパスしていけるのか。そして本当にいつか外へと、自由な外へとたどり着ける時が来るのか。そこは本当に自由で楽しく優しい場所なのか。なおも尽きない疑問を引きずりながらも立ち止まらず、振り返らず戻ることなしに前へと進むだろうエマやレイや少女少女たちに引っ張られ、希望を灯して読み進めていきたい。

書評家 / タニグチリウイチ

- 一度気づいたらそれはもはや昨日までの平穏な日常には戻らない。徐々に真の姿を現してくる世界。少女少女は勇氣と知恵でこれに立ち向かう。これこそ少年マンガの醍醐味だ！

会社員 / 矢野耕次

- ページをめくったら秒で物語の中に引きずり込まれてました！この幸せな感覚を久しぶりに味わえたことに感謝！

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 良い意味でズルいです！ストーリーの展開だけでここまで心惹かれるマンガに出会ったことはありませんでした。推理小説の鮮やかなトリック、魔法のような手品、そういったものに出会った時のような「起こりえないことが目の前で起こっている」時のドキドキ感をずっと与えてもらっています。各所にちりばめられたヒントを丁寧に拾って先の展開を予想する楽しさ、読んで答え合わせをする楽しさ、読後に友人たちとああでもないこうでもない感想を言い合いながら考察を深める楽しさ、様々な楽しみ方ができるエンターテインメントだなあと。時間がたってから読んでも楽しいことは間違いないですが、連載をリアルタイムに追い、この作品が好きな人たちとワイワイしながら応援をするとさらに楽しめるので、一人でも多く方に今読んでほしいと思います。

ゲーム会社 / もちづきかずよし

- 去年も投票したのですが、今年もまた投票します。それは、去年にもまして面白くなってきているから。一番最初のもりあがりでもある「孤児院からの脱出」編が終了しても、なぞは深まるばかり・・・そして子どもたちは成長していく。決してあきらめずに。そしてこのシビアな内容なのに、不思議な点が一点あって、それでも「気軽に」読めるところも魅力のひとつだ。最近のサバイバルものや少年少女があるところから脱出するのがテーマだったりするものは「グロさ」「こわさ」「緊迫感」に焦点があてられていて、読んでいてやっぱり「気が重い」。良質な作品であるとわかっていても、通勤電車や疲れているときにふと読みたくなる類のものではないのだ。ところがこの作品はそうではなく、買ってすぐに、どのタイミングであってもずっと読める。もちろん通勤中であっても。それはやはりさすがジャンプ、主人公達のひたむきさや明るさ、前向きさが影響していると思う。どんな絶望やピンチに面しても、それを勇気と知恵で切り抜ける姿は、ドキドキのほかに癒しももたらしてくれる、不思議なマンガだ。

会社員 / 西尾美里

- こんなに毎回引きの強い終わり方ができるのがすごい。今でも毎週そうです。いつもジャンプを読むと友達とLINEで約束のネバーランドの話をするのですが、結局感想は毎回「続きが気になる!!!」です(笑)ストーリーはもちろん、絵も素晴らしいです。キャラクター達は1人1人ちゃんと違うのがよくわかる。絵の中で動いて生きている。行動や表情や台詞にそれぞれの性格がよく現れているなぁと思います。子供達も大人も、どのキャラクターにも感情移入できる。あの子やあの人の気持ちを考えて涙がぼろぼろこぼれた話もありました。そして、一次選考の時にも書きましたが、「命を頂く」ということを考えさせられます。あれこれ教えられるよりも、自分で気づいた方が、その物事に目がいくし興味を持てると思います。なのでハラハラドキドキする物語の中に、命を頂く、食べることや、家畜のことなどの話が混ぜ込まれているのが素敵だなと思いました。何が正しいか、何が正解かなんてわからないけど、私は自分で考えて悩むことができよかったです。悩みながら選択をしています。「いただきます」「ごちそうさま」と、エマ達のように手を合わせてご飯を食べます。これからも考えることをやめず、エマ達をハラハラドキドキしながら見守っていきたいです！

声優 / 富岡美沙子

- 少年漫画の王道ファンタジーなのに、読者を引きつけるのがとてもうまい。知力、体力を駆使して「楽園」からの脱出を試みる子供たちから目が離せません。

コミック担当 / 実松由夏

- 少年ジャンプの「枠」を超える作品。大人にこそ、おすすめ。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 以前のノミネートの頃から話が進んで今すごく面白い！先が気になる。いくつもの伏線、緊張感の中に主人公の真っ直ぐさ放つ輝きが試練を乗り越える度増していく王道感が気持ちいいです。

WEB デザイナー / 河本智芳

# マンガ大賞2018 ノミネート作品

モーニング・ツー / 講談社

## 「ゴールデンゴールド」堀尾省太

---

### 選考員コメント・1次選考

- 何だかよくわからないけどたまに先が気になってしまいます。

PENICILLIN / HAKUEI

- ばーちゃんの様子が…読んでいて、ありえない話なのにありえそうな不安が迫ってきてとても好きです。

Migimimi sleep tight/ ギタリスト / 涼平

- 面白いというか恐ろしいというか、恐ろしいんだけど決して見た目が怖いというのではないし。不気味さがじわじわと自分に迫ってくるような感覚。いったいどうなってしまうんだろうかと。

会社員 / 林礼春

- 謎の福の神の表情に（アルカイクスマイル？）にジワジワ来ます。ちょっと不穏な雰囲気といい、福の神の影響力といい、ヤバさもあわせてジワジワ来ます。

教師 / 持丸宏司

- じわじわ、じわじわと効いてくる面白さただ、ただ先が読みたくて仕方がない

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 「刻刻」作者の待望の二作目。全編に漂う張り詰めた緊張感。毎巻息をのむように読まされます。3巻のトイレのシーンは強烈すぎました。ストーリーはもちろん、この演出力もすごい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 怖そうで怖くない、けどやっぱりずっと不気味。先の読めない話の面白さや斬新さもさることながら、全編にわたって漂うこの絶妙な不穏な空気感をぜひ味わってほしい作品。

しょうゆ製造業 / 小野塚博之

## 選考員コメント・2次選考

- じわじわ、じわじわとボディブローのように効いてくる面白さ。気が付くとゴールデンゴールドワールドに引き込まれている。そしてただ、ただ先が読みたくて仕方がない中毒のような面白さ。  
(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介
- 先の読めない展開の面白さにグイグイ引き込まれ、続きが気なること必至です。前作「刻刻」同様、シリアスな展開の中で時折顔を出す意外なコミカルさが絶妙で、読んでいて癖になります。フクノカミをはじめ、読み手に自然と「不安感」や「嫌悪感」を抱かせるような仕掛けの散りばめられ方も秀逸！  
しょうゆ製造業 / 小野塚博之
- 今回は自分が選んだものが一切ノミネートされなかった初めての年、それらならそれで全く読んだことのないものばかりだったため、逆に楽しむことに決めた、まったく読んだことがないなら自分の感覚に任せよう。。そうして最初にとったのがこの漫画ゴールデンゴールド。結果自分が自分のセンスが正しかった。ゆえに皆さんも楽しんでらよかろう。  
プロデューサー / 小林智之
- 何だろうこの中毒性…と思いつつも推しています。これも福の神のサブプリミナル？  
ロングランプランニング株式会社 / 小森和博
- 不穏さがじわじわと増大していく描写が良い。フクノカミと呼ばれる存在が、人間的ではないところに妙味がある。  
プログラマー / サイトウマサトク
- 前作「刻刻」では突然非日常な世界に巻き込まれる内容でしたが、今作ではじわじわと日常を侵食していく怖さを味わえます。堀尾先生の描く人々の、笑顔から真顔への表情の切り替わり方が本当にゾッとして好きです。作中に登場する福の神の影響なのか、自分のなかの「笑顔」に対しての印象がかなり変わりそうです。  
バンドマン / TA-SHI
- 非常に面白かったです。主人公のばあちゃんのかわりっぷりが個人的にはツボでした。  
広告会社 プランナー / 平沼良章
- ヌルリとした手触りが不気味で、でも、その感触が忘れられず、繰り返し触ってしまう。そんな読後感がある作品です。神様と呼ぶにはあまりにも奇妙な像がもたらす、福音と災厄。些細な願い事が凄まじいスピードでふくれあがり、どうにも手がつけれなくなっていく。グロテスクだけど、リアル。そこに描かれる人間像は、ああ、そうなっちゃうよね……という”あるある”に満ちていて、怖くもあり、おかしみもあり。ふとした瞬間に、自分ならどうするかを問いかけてくる作品でもあります。  
ライター・老年学研究者 / 島影真奈美
- 日本ならではの呪術的な物語がジワリと面白い。禁忌に触れる恐ろしさと怖いもの見たさと、きっと誰でも一度は感じた事のある謎の背徳感のその先を表現したサスペンスホラーです。概ね2巻まで読むとなんとな〜く結末の予想が出来つつも、そこに至るプロセスって結局どうなるのだろう。きっと呪術を現代に落とし込むからこそ想像できない怖さがあるのだと思います。現状は伏線と核心が見え隠れする真っ最中ですので、今読むとぼんやりと忘れなくなるマンガです。  
会社員 / 佐藤優

## マンガ大賞 1次選考作品

### 全作品名・選考員コメント掲載

#### 「あおざくら 防衛大学校物語」二階堂 ヒカル

- 特殊な世界で暑苦さもあがるが、それが新鮮。友情って良いなと思わされます。

MANTANWEB / 河村成浩

#### 「青野くんに触りたいから死にたい」椎名うみ

- 読み切り漫画で椎名うみ先生を知り、次回作もしくは連載を待ちわびていました。どんどん不穏になっていく空気感、特に汗をかいたりするシーンが好きで、一緒に息切れしそうになります。物語の最後はハッピーエンドが勿論好きですが、この主人公に関しては、そんな期待をむしろ裏切られたい欲求もあります。最後に、主人公の優理ちゃん……パン食べる姿可愛すぎませんか？

バンドマン / ターシー

- 2巻でさらに進化している！奇をてらっているわけではないのに、要所要所で新しさ、意外性をふっと入れ込んでくる…というのがすごい！短編集（『崖際のワルツ』）もすばらしかったし、作家としての今後がとても気になる

漫画ライター / 門倉紫麻

- 「事故死した恋人が常にそばにいる」というあらずじから、ラブコメだと思って読みだした。しかし、ホラーでした。こわいよー、こわい。ひいっ！って声出したよー。エロくてクスって笑えて怖いんだけど、先が気になる！

主婦 / 赤坂真実

- 「恋する女の子の表情を描くのに命をかけている感じが好きだなあ……」なんて思って読んでたら、この怖すぎる心霊描写！ 恋愛の一途な感情って、確かに少しずれば病的で歪なもので、それが理解不能の深淵を覗くようなホラーと共に語られるものだから、切れ味が鋭いのなんの。油断して読めません。

会社員 / 末永龍介

#### 「青のフラッグ」KAITO

- キャラクターの表情の描き方が群を抜いている

会社員 / 齋藤隼

#### 「悪魔を憐れむ歌」梶本レイカ

- 猟奇モノも増えましたが、まだまだ凄い作品が出てくるものですね。続きを読むのが怖い作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

#### 「あげくの果てのカノン」米代 恭

- 帯の衝撃的なコメントに目を引きがちですが、刹那と刹那がぶつかり、人間の根っこを引きずり出されている感覚を覚えました。何を持って「人」なのか。それを続刊でより暴き出されるのだらうと思うと楽しみで仕方ありません。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 嶋岡桃子

#### 「あしたのジョーに憧れて」川 三番地

- 漫画を描くって大変だけど素晴らしいって思える作品。

漫画全巻ドットコム / 安藤拓郎

## 「あそびあそばせ」涼川りん

- 顔面破壊力が半端じゃない…！これは電車の中では読んでいけないやつ。久しぶりに吹き出して笑いました。たいていいつも同じメンバーが教室内で遊んでるだけなのにこの面白さ表紙からは想像もできなかった

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- いま最も良い意味で画力を無駄づかいしていると話題の一作。かわいらしい女の子3人を中心とするいわゆる「学園もの」だが、うっすら狂気ににじみ出る作者独特のユーモアセンスが詰まっており、きれいな作画とシュールな展開とのコントラストが爽快のギャグ漫画である。登場人物も、あどけなさの裏に内面のどす黒さが見え隠れしていて魅力的。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

## 「あたらしいひふ」高野雀

- 色んな系統の女子たちが仲良くしてるのって、いいですね。

商品企画 / 畑中瀬路奈

## 「ACCA13区監察課 外伝 ポーラとミシェル」オノ・ナツメ

- ACCAシリーズはとても重層的な物語だ。多彩な登場人物たちの世代ごとのエピソードが複雑に絡み合い、寄木細工のようなドラマが織りなされる。からくり箱の如く、あそこがずれるとあそこが開く…という展開は読んでいて心地よい緊張感があった。そしてあえて描き下ろしで刊行された本作は、物語全体に静かな深い余韻を与えてくれた。装丁も美しい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「あなたのことはそれほど」いくえみ綾

- いくえみ氏の作品は昔からハイセンス。今回のストーリーで一番好きなのは、ダークな妻ヲタク、涼ちゃんでした。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「兄友」赤瓦もどむ

- 2年前くらいから連載はして何となく知ってはいたが、ただの恋愛漫画だと思ってた。1月に出了た4巻の表紙でギャグマンガか？と思って買ったら、8割ギャグマンガだった(笑)そして小・集のような俺様彼氏ではなく、ヘタレ彼氏も良い。ギャグのテンポがうまくはまっていて楽しい。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

## 「アニメタ！」花村ヤソ

- アニメ制作現場で働く新人が奮闘する姿が、読む楽しみになっています。何も出来ない自分が少しずつ技術を身につけていく姿に共感をもてます。憧れの現場で悩みながら、うまく行かない、そして給料も安いといったアニメ制作の現場がよくえがかれています。

デザイナー / 平沼寛史

## 「アルスラーン戦記」荒川 弘・田中 芳樹

- 祝！荒川氏の復活！田中芳樹氏のどっしりとした原作をもとに、荒川氏が独特のセンスを活かして繰り広げる歴史ファンタジーに魅了されること間違いなし！

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「アルテ」大久保圭

- 舞台は中世のイタリア。主人公のアルテは貴族の女の子だが、画家を目指す。身分制度もあり、女性の人権などない時代であり、当然風当たりは厳しいが負けずに奮闘するアルテ・・・までは、よくある話。この物語はさらに、マイナスとされていた貴族・女性という属性が、下層民や男性に比べ安心できるとか珍しいとかいう事で画家としての力量とは関係ない部分で評価される事もありプラスに働いた場合、通常は同じ土俵で勝負したいとか卑怯だとかなるのですが、そうではなくそれを己の「武器」として認めて受け入れ、前を向いて進んでゆくのが素晴らしいと思います。これは現代にも通じるテーマなのではないかと思います。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

## 「Artiste」さもえど太郎

- 熱意と才能のある若者と、それを支える大人との関係。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 料理マンガではなく料理人マンガ。パリのレストラン、ヨーロッパの街並み、癖のある仕事仲間やアパートマンの住人・・・ってもうなんか僕の好きなものがギュッと詰まっていて、ずっと読んでたい、もっとこの暮らしを見ていたい、と切に願いました。

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

## 「あれよ星屑」山田 参助

- 山田氏が20代からずっと温めていたイメージが、やっと本作に結晶した。氏がこよなき愛情を注いだ男たちの挽歌がたとえようもなく美しい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「アレンとドラン」麻生 みこと

- 趣味を人に薦めるのって難しいな～と思います。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

## 「淡島百景」志村貴子

- いわゆる“女子高物語”というより、様々な「女」の人生を描いた作品だと思います。学生時代のクラスメイト達や町ですれ違った女の子達の人生を覗き見ている、そんな気持ちになります。

商品企画 / 畑中瀬路奈

## 「1122」渡辺ペコ

- 生々しく描かれるいろいろな夫婦のかたち…共感と恐怖と人間のどろどろ大好物です。1122 いい夫婦とは何か、女とは何か男とは何かこれからどうなるのか続きが早く読みたい

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 渡辺ペコ先生は、ずっと「性」に対して真摯に考え続けている作家さんだと思います。そして主人公が同世代であることが多いので、最もリアルタイムで刺さる作品を読ませてくれる作家さんでもあります。始まったばかりの夫婦の物語ですが、これからどうなるのか楽しみです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- うかと、ひそかにお慕っている渡辺ペコ先生。今度の夫婦もなかなか。妻公認で恋してるなんてウキウキされても……と思ってたのに、丹念に描かれる“そこに至る過程”を読んだと妙に納得しちゃう。はしゃぐ夫も、悶々とする妻も、なるほど……と。でもって、“夫の恋人”がまた一筋縄ではいかないわけです。くんずほぐれつ、どうなっちゃうのか。リアルだし、えぐるけど、どこかノンキな修羅場へようこそ。恋人や配偶者にムカついたときに読むとちょっと優しくなれるかも、な作品です。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

## 「いいよね！米澤先生」地獄のミサワ

- 熱血教師米澤が、生徒たちから恩師と”呼ばれるために”ラグビー部の顧問になって熱血指導を繰り広げたいけど、漫画部の顧問になってしまうギャグ漫画です。発想が飛び抜けてふざけて面白！もう完結しているのですが、とてもいい最終話でした！ストーリーのあるギャグ漫画で5巻で綺麗にまとめられていて面白！出だしから声出して笑いました！何もかも忘れてこれ読んで笑ってください！

声優 / 富岡美沙子

## 「違国日記」ヤマシタトモコ

- 親を亡くしたこどもを引き取る話、と言うとよくある話のようですが、手探りで寄り添い、日々を過ごす二人の描写がとてもすきです。心のやわらかい部分の描写のうまさがよくあらわれた作品。

会社員 / 工藤圭

- 両親を亡くした15歳の女子中学生・朝と、その子を引き取った35歳の叔母・槇生の話です。共に孤独を抱えているふうではあるものの、それを特別表に出すこともなく、淡々とした日常がリアルで心に迫ります。とくに叔母の槇生は朝を己の信念のまま勢いで引き取った格好いい大人でありながら、どこか不安定で弱い部分も垣間見え、非常に魅力的です。槇生が言っていた「乾いた寿司は殺す」には心から同意。何気ない会話に、センスが光ってます。

映画館スタッフ / 堀江千秋

## 「いざなうもの」谷口 ジロー

- 谷口ジローの絶筆作品を含んだ作品集。最後まで挑戦し続け、やりたいことは尽きないという言葉通り、一冊の中に、BD、劇画、SFなど様々なテイストの作品が収まっている。圧倒の一冊。

主婦 / 赤坂真実

## 「異種族レビューーズ」masha・天原

- マンガの性表現の豊かさを実感できます。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- ファンタジー世界にも風俗店があり、異種族の風俗店をクロスレビューしていく冒険者たちの夜の冒険談という、エンタメに於けるファンタジー世界観の裾野もここまで広がったか！という感慨深い作品。昨今のweb小説の流れを受けて活発なファンタジー界隈の勢いを象徴する一作ではないかと。

住職 / 蟬丸P

## 「異世界居酒屋「のぶ」」ヴァージニア二等兵・蟬川 夏哉

- 順番が逆だったらどうだろう。この漫画に出会う方が先で後でアニメで異世界食堂をみて、ああこのシチュエーションはまだ面白いなと感じてしまった。トリアエズナマ 意味も分からずこのセリフは言いたくなるし、どの世界でも食べ物のおいしいところは楽しいと感じてしまう、みんな抵抗なく読み始めることのできる作品であろう

プロデューサー / 小林トモユキ

- 突如異世界に現れた居酒屋「のぶ」。居酒屋というものを知らない衛兵や街のあらゆる人々が、のぶの噂を聞きつけやってきます。お客さんがはじめてみる食べ物をこどものように驚いて、美味しそうに食べる様がとてもかわいいです。何よりご飯が美味しそう。白黒もカラーもどちらも美味しそうで、見ているだけでお腹が空いてきます。基本的には1話完結型の話が多いため、とても読みやすい作品でした。次はどんな美味しい料理がでてくるんだと、わくわくしながら読んでいます。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

## 「1518! イチゴーイチハチ!」相田 裕

- 怪我のため野球を諦めた少年が高校では生徒会活動に勤しむ！ 現実には、熱血、スポ根とかではない高校生の方が多いと思うんだけど、そんな大部分の高校生にぜひ読んでもらいたい作品です。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- ビッグコミックスピリッツで2014年から連載中という本作は、たしかにスピリッツ的というか小学館的な、どこかなつかしい雰囲気を持っている。高校の生徒会という「文化系」の、つまり比較的地味なコミュニティーを舞台に、ほのぼのとした画風もあって、のんびりした雰囲気でお話は進む。けれど、ただまったり日常系というわけではもちろんなく、そこかしこにヒリヒリとした、15歳から18歳のリアリティーが丁寧に仕込まれている。仲間への親愛の感情が、友に抱く連帯の気持ちがいじむ。つまりは王道の青春ものの系譜に連なるまっすぐでまぶしい世界がそこにある。少なくともかつては10代だった（こともある）わたしのような上の世代、スピリッツを読むような世代にはそう感じさせる要素がある。オールドスタイルには見えるけれど、古くさくはない。良質な、という形容がマンガの場合はほめことばになるのか分からないけれど、たしかに良質なマンガだと思う。手描きっぽい描線もマンガらしくて好ましい。ここが面白いのだとか、ここが見せ場なのだとかはなかなかうまく説明できないけれど、なんとも魅力的なマンガ。

会社員 / 天野賢一

## 「1日外出録ハンチョウ」福本伸行・萩原天晴

- いまそこにいるハンチョウ。グルメ漫画として見ても凄い。

ホームパーティー研究者 / 高橋ひでつう

## 「五百年BOX」宮尾行巳

- 蔵にあった昔からあったような箱。その箱は昔の時代の世界が広がっていて……。設定が独創的でとても面白い。箱の中で広がる世界に干渉も出来れば、干渉したら現代にも影響が出て、というこの流れにワクワクしながら読んでます。読んだことのないような世界で真新しいと感じました。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 蔵で見つけた箱の中に過去の日本らしき世界があって、人々が生活をしている。その中の人間に危害を加えたことで現実世界のに変化が起き、大事な幼なじみが消えてしまった。とりもどすため、箱の中の世界を探ろうという話。世界がねじれていく(?)過程で、主人公の心も変わっていったり、ついには自分が変化したり。SFが得意でないのだけど、面白く読めているし、今後の展開が気になる。

主婦 / 赤坂真実

## 「インヘルノ」マツモトトモ

- 私はマツモトトモさん担なので毎年インヘルノを推し続ける！こちらも続きが気になる感じで終わっているので新刊(次で最終巻)が待ち遠しいです。轟の儂さと危うさ。獣のように近寄り難いかと思いきや、いつの間にか人の心のすぐそばにいたりして、はっとして捕まえたいけど捕まえられない。そしてあのアクシデント。そこをどうにか潜り抜けて、彼にはハイスベック無敵野郎に成長していただきたい。地獄しか見えない未来に光は差すのか。見届けます。あと4巻の帯が編集さん方の苦惱で溢れていて面白かったです。もっと売れて。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「A子さんの恋人」近藤聡乃

- 巻を重ねることにキャラクターが見えてきてとても面白いです。はじめは簡単なパズルだと思っていたものが、どんどん全貌を現わして大作なパズルができてしまった、という感じ。I子のことが大好きになったし、A太郎の間は深い

bar 図書室 / 岡部 愛

- ひと言でよさを説明するのが難しいマンガってあって、この作品がまさにそうだと思うんですが、読めば読むほど、地味だし優柔不断なヒロインがモテるわけが、理屈じゃなく皮膚感覚でわかってくるのが、本当にすごい！

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- このようなフードの描きかたこそが、フードまんがだと感じるのです。少しずつメンバーを変えながらテーブルを囲む感じがたまらない！最新刊の鍋焼きうどんときりたんぼの交錯するくだりのあそこか！最高です。「タイプ違いの選べないくらい素敵男子2人から求愛され、どっちも好きになっちゃった私、モテモテで困る、どうしよう??」がティーン女子向け少女マンガの鉄板骨子ですが、本作はその構造を換骨奪胎して、作家ってなんだろう？という問いや、作品を生み出すことのへの希求を問い続けていて、飄々とした作風ながら、なかなか切ない。

菓子研究家 / 福田里香

## 「干支天使チアラット」中川ホメオパシー

- この作品の場合、関係者にバレて怒られるまでがネタだと思っているので、認知度はドンドン上げて行きたいです。最悪打ち切り絶版になっても、それはそれでアリかと。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出 麻悠美

## 「衛府の七忍」山口貴由

- 今まで也十分面白いのに、やっと役者が揃って、これからますます面白くなるに違いない！期待感しかない。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「エマは星の夢を見る」高浜 寛

- 素敵な題材を深く、面白く掘り下げる力量は流石の一言。ヨーロッパにもって行って「これ」JAPANのMANGAなんだぜ！」と誰彼構わず推しまくりたい作品です。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「応天の門」灰原薬

- ラストチャンス

大日本印刷 / 佐々木愛

- プレイボーイ在原業平と、少年時代の天才菅原道真が、平安時代前期の都を舞台に、ミステリー事件を解決するというストーリー。その背景にあるのは、妖怪あやかしよりも怖いのは「人間」であるということ。藤原氏が次々と他氏を追い落とす時代背景が微妙に影を落としていきます。緻密な時代考証、当時の人々の日常の姿も見どころです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「大きい犬」 スケラッコ

- 「大きい犬」に導かれて旅に出たくなる。別れもあるけど出会いもある。とても静かな世界とそこで起こるざわざわした感じが心地よい物語です。

アニメイト 営業支援部 書籍課 営業チーム / 鈴木寛子

- 地味だけど、だからこそ勧めたくなる。読んだ後、ほんのりすっきりする感じが不思議な作品です。

WEB デザイナー / 河本智芳

- 表題作の「大きい犬」のインパクトがすごい。表紙も素敵！腕のモフモフがたまりません。「大きい犬」の後日談の「小さい犬」も可愛いお話です。この子たちグッズ化して欲しい。絶対癒される。。読んだ後、心が温かくなる 1 冊です。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「大家さんと僕」 矢部 太郎

- 今年のイチオシ。心から万人にオススメしたい4コマ漫画。まったく共通点のない、年齢も性別も違うふたりが、大家さんと間借り人という立場を超えて少しずつ仲良くなっていく過程が、なんとも微笑ましい。お互いを思いやり、でも不用意に踏み込みすぎず、相手の暮らしや気持ちを尊重する優しさに全編あふれている。そのほどよい距離が読んでいてとても心地良い。大家さんがキュートで上品な奥様で、とっても魅力的。でもそれを受け止める矢部さんの筆致が温かいからこそ成り立っている漫画だと思う。そしてご年配の方の生きてる時間軸というものもちょっと考えさせられる。日々、昔のことを思い出して生きているんだなあ。

主婦 / 安田奈緒美

- フィクションで疑似家族ものを見るたびに「すてきだ…が残念ながらファンタジーでしかありえないんだな」と思っていたところに、「あるんだ！」という希望が突然もたらされた感じ。ふたりの世界がこのまま続きますようにと願わずにはいられない。間の取り方などテクニカルな面もすごい。著者にはマンガ家としてバンバン新作を描いて行ってほしい。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 何これ、めっちゃおもしろいですやん。隣家の方と朝偶然会ってしまうと駅まで何喋れば良いのか途方に暮れる程度には人見知りな自分が懂れてやまない「ご近所づきあい」の最高峰ですよ、これは！もう十分ヒットしてるけど、本当に誰にでもオススメできる数少ないマンガ。5才だった自分に漫画アクションと少女フレンドとコミックボンボンを与えてくれたマンガ好きの母にプレゼントしてみようかなあ。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 営業戦略部 店舗開発課 / 大山敏樹

- お笑い芸人、矢部 太郎さんのほのぼのエッセイ漫画です。優しい大家さんのおばあさんと距離感を少しずつ掴んで行きながら仲良くなっていく過程が面白くほんわか、そして少し心配になるようなお話です。矢部さんに大家さんを看取ってほしいな。

専業主婦 / 柴 佳衣

- 大家さんが好きです。こんなにもほっこりとした雰囲気のみんがなのに、途中から少しハラハラしてきてしまうのですが、杞憂に終わってよかったです。ほっとしています。このお二人の時間が永遠に続いてほしい。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「オキテネムル」 連打一人

- 気持ち悪さとドキドキ感。正直一般受けするとはとても思えない筋のものだが、いやいや、マンガ大賞はそういうのでいいでしょ

プロデューサー / 小林トモユキ

## 「オデット ODETTE」 日当貼

- ほんわか彼女とカッコいい彼氏（ネコ）のデートを覗く作品。ニヤニヤしながら読んで、とっっても和みます。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

## 「弟の夫」田亀源五郎

- 娘と二人暮らしの男のもとを、亡くなった弟の『夫』を名乗るカナダ人男性が訪れる。弟の夫。同性婚が許されたカナダで、弟はカナダ人の男性と結婚して家庭を作っていたのだ。ということで始まる日々のお話。突然身近に現れた同性愛者相手にどう振る舞えばいいの？ という混乱と拒絶と許容のさまを、共感しやすく、かつ「きわどい」ところまで切り込んでいくのが面白い。「きわどい」というのは、例えば何も知らない若い娘さんに、同性同士が結婚するのはどういうことなのか、どういう意味があることなのかをきちんと教えなければならないということだ。なんらかの性癖を元に人を差別することあるいは差別しないことは、良いことなのか悪いことなのか、そしてそれはなぜなのかを、自分の言葉で考え伝えなければならないということだ。そういう「きわどさ」、唐突に突きつけられる、繊細で真摯な思考の是非。それが面白い。しかしそれよりも、ここで描かれているのが、本質的に「親しい人を喪った喪失の哀しみ」であることが好ましい。胸を打つ。親しかった人、あるいは、もっと親しくなれたし、もしかすると、もっと親しくすべきだったかもしれない人。しかし、その人は、もうこの世のどこにも居らず、そのような機会も永遠に失われたのだ、という喪失の哀しみ。それが、切々と描かれることに好意を覚える。沁み入る。我々は、それぞれが、それぞれに、それぞれの事情を抱えながら生きるしかねえのだ、という当たり前のことが、ほんのりと希望をもって肯定される。たいへん良い。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第弐齋藤

## 「侠飯」薩美 佑 福澤 徹三

- 飯もの+こわおもてのヤクザ+ダメ大学生という組み合わせが良い味しています。含蓄もあってステキ。

MANTANWEB / 河村成浩

## 「おとむらいさん」大谷紀子

- 人の一生にはそれまで生きてきたドラマがある。最期のとき、そこを切り取ってどんな人生だったかを伝えたい。そんなハートフルストーリーです。最新刊が最終巻なのですが、もっと続きを読みたい、ドラマ化して見たいと熱烈に思わせる作品です！！！！

舞台女優・Generalist / 大倉照結

## 「鬼踊れ!!」篠原ウミハル

- 民族芸能を高校生が部活で行うという異色の作品。まだ先が見えないところがありますが、どんな形で彼女たちが演じていくのが楽しみです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

## 「お前は俺を殺す気か」シギサワカヤ

- かわいい絵柄でえげつない大賞！独立した気鋭のデザイナーの社員募集に転がり込んだ美人双子姉妹って設定に炸裂するシギサワ節！めくるめく修羅場ワールドをお楽しみくださいませ！なんて煽ってみました、人間のいろんな魅力を再確認させてくれる、そんなお話が大好きです。おバカで弱くて儂くて強くてかわいくて愛おしい、そんな彼 / 彼女たちに時々あいたくなってページをめくっております。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

## 「オリオリスープ」綿貫 芳子

- 季節感を感じられる歳時記のようなマンガ。主人公は本の装丁家として忙しく働く若い女性。忙しい中で時間を見つけて季節を感じるスープをつくって食べて、日々を過ごす。忙しい都会の大変そうな生活なのにどこか風流さを感じられるのは、主人公の自然に対する感性の豊かさのような気がします。忙しくても季節を感じてきちんと生きる。忙しい現代人が季節をしみじみとし楽しむ知恵がたくさんつまったマンガです。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬 公将

## 「みたび! 女のはしり道」伊藤 理佐

- いかにはサボりつつ綺麗になれるかを描いた実録エッセイ。作者の伊藤理佐さんが失敗しながらも、懸命にサボりながら手を抜きつつ美容にアクセクしてとても面白いです。私も、結構参考にしています。(だってサボりたい)

専業主婦 / 柴 佳衣

## 「ガイコツ書店員 本田さん」本田

- 同じ書店員、コミック担としてはほんとにおもしろいので去年も全力で推しました。最新3巻で一区切りということで寂しいですが、ぜひまた読みたいです。アニメ化楽しみですね。3巻のおまけまんがは全国の書店員が号泣するやつでした。少年ジャンプかと思いましたよ胸熱すぎて。(この漫画はKADOKAWAです)

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「怪物事変」藍本松

- 世界観・キャラクターの設定にいわゆる新しさはないものの、その分丁寧に作りこまれたテンポ感・セリフや設定のクオリティの高さはまさしく王道少年マンガです。王道ものの少年漫画として、物語だけでなく一人ひとりのキャラクターたちの成長が気になるマンガです。

会社員 / 佐藤 優

## 「彼方のアストラ」篠原健太

- 集められ、突如宇宙に放り出された仲間とアストラへ戻るべく、力を合わせ冒険する物語が非常にワクワクさせてくれました。最後までそのワクワク感をもたせたまま連載が続き、もうちょっと先も読みたいと思いましたが、良い終わり方だったと思います。

デザイナー / 平沼寛史

- 祝完結。最後まで綺麗にまとまっており、後半の怒涛の伏線回収は素晴らしい

会社員 / 齋藤隼

- SFマンガ好きとしても、少年漫画好きとしても、凝ったストーリー好きとしても、とても引き込まれました。隔週更新をいつも欠かさず読んでいたくらい。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 作者が得意とする登場人物の掛け合いを活かしたSF未来青春劇。軽快なストーリー展開と魅力的なキャラ設定、そして適度なギャグと適度なシリアス。のほほんとした宇宙冒険ものだと思っていると、4巻あたりから急にシリアスになり、謎解きが始まり、その勢いのままフィナーレへ！全体として非常によくまとまっている篠原節満載の傑作。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

## 「カフェでカフェを」ヨコイ エミ

- ドラマチックな感じはほとんどない。けれど、こういう静謐な味わい深いマンガというのなかなかない。日常生活をこのように切り取れる作者の感受性に感服した。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「崖際のワルツ」椎名うみ

- どれもすごいんだけど、表題作になってる「崖際のワルツ」に出てくる白雪姫がすごかった。没入しているときの表情を描くのがとんでもなくうまい！

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「からかい上手の高木さん」山本 崇一朗

- 西片と高木さんの可愛さがもちろんこのマンガの一番素敵どころなんですけど、作中の登場人物がそれほど増えず、基本的に二人のやり取りだけで話が進んでいるのに巻数が進んでもずっと新鮮な感じがするのもスゴイ、と感じるところです。

会社員 / 林礼春

- ついにアニメ化！1巻の頃からおすすめしていた漫画がアニメ化になるのは嬉しい。今が7巻。最後のチャンスと思い選んでみました！高木さんと西方くんの掛け合いが可愛く、そして羨ましく、ニヤニヤが止まらない漫画。もっともっと読んでもらいたい漫画です！

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 高木さんがとにかくかわいい。こんな青春送りたいかった。おじさんもキュンキュンしちゃいますよ。一話で完結しているので、とても読みやすくオススメです。

ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村 哲彰

- 電車の中で広告を見たときにはタイトルを見てなんじゃそりゃ、面白くなさそうだなあ。。。と思ったけど何かか気になってしまい読んでみたらジワジワと。ああ、あったこんなようなこと！懐かしい10代の頃！

カメラマン / 平沼久奈

## 「カラスヤサトシの日本文学紀行」カラスヤ サトシ

- 作者の該博な知識と（ややマイナーな）文学への純粋な愛に胸打たれる。あまり描き込まない絵が想像力を刺激し、旅情を誘う。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「官能先生」吉田基已

- 40歳独身、作家の六朗が祭で出会った雪乃さん（22歳）に恋をする。徐々に交流を重ねるのだが雪乃さんは素っ気ない態度を取ったり、時には赤面したり……。六朗がほんと可愛い中学生みたいな人物で、雪乃さんのことを悶々と想像してるのが面白くて、応援したくなります。舞台は昭和30年から40年くらいでしょうか。吉田基已先生の温かみのあるタッチで描かれる背景がまた素晴らしいです。二人の恋模様がはたしてどうなるのか、今後も気になります。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

## 「吉祥寺だけが住みたい街ですか？」マキヒロチ

- マイペース双子が親から受け継いだ不動産屋さんでお客さんに物件を紹介しつつ自分たちの独断でそのお客さんに合った土地を紹介して行く迷惑？な不動産屋さんのお話（笑）こんな不動産さんに知らない街に連れていかれたい？

専業主婦 / 柴 佳衣

## 「君の眼鏡は1万ボルト！」皐月みかず

- 眼鏡原理主義者の皐月みかずさんによる珠玉の一品。眼鏡断層（光学屈折とも言われる眼鏡越しに見られる輪郭のズレ）をはじめ眼鏡に対するこだわりがあらゆる所でとても気持ちのいいものがございます。担当氏に眼鏡っ娘ものは数字がとれないと言われながらも、あらゆるアングルから作画の手間をものともせず描きこまれた眼鏡（っ娘）を是非ご照覧ください。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

## 「きみを死なせないための物語」 吟 鳥子

■ 萩尾望都の『スター・レッド』があり、竹宮恵子の『地球へ…』があり、山田ミネコの『最終戦争』シリーズがあり、水樹和佳子の『樹魔・伝説』があり佐藤史生の『夢見る惑星』があったあの時代。宇宙時代の人類の未来などが壮大なスケールで描かれた少女漫画のSFに触れた者たちが、今またF少女漫画の波動を感じようとしている。人類と宇宙の未来を描き、生きる厳しさと愛する大切さを感じさせる物語として、吟鳥子が描き、中澤泉沙が作画協力をした『きみを死なせないための物語』のことだ。何かの理由あって住めなくなった地球を脱した人類は、コクーンと呼ばれる宇宙に浮かぶ巨大な都市に暮らすようになっていた。そんな人類から生まれてきたのがネオテニイと呼ばれる新人類たちで、宇宙に適応したためか寿命が極端に長く、中には数百年を生きるものもいるという。そのせいか成長も人類に比べてゆっくりしていて、20歳くらいになっても見かけは子供のまま。それでいて早熟なのか頭も良くて、早いうちからいろいろと発明や発見をしてコクーンの科学や経済の発展にも貢献しているらしい。それだけにネオテニイは貴重な種族としてコクーンの中で優遇されており、普通の人類たちから強い関心を寄せられている。物語にはそんなネオテニイの4人が主要なキャラクターとして登場する。アラタとシーザーとルイは男子でターラは女子。そのうちの3人が3世代目という中であって、アラタは始祖ともいえるネオテニイから直系の4世代目に当たっていて、周囲からかけられる関心もいっそう高かったりしていた。4人は出会って最初は幼なじみに近い第一パートナーという関係を結び、そして長じてキス程度のちょっとした性的接触も許されるだろう第二パートナーになるかどうかといった段階に来ている。優れた遺伝子の持ち主たちを結びつけ、優れた子孫を残したいという思惑もあってか、互いを意識するよな状況に置かれる中で、ターラやアラタ、シーザーは心を揺らし、誰か誰を好きなのかといったすれ違いのような関係も生まれ始める。そうした中であってひとり孤高を行くのが芸術家気質のルイで、監視カメラの目も届かない京都コクーンにある歓楽街で出会った祇園という名の、ダフネー症という病で16歳までしか生きられない少女に惹かれてしまったあたりから、アラタたちの運命が大きく揺れ動き始める。そして迎えたある事態。そこで起こったある事件がアラタたちに決断させる。きみを死なせないことを。続く第2巻。16年経ったコクーンで、Gg8（ジジ）とう名のダフネーの少女がアラタになつき、ルイとダフネーの事件の後、アラタと第2パートナーになったターラにもなついて2人の間で日々を過ごしている。もっとも、アラタはジジとより深い接触は持とうとしないで曖昧な日々を過ごしている。ルイはシーザーと第2パートナーの契約を結びながらも祇園を思い続けている。16年前の衝撃的な経験は、アラタたちの心に様々な影響を刻んだ。だからといって留まっていることは許されないのが、どこにもいけないコクーンでの暮らし。成果が出せないネオテニイに居場所はない。普通の人間も年をとればリストインの身となって何処かへと誘われる。いわんや何の実績も残さないまま16歳で死ぬダフネーをや。天井人の登場によってコクーンの決して楽園ではない、楽園ではあり得ない苛烈さが見えてきて希望を削ぐ。いずれジジにも訪れるだろう、もしかしたら明日にも訪れるかもしれないリストインの時を思ってアラタの迷いが振り払われて、きみのための物語がきみを死なせないための物語へと歩を進める。その先、いったい何が起こるのか。どうして地球から人類は離れざるを得ず、それでいて遠くへと人類が向かおうとする話が禁忌とされている奇妙な状況で、人類の未来に不穏が漂う。それを突破する力を決断したアラタが見せるのか否か。続く展開への興味が尽きない。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「CANDY & CIGARETTES」 井上智徳

■ ピンで留めた前髪とランドセル。不遜な表情と銃身の長いピストルが華奢なスタイルに似合う11歳女子の凄腕殺し屋・美晴が、孫の治療にカネが必要なSP上がりのじじい・雷蔵という相棒を得て巨悪を抹殺してまわる。設定の荒唐無稽さは大言壮語なアメリカのパルプフィクションのようだが、(連載が始まった)2017年の日本では意外にリアルだったりもする。露悪的なノアール風味が、日本のコミックに特有のロリータ趣味をまぶされ、傑作の予感が息づく。返り血を浴びた無表情の決め絵がとて面白い。10年ちょっとの人生ではあるが、その不幸すぎる生い立ちが育んだ虚無の裏には、当然ながら子どもらしい「生きたい」という叫びがある。それを素直に表に出せない美晴の境遇がなにしろ胸に痛いし、その諦観が作品に乾いた独特の空気をまとわせる。それでいて、雷蔵の存在によって少しずつ子どもらしさを垣間見せるようになる描写は、パターンではあるがやっぱり読ませる。音も色もないマンガだからこそ読者の想像力を活性化させる、最近あまりないタイプのマンガらしいマンガでもあると思う。似た設定の別の作品が目玉されているけれど、こっちの方が上質で指折りの娯楽作品だと思います。

会社員 / 天野賢一

## 「吸血鬼と愉快的仲間たち」羅川真里茂・木原音瀬

- 可愛いコウモリがでできます。コウモリを飼いたくなります？

主婦 / 紺野 泉

## 「球場三食」渡辺 保裕

- まず球場メシマンガとして素晴らしいだけでなく、メインストーリーにそして脇道の小ネタに続々とつぎ込まれる野球うんちくにニヤリとさせられ、さらには全編を貫いて流れるのは著者のフィールド・オブ・ドリームス、失われし近鉄バファローズと藤井寺球場への追憶。藤井寺、西宮、大阪球場の跡地を訪ねる一連の回は自分のようなおっさんの泥じみた記憶を底からやさしく攪拌してくれる。

会社員 / 矢野耕次

## 「今日も妻のくつ下は、片方ない。妻のほうが稼ぐので僕が主夫になりました」劔 樹人

- こんな夫婦の形もあるのか！と思わせる今時な関係性。そこには夫婦のお互いへの愛情がしっかりあって、読むとほっこり、そして笑える幸せなマンガ。

カメラマン / 平沼久奈

## 「巨娘」木村紺

- 1巻を読んだときは衝撃だった。それから全然続巻がでなくて、ふにゃふにゃしてた、最近ではデジタルで漫画を読みすぎてたんだがたまに書店で長居して見つけて、久々に買ってしまった。ああ、どうしよう、読み返してみたらそんなに面白くなかったら。むしろ去年もノミネートオッケーだったのに出てたこと気付かないぐらい、油断したらやってくるんでもない漫画であった。

プロデューサー / 小林トモユキ

- ジョーさん含めた濃いキャラクターたちが生き生きしてるのがいいなあ。

ブロガー / サイトウマサトク

## 「銀河英雄伝説」藤崎 竜・田中 芳樹

- 多くの方が読んでいる原作ですが、忠実に且つ読みやすく描かれていると思います。戦争を両軍の視点で描いているのでどちらにも思い入れてしまいます。原作を読んでいない方はもちろん原作ファンにもおススメです。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

## 「銀河の死なない子供たちへ」施川 ユウキ

- 一言でSFと言うのも違う気がしてジャンルが判らない、設定が独特過ぎて先が読めない、面白い事だけは確実だけど説明が出来ない。でも久々に「取り敢えず読めば判る！」の一点張りで人に薦められるマンガらしいマンガ。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出 麻悠美

## 「銀平飯科帳」河合単

- ラーメン発見伝からはじまり、ラーメン大好き小林さんとしてはこのひとの漫画はだいぶ慣れ親しんだ、安定の作品なんだが、中に出てくる竹虎と雪虎をみて、ああこういう昔の人も今に通じそうな面白い料理考えるんだな。とわくわくするものもあり、改めてこりゃいいやとおもうのである。

プロデューサー / 小林トモユキ

## 「銀狼ブラッドボーン」長田竜和・雪山しめじ

- じじいです。とにかくじじいがかっこいいんです。強いじじい最高！

主婦 / 紺野 泉

## 「クイーンズ・クオリティ」最富 キョウスケ

- ただの少女漫画と侮るなかれ。設定がめちゃくちゃ面白い！そして人間の心理をとともうまく描いていて読むたびに、なるほど。。と染み入ります。サスペンス要素もありページをめくる手がとまらない。男性も楽しめます！

アナウンサー / 松尾翠

## 「空挺ドラゴンズ」桑原太矩

- どうして人はそんなに空を求めたがるのか。空へ思いを馳せる作品に惹かれてしまうところで、地に足ついた（矛盾）、自分の「仕事」を全うする、そんな登場人物たちに惹かれます。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 鳩岡桃子

- 1巻登場時、「龍を食べちゃうマンガ」というユニークな印象でしたが、3巻はより世界観が大きく深く広がって、「龍を食べちゃうマンガ」どころではないスケール感に「わし、見誤ってた！」とテンションが上がりました。巨大生物好きの（すぐ巨大海洋動物の動画とか見ちゃう）僕としては、このどこまでも広くて、謎がたくさんで、畏怖すべき自然を征く物語は、冒険心をビリビリと刺激される楽しみなマンガなのです。

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

## 「空母いぶき」かわぐちかいじ・恵谷治

- いまそこにある危機。リアリティが凄い。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

## 「薬屋のひとりごと」ねこクラゲ・日向夏

- 非常に迷ったんですが、こちらを入れておきます。最近刊行されるようになり、とても人気が出てきた「なろう系」と呼ばれる小説のコミカライズです。読ませていただいて純粋に面白かった。続きが気になりました。コミックスって、それでいいんじゃないかなあ、という作品群の代表として推薦いたします。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

## 「群青にサイレン」桃栗 みかん

- 少女漫画かと思いきや、恋愛模様ではなく、結構がつつりスポ根マンガ。しかも典型的なヒーローキャラが主役じゃなくて、どちらかというネガティブな男の子が主役というのも面白い。またサイドを埋めるキャラクター一人一人に伏線が散りばめられていて、これもしかしてBL的にはものすごく妄想できるんじゃないかという感じのコマが多数ある。目線の配り方一つでこの子が相手にどう思っているかを伝えるコマ取りの仕方がすごくうまい！サイドストーリーをものすごく見たくなる！！

舞台女優・Generalist / 大倉照結

## 「群青のマグメル」第年杪

- いま少年誌で1番じゃないかな、というくらい面白い。コミック単行本のデザインを変えれば、もっと売れるのは間違いない。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

## 「月曜日の友達」阿部 共実

- ため息の出る美しいコントラスト、誠実に紡がれたきらめくような言葉……それらはただただ、繊細でつかみがたい心のざわつきを表現するためあって。あの感覚を表現するために技巧の限りを尽くしてきた作者の、現時点での到達点だと思います。それを週刊誌で味わえた2017年は幸せでした。

会社員 / 末永龍介

## 「幻想ギネコクラシー」 沙村 広明

- 「愛」の在り方がすごすぎて楽しい！沙村先生の考える物語が奇想天外で、考えも及ばなく 新しい感覚を得て最高に気持ちがいいです！

アニメイト 営業支援部 書籍課 営業チーム / 鈴木寛子

## 「恋は光」 秋★枝

- 恋というものを知りたい。キラキラしてるなあ。主人公のちょっと一歩下がった感じと恋の相手の真っ白な心のバランスが良かった。恋ってなつかしいね。

カメラマン / 平沼久奈

- 誰かを好きになるとはどういうことか？なぜ自分はこの人を好きになったのか？といったことに徹底的に向き合ったマンガ。大学時代のモラトリアムな雰囲気の中、主人公たちはそれぞれの立場から人を好きになるということに精一杯向き合う。その不器用さと、誠実さが、なんかいい感じなのです。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬 公将

## 「午後のあくび」 コマツシンヤ

- 凄く！素敵な作品です。ページをめくるたびに、ワクワク、ソワソワソワソワします。ふと、この世界に入りこみたいです。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 日常の中にちょっと不思議なことがおこるけど、それが当たり前の世界の、ふんわり優しいショートショート。コマツ先生の発想がとても素敵で、本の中の不思議が現実世界にもぷくぷくとあぶくのように出てきそう。あの時計食べたいし、あの傘さしたいし、あの懐中電灯ほしいし、あのお祭り参加したいし、深夜に目が覚めたらあのテレビやってほしい…。私はよく寝る前に読み返します。眠る前に読むと、物語がふわっと夢にとけていく感じがして好きです。リラックスしてよく眠れる気がします。そんな気がするだけなのですが(笑)心が柔らかくなって、ふっと笑顔になれる素敵な作品です。

声優 / 富岡美沙子

## 「ここは今から倫理です。」 雨瀬シオリ

- ALL OUT からはとても想像できなかった作品。一話一話とてもおもしろい短編連作の漫画。主人公の生徒への不器用だけど優しく丁寧なかかわり方がとても読んでいてグッとくる。

bar 図書室 / 岡部 愛

- ダーク目な絵の雰囲気やテーマとは裏腹に、スカッと爽やかな気持ちになる。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「コタローは一人暮らし」 津村 マミ

- アパートに引っ越してきた4歳児のコタロー。コミカルな絵柄とセリフ回しで物語は始まるが、徐々にコタローの生まれ育ちや背景が浮き彫りになり、読み進むほどに心のひだが増えてくる。何この才能。ものすごい作品に巡り合ってしまった。短く構成された各話の序盤はコミカルな導入だが、各話の中盤以降に健気で大人びた主人公の心情が描かれ、読み手の涙腺が緩ませる。辛気くさくならない、"泣き"のバランスが実に絶妙。読後感の良さも抜群！読み終えるたび、主人公に寄り添いたくなる。

編集者/ライター / 松浦達也

- 4歳児の一人暮らしの時点でありえないとは思いますが、コタローの強がりや、ものの考え方など考えさせられる。また、周りの大人たちのコタローへの接し方など色々思うことがある。前作の「コンビニの清水」の夫婦が大家だからこそ4歳児の一人暮らしもうなづけるが、それ以上にコタローが気になる。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

## 「言解きの魔法使い」結月 さくら

- 人があやつる「言葉」と「文字」は素敵で綺麗でとても難しい。でも「文字」と「言葉」があるからこそ、人は人と交わることができるのよね、と気づかせてくれる物語だと思う。

会社員 / 矢野耕次

## 「囀る鳥は羽ばたかない」ヨネダ コウ

- 順調に巻を重ねている BL 作品です。最新刊も素晴らしかったです。読者の9割以上を女子が占める（であろうと容易に推察される）ジャンル・BLの作品もやっぱりおもしろいですよ。弱冠、どうしちゃったの？感も否めないんですが（妻がまさかの腐女子だった？とか、ファン離れに歯止めをかけるため、新規ファン開拓に前向きでたがいま自分の世界を広げる猛勉強している途中なのか？などいろいろ想像してしまいますが）なぜか、福山雅治が面白かったとラジオで絶賛評価したことで、ネットのタイムラインをザワッと騒がせたことも去年のトピックスでした（たぶん！）。ヤクザもので変態で純愛という切なくも美しい、これは奇跡の物語。

菓子研究家 / 福田里香

## 「早乙女選手、ひたかくす」水口 尚樹

- そもそもなぜ、女子はBLが好きなのか。男女の胸キュン漫画もいっぱいあるじゃないかと、質問されたら、男と女がくっついたら、離れただを仲間内で繰り返して人類みな兄弟的なものや、ライバルが出現とかというよりも、素直に好きと言えないもどかしさで胸キュンするのが好きだから！と答えてる。このマンガはBLではないのだけども、そんなもどかしさを感じる。そうかその手があったのか！ヒロインの腹がシックスパックなんて目からうろこだわ！でも、すげーかわいい。二人とも幸せになってほしいなあ。

鳥取県 美術教諭 / 佐川 由加理

## 「幸色のワンルーム」はくり

- 今年一番衝撃を受けた作品。設定の妙。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「雑草たちよ 大志を抱け」池辺 葵

- 青春、の一言で片づけるには優しくて傷つきやすく、しかしともしなやかで温かい友情が描かれている。すこしの苦みを味わいつつ、前に進む勇気をもたらえた気がした。高校生あたりか、いまちょっとしんどい人に読んでほしい

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- 1冊で完結してるので、手に取りやすいと思います。少女漫画に出てくるような可愛い女の子ではなく、地味で目立たない女の子達のお話。私は池辺先生のまあいい優しい絵柄は、どこか現実ではないような、物語の中のできごとのように感じます。けれど登場人物達と、それぞれの感情がとてもリアル。この世界で地に足つけて生きている。それぞれの想いがあって言葉を発していて行動しているから、共感できるし、胸にささるものがあるんだと思います。リアルだけど優しく暖かい物語です。いろいろ書きましたが、漫画の帯と裏表紙の言葉が素晴らしいので、それをそのまま載せたいくらいです。

声優 / 富岡美沙子

## 「サトコとナダ」ユペチカ・西森マリー

- ふだんマンガを読まない人にもこれだけは読んで欲しい！と思った、2017年最高のマンガでした。単なる異文化理解ものでも、友情ものでもない、不思議な手触りに「マンガにできることってまだまだあるな」と思わせられました。  
ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ
- 異文化交流のお話ではありますが、根底にある国が違って、文化は違ってそこにいるのは人と人で、年頃の女の子ふたりのお話なんだな、というのがとても良いです。読み終わったあとあたたかな気持ちになります。

会社員 / 工藤圭

- なぜ、偏見やある一部の人たちを特別視してしまうのか、その一つに接触頻度の差があると思う。何事も、体験しなければ始まらない。しかし、飛び込む勇気もないし、やっぱり怖い。素直に受け入れる心ももってる自信ない。という人はとても多いのではと思う。この作品はイスラムの女の子の考えや異文化を知るきっかけになったのだけど、それ以上に作者さんが、何かの思想に偏ることなく、フラットというかニュートラルというか、目の前で起きていることを素直にありのままに受け入れている感じがすごく好き。淡々としてるし、物足りなさを感じる人もいるのだろうけど、この他者との距離感が心地いいなあと思うのです。

鳥取県 美術教諭 / 佐川 由加理

- 海外留学先でルームシェアをしようとした相手がイスラム女子だったんだけど、そのお相手がとてもチャーミングでね？という日本人留学生サトコさんのアメリカライフのお話。でてくる登場人物と、エピソードがとにかく魅力的。サトコさんもナダさんもとても可愛らしくて素敵だなあとニコニコしてしまいます。物語の中で描かれるそれぞれのお国柄や、留学先のアメリカのことも興味深いです。いまだから読めたマンガかな、と思います。おすすめです。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 「イスラム教」を勉強しても、イスラム教を信じている人がどんな生活を送っているのかを知るのには日本では難しい。でも、どんな宗教を信じていても、女の子はかわいいものが好きで、おしゃれだってる。イスラム圏の人を身近に感じることができる物語って、珍しいけど貴重だと思う。

会社員 / 矢野耕次

- ネット連載の4コママンガ。アメリカへ留学した日本人の女性がムスリムの女性と暮らすルームシェアもの。日常の中で気づく文化の違いはもとより、二人のキャラから生まれる笑いや可愛さも好き。他国の人にも、自国の文化にも改めて関心が湧きます。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

## 「さめない街の喫茶店」はしゃ

- 内容を知らずに表紙で一目ぼれして読んでみたら絵も物語もこの上なく好み！ということがたまにありますよね！これはまさにそういう作品でした。少し懐かしい感じの表紙の絵と内容のせつない雰囲気かとてつもなくマッチしていて、最初から最後のページをめくるまでずっと幸せでした。古き良き喫茶店に漂うコーヒーの香りやそこに流れる穏やかな時間は美しく離れたいものだけれど、それは自分の夢の中の世界の中の出来事。目覚めて元の世界に戻るのが幸せなのか、夢の中にいるのが幸せなのか、自分ならどちらを選ぶかなと思いをはせました。80年代のりぼんの漫画のような繊細でやさしい雰囲気を感じたので、その世代の方に特にオススメしたいです。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

## 「さよなら私のクラーマー」新川直司

- 前前作の『さよならフットボール』の後日譚のような女子サッカーを題材にした作品。持ち前の軽快なコマ回し&キャラ回しのテンポが実に気持ちいい。前作の『四月は君の嘘』のような重い伏線はいまのところ見当たらないし、物語の展開もまだ尻ではある。でもきっとこの作家のことだから、今後ワクワク、ドキドキするような山を用意してくれているはず。物語全体の展開にも期待を寄せつつ、女子サッカーという意欲的なジャンルでしか描けない世界観や物語も楽しみ。

編集者/ライター / 松浦達也

## 「さんかく窓の外側は夜」ヤマシタ トモコ

- 具体的に何が怖いのかうまく説明できないような、別に靈感が無くても「なんだか嫌だな」みたいなボンヤリとした違和感。絶対に踏み込みたくない領域を隙間から覗き見しているようなドキドキとゾワゾワがたまりません。

三省堂書店 / 内野 智未

- 少しずつ色んなことがわかって繋がってきました。ずっとざわざわして怖い。でも怖いけどその先が見たい。

主婦 / 紺野 泉

## 「傘寿まり子」おざわゆき

- 主人公が80歳というのも驚きだが、確かに今の80歳は元気だし、今後の働き方のあり方など見直す機会にもなりそう。そして普段漫画を買わない方にも購入いただけて漫画を読む機会にも繋がってくれている。文藝書・文藝雑誌の今後をどう広げていけるのか、どう現実に生かせるか楽しみ。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- 主人公のまりこさん（80歳）が「終の棲家」だと思っていた持ち家から出るところから物語は始まる。すれ違う家族間の思惑。描かれているのは夢物語でもなければ、高齢化社会の闇でもない。おそらくは綿密に取材したであろう高齢者の真実を描きながら、少女マンガらしさも忘れない。社会の中にあるリアルとファンタジーを絶妙に織り込んでいる。昨年の1巻の時点でも投票しようか迷ったが、1年待って作品もばっちり熟してきた。ヘンに間延びすることのない、テンポのいい展開も気持ちいい。満を持して本年票を投じさせていただきます。

編集者／ライター / 松浦達也

- これは間違いなく2017年でいちばんワクワクが止まらなかった作品です。前年も推しましたが、その時には1年後にこんな展開になっているとはまるで予想もつきませんでした。巻が進むにつれてまり子先生に味方が増え、彼女の冒険も思いもかけぬ方向に進んでいくのが痛快でした。ヒロインが80歳の物語でこんなにめまぐるしくパワフルにストーリーが展開するとは誰が想像できたでしょう！世代を問わずみんなが元気になるマンガです！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- おざわゆきの発想の大胆さにはいつも本当に驚かされる。そして、それをきちんとエンターテイメントに着地させる力量にも感服する。まさに毎号目が離せない連載を満喫している。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 前人未到80歳ヒロインの迷走に超高齢化社会を映し、且つ心ときめく瑞々しいエンターテインメントに。老いはダイナミックでドラマチック、という発見がドキドキとワクワクを誘う。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 確かに世の中に存在するけれど、まだ、フィクションの中に存在していない新しいキャラクターを見つけられるのが、マンガだと思いますが。傘寿まり子、まさに主人公が80才。確かに、考えてみればいまの80才はほんの20年前の80才とはまったく違う存在。その行動力が、もし、発揮されたら…！お年寄りだって恋をする、という『人間交差点』みたいな展開はほんの一瞬訪れますが、圧巻は3巻から。そもそも主人公が80才じゃなかったとしても、まだまだ可能性が掘り尽くされていない世界に踏み込んで行きます。ネットゲームと独居老人とかつての文壇とゴミ屋敷…！我々がいつも意識の底で気になっているあれこれを物語のなかに巻き込んで、この物語はどこへ行く！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

## 「山賊ダイアリー SS」岡本 健太郎

- 「山賊ダイアリー」全7巻に引き続き、やっぱり追いかけてしまうSS。今後の人生の数々の選択肢を考える上でも、とても勉強になります。

音楽家・農家 / 谷澤智文

## 「幸せのマチ」岩岡ヒサエ

- 可愛いぬいぐるみたちが、びっくりする位アグレッシブに、大活躍します。この子達の中身に、驚きです。心がほっこりします。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

## 「JJM 女子柔道部物語」小林まこと・恵本裕子

- 読んでてワクワクする！

漫画全巻ドットコム / 安藤拓郎

## 「JANE -Repose-」橋 瑞樹 + 櫻 林子

- こちらもまさかの新作!! あきらめなくて良かった! ご存知の方は知っている宇宙艦 JANE のお話です。続き楽しみにしています!(ラブレターか)

啓文堂書店 本社 / 山川美香

## 「地獄の教頭」大沼良太

- 学校という閉鎖空間で、異常なまでに正論を貫く余り、むしろ「鬼」に見える……という教頭先生を描く。アウトレイジな極道顔のおじさんたちがひしめき合う画面は、180度回って笑えてくるほど恐ろしい。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

## 「シネマこんぷれっくす!」ビリー

- とにかく笑う。高校生のはちゃめちゃ感も笑うし、映画ネタのきめ細やかさ、かつ大胆さにも笑う。読んだら絶対映画観たくなるし、高校の時、変な部活に入っとけばよかったとも思う。とりあえずハイローは観た方がよさそうだということがわかりました。ありがとうございます。

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

## 「銃座のウルナ」伊図透

- 毎年推してる漫画。4巻もまさかの展開を迎えゾクゾクしました。絵的にも、展開としてもえぐい感じがたまりません。

WEB デザイナー / 河本智芳

## 「終電ちゃん」藤本正二

- 東京で毎晩走り続ける各電鉄が擬人化されたこの作品、終電で帰る人々の物語と、そこで現れる終電ちゃんの人情物語が楽しいです。こんな終電物語があるなら、終電で帰る人ももっと優しく慣れるかも!!

デザイナー / 平沼寛史

## 「少女終末旅行」つくみず

- しんしんと降り積もる雪のような、静けさと絶望に包まれた物語に引き込まれます。寝る前に読みたい。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- 滅びにいたろうとしている超巨大都市のほぼ廃墟を少女2人がケッテンクラートで旅するよマンガ。最初は「テクノロジーレベルが低いゆるい百合 BLAME!」ぐらいのノリで読んでいたが(皆さんお好きでしょう? そういうの)途中から様子が変わってきて、もしかしたらこれは? と思ってたら予想通りファッキンSFだった。下手するとBLAME! よりSFだった。タイトル通りとは恐れ入った。滅び。終末。少女二人が味わう最後の旅路。こうも高らかに朗らかに絶望と滅びが謳われるとは。スイートすぎる。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第弐齋藤

## 「昭和天皇物語」能條純一・半藤一利

- これからの展開が楽しみです。

漫画全巻ドットコム / 安藤拓郎

- 能條純一が描く重厚な近代史。ぜひ若者にも手に取っていただきたい。

コミック担当 / 実松由夏

## 「しをちゃんとぼく」T 長

- 「死を失いし者」だから、しをちゃん。不死者ですがポンコツ。逆説的に読めば「死を有せし者」としての生き方を考えさせてくれそうなのに、しをちゃんがポンコツ過ぎてそうならない残念っぷり。グロでスプラッタ要素ありなんだけど、笑えます。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

## 「親愛なる A 嬢へのミステリー」モリエ サトシ

■ 小説家探偵と文学少女のミステリー。ふたりが関わる謎と事件にハラハラ、近づくふたりの距離にドキドキします。

主婦 / 紺野 泉

## 「ジンメン」カトウタカヒロ

■ 動物の頭に人間の表情がつくことの不気味さ。その不気味さが物語の意味にもつながっている（表情を持つこと）面白いです！

Migimimi sleep tight/ ギタリスト / 涼平

## 「深夜のダメ恋図鑑」尾崎 衣良

■ ビバ！ダメ男。女たちの容赦ない切り返しが素晴らしく、もっとえぐって！とM心を刺激する。ヒリヒリとくせになる味わい。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「寿司 虚空編」小林銅蟲

■ 内容はわかりきらない。でも、これが単行本として商業出版されていることがすごい。

ブロガー / サイトウマサトク

## 「ストラヴァガンツァ - 異彩の姫 -」富 明仁

■ 絶望的な状況で、綺麗事だけでは生きていけない世界で、それでも希望を貫く作品には普遍的な心地よさを感じます。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「スペクトラルウィザード」模造クリスタル

■ 絵柄がとんでもなく好みだったので、内容をよく知らずにジャケ買いしたマンガだったのですが、可愛い絵と裏腹に、どこまでも寂しい物語でした。スペクトラルウィザードは、いまやその危険性からテロリストと認定され世界中から追われる立場になった「魔術師ギルド」の残党。逃げ隠れ安住の地も無く生活している彼女ですが、日々の逃亡生活から孤独が日に日に心を削っていきます。様々な術を使う魔術師たちの中であって、スペクトラルウィザードの能力は隠密やすり抜けができる「ゴースト化」。だれにも気づかれない、孤独でなければ使いこなせない力。その能力は世界にとって有用になることが多く、魔術師ギルドの昔の仲間や、はては魔術師を追う「騎士団」からも求められます。孤独を埋めるかのように、彼女はそれに応え様々な仕事や厄介事にかかわりますが、その時に下す彼女の決断はことごとく裏目に出ています。力をふるうほど一人になっていくなか、それでもスペクトラルウィザードが求めたものは何だったのか。時折小さなコマの片隅で涙を流す無愛想な彼女が、どうしてもなく健気に見え、愛しくなります。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

## 「スローモーションをもう一度」加納 梨衣

■ 女の子の柔らかい感じがよく表現されていて登場人物の魅力をとても引き出していると思います。80年代の文化が好きという変わった高校生のお話ですが、幅広い年齢層で楽しめる作品だと思います。この作品を読んで80年代の文化に触れてみるのもいいのかなと思います。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

## 「世界で一番、俺が〇〇」水城せとな

- 幼なじみ三人組が、謎の女に、一番不幸になった者の願いを叶えるゲームを提案される。疑いながらも参加を決め、それぞれが不幸を目指す。一、二巻目は、そんなに面白くないなー。と思っていたが、三巻目で話が動いたところから、先が気になって仕方がない。人の醜い感情、嫉妬なんかを描くのがうまい作家さんなので、今後が楽しみ。

主婦 / 赤坂真実

- 一見突拍子もないゲームに参加することで、男子三人のこれまでの幼馴染の関係が微妙に変化していくさまがどこか不穏で、でもこういうことたまにあるよなあと読みながら呟いてしまう。恋愛漫画の奇才が描くアラサー男子の人生の揺らぎや心理描写、台詞回しがことごとくいいところを突いてきて、三人のこれから、ゲームのその先がヒジョーに気きなる。

Books アイ茗荷谷店 / 野口 忠義

## 「絶滅酒場」黒丸

- 絶滅生物達が酒場に集まりあだこうだと語り合うという一風変わったギャグストーリー。1話完結のすっきりした構成とその動物ならではの自虐的ギャグ、そして最後はなんだかほっこりさせる。なんだか酒場で面白い話聞いたなー的な。軽いテイストの中に中毒性あり！

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

## 「セトウツミ」此元和津也

- 一昨年も去年も推して、そして今年がラスト！とにかく好き。瀬戸と内海の放課後グダグダしゃべくり青春漫画。ずーっと続けて欲しいけれど、必ず終わりがくるのが青い春なんだな…。

三省堂書店 / 内野 智未

## 「1000円ヒーロー」焼き芋ハンサム 斎藤

- 無敵の強さをもちながら、覚悟を決めてカツカツな貧乏生活を送る主人公がカッコいいです。

教師 / 持丸宏司

## 「そしてボクは外道マンになる」平松 伸二

- 実録少年ジャンプ！70年代～80年代週刊少年ジャンプが黄金期を迎えるその時の貴重なエピソードの数々に毎回毎回驚きの連続。何より平松伸二先生自身が「ドーベルマン刑事」や「ブラック・エンジェルズ」そのものな人生を送っていたことが面白い。歌舞伎町でヤクザに小便をかけられる、殺人犯に刑務所で取材する、完全に想像の斜め上！酷い編集に思わず「地獄に堕ちろ！」と言いたくなっちゃう。

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

## 「そのたくさんが愛のなか。」吉田 聡

- 湘南を舞台にした中年グラフィティ。家庭や仕事や世間のしがらみのほんの隙間で、胸の隅っこに燻っていた青春に火をつける。モヤモヤさせているくらいなら燃やして白い灰になった方がスッキリするんだろうな。吉田節が心をチクチクと刺してきたり揺さぶったりしてくる。オッサンと呼ばれる年齢の男子は、読んだらば、いてもたってもいられなくなるかもしれない。湘南が舞台ということもあって、あの懐かしいキャラもチラリと登場するのがうれしい。

Books アイ茗荷谷店 / 野口 忠義

## 「大砲とスタンプ」速水 螺旋人

- 銃と砲ではなく紙と判子で戦争を廻す「兵站軍」のスチャラカ物語。わりと大変な知識量に裏打ちされたインチキ兵器群と街並みがチマチマチマ延々書き込まれているコマゴマを眺めるのが本当に楽しい。

フリーランス (ソフトウェアエンジニア) / 第式齋藤

## 「タイムスリップオタガール」佐々木陽子

---

- 世代的には微妙にズレるんだけど、中学生時代に夢中になったものや友だちや親との何気ないやりとり、主な移動手段は自転車で結構な遠出で汗だくになってみたり。こういうのって普遍的なものだと思います。流行りのタイムスリップやり直しものではあるけど、身体は子ども、頭脳は大人！余裕で問題解決しちゃうぜ！って展開ではなく、同じように悩んだり工夫して苦労して、ほんの少しずつだけどなんとなくいい方向に向かっているような。

三省堂書店 / 内野 智未

## 「たちあがれ！オークさん」影崎 由那・阿羅本 景

---

- ファンタジー界隈では多民族の女性をさらって暴行するというイメージのある闇の種族「オーク」という設定を真逆にひっくり返しながらも、人間世界で生き残るために AV 男優の道を選ばざるを得なかったという何重にも捻った目の付け所と、緻密に構築された世界観。都合の悪いことは闇の種族に押しつける人族などギャグでコーティングされつつも正統なファンタジーや風刺の流れがあり上質のエンタメと言えます。

住職 / 蟬丸 P

## 「男爵にふさわしい銀河旅行」速水螺旋人

---

- 銀河から銀河を旅して麗しの乙女を探す男爵の中世遍歴騎士物語スペースオペラ風味という、TRPG 的な世界観とそこで繰り広げられるセッションをそのまま漫画という形にした SF ファンタジー、こういった荒唐無稽な設定ながら各種資料に裏付けられた骨太な法螺話を形にする螺旋人ワールドは、綺麗にまとまったエンタメとは一味違う味わいがあります。

住職 / 蟬丸 P

## 「ダンス・ダンス・ダンスール」 ジョージ朝倉

- ジョージ朝倉さんの作品を読むと、胸がいっぱいになる。ぎゅっとつかまれる。青春の痛さや精一杯さを感じられる不思議な熱量をもったマンガだ。私は「溺れるナイフ」がとても好きだったが、今回の「ダンスダンスダンスール」にも夢中になった。主人公が成長とともにどんどん「男」になっていく様子と、そして男女の恋愛ものと、スポーツ（バレエ）の要素と、全てが詰まった贅沢な作品である。そして、キャラクターたちの魅力もたまらない！視線ひとつとっても心を射抜かれるような演出とページ、絵に出あえる。破天荒だけど「いいやつ」である主人公じゅんぺーの選択が、時に読者である私の想像を超えてくるのだが、それがまたどんどんと物語に引き込まれていく。あつい気持ちになれる漫画だ！

会社員 / 西尾美里

## 「血の轍」 押見修造

- え？これって毒親の話なの？ホラーじゃない？読んでて息が止まりそうになるし、とにかく疲れるんですけど。サスペンス展開からの、息子への恋愛感情ともとれる愛情表現、怖いけど目が離せない…。

主婦 / 赤坂真実

- 息子が生まれた私にとっては、「楽しめるかな？」と不安だったが、キャッチーで美しい表紙につられて手に取った。押見先生の作品とのはじめての出会い『悪の華』だったが、この作品はまるで違う。悪の華は比較的モノログや感情の描写があったため、その主人公の心に寄り添いもんもんとした記憶があるが、この作品にモノログはほとんどない。ただ主人公の目を通した美しいけど危うい母親が描かれている。1巻のなぞめいた始まり、死んだ猫、という不吉なスタートに、母親はただただきれいな微笑を浮かべたり・・・そして明らかに「ヘン」な義姉親子を笑顔で受け入れるのだが、それがとてもこわい。過保護という言葉が出てくるが、息子への尋常ならざる愛が、だんだんと暴かれていき、そして2巻では私の想像を裏切る展開があった。主人公の気になる女のV S 母の結果だ。自分と重ねあわせることはないが、息子の母として少々おびえながら、続きを読むのが楽しみで仕方ない。

会社員 / 西尾美里

- 各巻、読み終わるたびに「怖??ッ!!」って思ってます（笑）

音楽屋 / 杉本善徳

## 「ちひろさん」 安田弘之

- ちひろさん元風俗嬢のちひろさんが、誰も知らない人だらけの弁当屋でバイトを始めるところから話がスタートするわけですが、とにかくこの主役のちひろさんの人生観が凄まじい。達観していて、それでいて人間味がある、掴みどころのない生き様にひたすら魅せられます。ちひろさんが奔放に動き回るハートフルな話から、過去を振り返ったり、人との衝突を経てたどり着く胸を抉られるような話もあります。是非ちひろさんの人生を読み解いていただきたい。

会社員 / 三浦 佑樹

- 本当に、本当に、もっと読まれるべき&評価されるべきマンガだと思っています。生きづらさを感じる全て人が読むべき作品！占いとかに行くよりこれを読んだ方がいい、絶対いい！

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 人とのつながりの暖かさを感じます。ちひろさんの家族、この先どうなるのでしょうか。是非うまく行って欲しいけれど…。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

## 「月と指先の間」 稚野鳥子

- 主人公は超ベテラン少女マンガ家・御堂アン、55歳。アン先生、外見だけに限って言えば、まるで50代にはまるで見えない。可愛いし、どう考えても若い。美魔女を通り越して精霊クラスだけど、悩みや逡巡、弱音の切実にハッとさせられる。しょうもない妻子持ちの彼氏や、慕ってくれるイケメン編集長との恋のあれこれももちろん、楽しいんだけど、それ以上に、フリーランスとして長年生きていくこと、その日常を垣間見たり、真髄をババァンとつきつけられる瞬間がやみつきです。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

## 「翼くんはあかぬけたいのに」小花 オト

- 田舎から上京してきた翼くんのオシャレなシェアハウス生活を描いたギャグ漫画。一癖も二癖もあるキャラクター達が畳み掛けるようにギャグを繰り出し、1ページにいくつもの笑いがあり、すさまじい勢い。切れ味鋭いギャグを量産する作者のセンスに今後も期待。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

## 「デザインズ」五十嵐 大介

- 画力と物語力で引き込まれていく作品。

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

## 「でいす×こみ」ゆうき まさみ

- 80年代から第一線で描き続けるゆうきまさみは立場的には大御所マンガ家だと思いますが、その大家然としたところのない、ひょうひょうとした佇まいはなんだろう。作風も、インタビューなどに登場するご本人の風貌も、その発言も（サイト「ぶくまる」に掲載された田中圭一によるインタビュー「わが生涯に一片のコマあり」など非常に好ましく読める）。わたしが少年サンデーを愛読していた80年代中～後期に連載された「究極超人あ〜る」など、きたる30年後の「文化系」人気を予見していたように思う。そしてこの「でいす×こみ」。派手さはないが、じわじわと染み入るように、作中で描かれる世界に憧れさせる。その世界と読み手の自分の間には特に接点や共通点などないはずなのに。「あ〜る」とおんなじだ。はからずも兄の作品を偽ってBL作家としてデビューすることになったマンガ家志望の女子高生をめぐる「ややドタバタ」。爆笑ではないがクスクス笑える。「BL」に対する食わず嫌いの偏見とある種の差別感覚が、この作品によって払拭されたマンガ読みは少なくないのでは、と推測します。わたしはそうでした。毎回カラーの口絵の彩色を別の人気マンガ家が代わる代わる担当する趣向も楽しかった。

会社員 / 天野賢一

## 「デスコ」カネコ アツシ

- 現代の闇の仕掛け人組織リーパーに属する、殺戮少女デスコを描いたマンガ。主人公もそれをめぐる世界もとんでもなく暗い、そして狂気のように残酷な殺戮が延々と続く、ほかに例を見ない作品。良い子は読んではいけません。いったん読んだらクセになります。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

## 「DEAD Tube」北河トウタ・山口ミコト

- Youtube やニコ生などのストーリーミングという旬な題材を扱った作品。「視聴数を稼ぐためならば何をしてもよい」というルールの中で、暴力や性などの素材をふんだんに盛り込んでいるため、好みが分かれるかもしれませんが、人間の汚い部分を全面に押し出した諷刺はとことん面白く感じます。

ゲーム会社 / もちづき かずよし

## 「亜人ちゃんは語りたい」ペトス

- 「生まれながらに他人と違うことで生じる何となくの違和感（それは自分が感じることもあれば他人が自分に対して抱くこともある）と、しかしそれはそれとして社会の中で生きていく」ということがまったく堅苦しいこともなく描かれているのがスゴイ、と思います。

会社員 / 林礼春

## 「DRAGON BALL 外伝 転生したらヤムチャだった件」鳥山明・ドラゴン画廊・リー

- 真面目にエントリーに入れています（笑）！多くの人を読んだことがあるであろうドラゴンボールをベースにした完全パロディマンガです。すごいのは鳥山明の当時の画風までキッチリ再現し、かつ読者視線での対応まで盛り込みしっかりと笑いに持ってきている所がすごい。もっとすごいのは読んだら話題にできる設定そのものの面白さと、それを裏切らないクオリティです。ただ一応念を押しておくと、この漫画を読んだ後には特に残る物はないです。いい意味ですよ！

会社員 / 佐藤 優

## 「天地創造デザイン部」たら子・蛇蔵・鈴木ツタ

- 純粋に楽しめる面白さが詰まっている漫画だがこの視点でのストーリー展開は私の想像を超えてました。しかし、クライアントとデザイナーの設定って・・・笑えます

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- この設定を考え付いた人、天才！と思った。最初の2ページだけでいいから読んでほしい。そこでグッと掴まれたら、どんどん読み進めてください。くすくす笑いながら勉強になる。大人も子どももぜひ！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

## 「天に向かってつば九郎」まがり ひろあき・東京ヤクルトスワローズ

- いまそこにいる畜ペン。球団公認なのが凄い。

ホームパーティー研究者 / 高橋ひでつう

## 「とつくにの少女」ながべ

- 人間の住む「うちつくに」と異形の者が棲む「とつくに」。人間でありながら「とつくに」に暮らす少女シーヴァと、彼女と起居を共にする異形の者（シーヴァからは「せんせ」と呼ばれる）。呪いをうつさぬよう決して触れ合うことのない二人の日常を、静謐と緊張を同時に感じさせるような独特のタッチで描き出している。「どこか遠い国」のお話のようで、でも現実世界を眺めたときに「うちつくに」も「とつくに」も私たちの日常に実は存在していて、その中で私たちは、呪い呪われながら、生きているのではないだろうか。触れ合うことの出来ない二人の物語が胸に迫るのは、「うちつくに」と「とつくに」を抱えながら、それでも他者と触れ合いたいという願いが重なるからだと思う。

Books アイ茗荷谷店 / 野口 忠義

## 「東京卍リベンジャーズ」和久井健

- いわゆる「ループもの」で、ダメダメな主人公が成長をしていく過程と、やり直し過去によって世界がどう変化していくのかを楽しみにしている作品です！和久井さんの描くキャラクターは、新宿スワンの頃からいつも傍にいたら楽しいだろうなと思えてとても大好きです。

ゲーム会社 / もちづき かずよし

## 「同居人はひざ、時々、頭のうえ。」二ツ家あすみ・なつき

- 人と猫との2つの視点から楽しめるというところが凄く好きです。お互いわかってるようでわかってないというのは実際の人間関係でもあることで、ましてや人と猫…でもお互いを「思い合ってるという部分」で毎回感動しています。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

## 「透明なゆりかご」沖田 × 華

- 子供をいとおしく思えて、涙がにじんでしまう。心がささくれた人に……。

MANTANWEB / 河村成浩

## 「Dr.STONE」Boichi・稲垣 理一郎

- この作品が始まったとき、少年マンガがその本来の熱気を取り戻したって思えて嬉しくなりました。読めば勇気もらえるのがその証拠。絶望的な世界で少年達が道を切り開いていくことの何て希望の持てることだろうと。『約束のネバーランド』と並んで、現代少年マンガの最先端をリードする傑作だと思います。

会社員 / 末永龍介

- ある日突然、全人類が一瞬にして石化し、数千年後、主人公となる少年の石化が解けると、人類が存在しない地上は既にジャングルと化していた。少年たちがゼロから文明を取り戻し、石化されたままの他の全人類を救う、という奇想天外な展開に序盤からぐいぐい引き込まれます。主人公のひとり、千空がずば抜けた天才で、科学の力で様々な困難を解決していく様は爽快。もちろんバトルあり友情ありで可愛いヒロインもあり（このヒロインがただ可愛いだけでなく、とても好感が持てる女の子なのもいい）、久しぶりにわくわくしながら少年マンガを読みました。

映画館スタッフ / 堀江千秋

- チート過ぎる天才科学少年が、石器時代にってしまった科学文明を復活させようってわけですが、理系の点数悪かったんで科学考証とか難しいことは解んないです。いろいろつつこみどころがあるのかもしれないけれど、少年漫画なんだからそんなヤボは無しで、勢いで読んでほしい。「全てはマグロのためだった」のコミカルさが好きな人は是非。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- ああ、学校の勉強って大事！！これを10代の時に読んでいたら自分ももう少し科学の勉強を真面目にやっていたのに！と毎週地団駄踏んで悔しがっています（笑）。今の時代に暮らしていると当たり前すぎて気がつかないものが、すべて科学の力でできているのだと、そしてその仕組みというもの勉強すれば理解できるものなのだ、という知的興味をかき立てるワクワク漫画。もちろんSF サバイバルストーリーとしても大変面白い。

主婦 / 安田奈緒美

- 地球が謎の石化に襲われて文明を失ってから3700年。石化から目覚めた主人公たちが一から文明を築き直していく。人が増えれば派閥が生まれ、暴力には武器で対抗し、病には薬を投入し、自然現象を利用しながら文明の利器を素材から作り出していく。この壮大さがたまらなく良い。医師、石、意思が文明を進めるカギになるのだろう。文明を産み出す場面を見てみたいところだが、僕は残念ながら石化したまま壊される側の人間なんだろうな（苦笑）

Books アイ茗荷谷店 / 野口 忠義

- 野球がかっこいいと思うから、野球マンガ。ファッションがかっこいいと思うから、ファッションマンガ。かっこいいと作者が主観的に思っていることをページでまるごとどかーんと伝えてくれるマンガこそ王道かと思いますが、この『Dr.STONE』がかっこいい！と伝えてくるのは、なんと、『科学』と『文明』！ 人類が何らかの理由でほとんど石化されてしまった中、3700年を経て石化から解かれた少年が、物理や化学の知恵をもって、なんと文明をゼロから作るという壮大にも程がある少年マンガ。その目で見れば、我々の身の回りに存在するあれやこれやは、全て数万年の先人たちの積み重ねによる奇跡のワザであることを実感させられる！ 鉄や抗生物質を精製するまでがこんなドラマになるなんて…！ ジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』って少年漫画で描いたらこうなるのかしら？ ものすごい、根っこに突き刺さる作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

## 「どこか遠くの話をしてしよう」須藤 真澄

- 物と話ができる

tetote 代表 / カ丸 真

## 「ど根性ガエルの娘」大月悠祐子

- 失踪した父が帰ってきて家族が再生する心温まる物語……を第3巻で自らひっくり返し、父が帰ってきてからの新たな「地獄」を描き切ろうとする著者の覚悟に震撼させられる。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 3巻を読み終わった後絶句。単行本の帯のコメント通りに1巻から読んでしまいましたまたまた絶句。徐々に心臓や頭を殴るようなグチャグチャにシェイクされるような読後感でした。どうか最後まで描ききってほしい！！って言えなくなってしまって、今の自分はこれ以上感想コメント書けないっす。でも、それでも今もなお続いている先生の家族を、人生を、どうか読ませていただきたいです！！

バンドマン / ターシー

## 「隣町のカタストロフ」菅原敬太

- 救われない結末の中に、ひとかけらだけ残る小さな希望。心にひっかかる。

MANTANWEB / 河村成浩

## 「トモちゃんは女の子！」柳田 史太

- 読みやすい構成且つ女の子が可愛い！少しずつ進展していく仲を見守りたくなるカップルのラブコメです。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

## 「ドラえもん物語～藤子・F・不二雄先生の背中～」むぎわら しんたろう

- 藤子・F・不二雄先生の傍にいたからこそその先生への愛に溢れた作品。泣きました。初めて読者が知るエピソードも読める。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「ドラゴン、家を買う。」絢薔子・多貫カヲ

- 科学技術の発展で宇宙が近くなったように、我々の妄想の発展が異世界を近づけている気がするんだけど、ついここまで来たのね！と感動した一作。現実でも住居って大変な問題だもんね～。迷惑おばさんみたいな勇者とかもでてくるし。面白いテーマで現実に起こりそうなことや心境をうまく異世界に落とし込んでるなあ。と感心。

鳥取県 美術教諭 / 佐川 由加理

- ファンタジーの世界で家を買うのは、意外と難しいのか？ 主人公がほんわかドラゴンだから見つからないのか（笑）発想が面白い。

コミック担当 / 実松由夏

## 「ドルメン X」高木 ユーナ

- 堂々の完結。才能があるとはどういうことか。持つものと持たざるものにはどういう違いがあるのか。個人的に大好きなテーマが真正面から描かれていてぐっときた。アイドルものの1つの重要作として長く読まれるべき作品だと思う。

漫画ライター / 門倉紫麻

## 「七つ屋志のぶの宝石匣」二ノ宮知子

- 老舗の質屋の孫娘が天部の宝石鑑定の才能を生かし幼馴染の質屋の質流れ品として婚約者に決められた頭定を取り巻く謎に迫っていくおはなしです。（とても説明しにくい…）割と突飛な設定にのだめ並みの爆笑と疾走感を織り交ぜながら話は展開していきます。のだめ以降、二ノ宮先生のお話で好みのものはなかったのですが久々に大当たり。まだまだ謎が多いままなので、今後に期待です。

専業主婦 / 柴 佳衣

- 宝石にまつわる事件と持ち主の話。というと、きな臭い物語かなと、思うじゃん。持ち主が謎の死を…ともーじゃん。この漫画は全くそんなことありません。どこかおっとり、どこかのほほん、でもちゃっかり。そんな人物たちが主人公サイドも、モブもおおくて安心してよめちゃう。

鳥取県 美術教諭 / 佐川 由加理

- 宝石商や質屋という仕事を知ってはいてもその仕事内容までは知らない、ある意味ニッチすぎる職業を毎話飽きさせない内容で読める。そこがすごいと思います。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

## 「波よ聞いてくれ」 沙村 広明

- いまそこにいるアラサー。人が死なない沙村俊明漫画凄い。

ホームパーティー研究者 / 高橋ひでつう

- 主人公のミナレさんの言動が常に斜め上のほうに私の想像を超えてくれることがスゴイ！展開が自分の思っている範疇にとどまらないことがこのマンガの面白さだと思います。

会社員 / 林礼春

- 日常感がたっぷり溢れてるのに、ストーリーはどかしら狂ってる。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 毎回、この後は失速するのかな、と思うのに失速するどころか巻を重ねるほど伏線が浮かび上がり面白さが増していくのがたまりません。

会社員 / 工藤圭

- 地方局の深夜ラジオ番組を舞台にどこまで破天荒に話を進められるのかチキンレース、みたいなところがやっぱり面白い。

ブロガー / サイトウマサトク

## 「ナラクノアドゥ」 山本 晋

- 主人公も敵も話が進むほどどんどん弱くなる、って設定としてはシンプルだけどものすごく難しいんじゃない？それって。最強の魔王が人間になるために他の魔王を滅ぼす、ってストーリーも1行で説明できるくらいシンプル。そんなアイデア一発に説得力を持たせるのはとにかく圧倒的なビジュアル。魔王たちは見るからに絶望感をそそられるくらいバカでかくて鬼強そうだし（うわー、頭悪い表現）、緻密に書き込まれた街や城は容赦なくガンガンぶっ壊されていくし、ギミック感あふれる武器や理屈っぽい魔法の描写も男子心を鷲づかみだし、1対1のアクションシーンもド迫力だし、でもってそのくせめちゃくちゃ見やすい。素晴らしい。サイコパスそのものな中二感ありありな主人公と対比させるように一般的な熱血主人公っぽい戦士がだんだん悪魔じみていく描写もまた良い。これはアニメでも観たい！

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 営業戦略部 店舗開発課 / 大山敏樹

## 「ニュクスの角灯」 高浜 寛

- 文明開化時代のお話が個人的に大変好物…！中でもこの漫画は、主人公・美世の成長物語だけではなく、実在した長崎の女商人「大浦慶」のエピソードなどもとても興味深いです。最新刊はフランスのパリが舞台。モモさんと謎との美女の恋の行方が気になります。作者の高浜寛先生は熊本の震災で被災されたとのこと。熊本の再興をお祈り申し上げます。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 上野で「北斎とジャポニスム」展を見た時、この作品の舞台と、時代がほぼ同じであることに気がついた。海の向こうでパリ万博が開かれたのと同じころ、日本からジャポニスムを輸出せんと奮闘する長崎の道具屋のお話。途中から舞台が日本とパリにまたがり、どんどんスケールが大きくなっています。谷口ジローを喪った今、その衣鉢を継ぐ高浜寛への期待が高まるのは当然のことでしょう。

読売新聞東京本社文化部編集委員 / 石田 汗太

## 「人間失格」 伊藤 潤二・太宰 治

- 太宰治の「人間失格」をコミカライズしているのだが、人間失格ってホラーだったのか！と再発見させられる驚愕の内容。これは失格だわ……と誰もが納得させられるひどい絵面の連発で、おぞましくも笑えてくる。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

## 「猫工船」カレー 薫

- 何も考えずに何処からでも読めるので、今年一番読み返したマンガです。可愛い絵に騙されてパワーワードにやられるダメ大人が増えると良いと思います。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出 麻悠美

## 「ネコと鷗の王冠」中村 哲也

- ビールマイスターを目指す少年と彼によりそう少女が、走り始めたまさにそのときの鮮烈な気持ちを描き出し、彼らの未来に思いを馳せずにはいられなくなる、とても気持ちのいい物語。人が生きていくことと、過去を未来につなげていく現在の意味もあらためて気づかせてくれます。元気をいただきました。ありがとうございます。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

## 「ネコノヒー」キューライス

- 日常の残念体験が哀愁たっぷりに描かれてる。

コミック担当 / 実松由夏

## 「能面女子の花子さん」織田 涼

- ただただ面白い。能面被ってるけどみていくうちに北川景子さんばりの美人の立ち振舞いに見えてくる。日々育児に追われてるとこういうマンガに癒やされる。

カメラマン / 平沼久奈

- 常に能面をつけて生活するというエキセントリックな家訓を持つ、面打ち師の家に生まれた花子さんに振り回される周囲の人々を描いたギャグ漫画。女性誌のギャグ枠は青年誌や少年誌と違う趣の良質なギャグが存在するので目が離せません。

住職 / 蟬丸P

- 設定がシュールすぎ。一話一話が面白く、お母さんは般若の面で花子が能面って、設定が。何度も言いますが、設定が面白い。設定が面白いから漫画が面白い。疲れている時に読めば、色々と忘れられて明日から頑張れる漫画。

ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村 哲彰

## 「ノー・ガンズ・ライフ」カラスマタスク

- 久しぶりに絵もキャラクターもかっこいい系を読んだ

大日本印刷 / 佐々木愛

## 「信長を殺した男」藤堂 裕・明智 憲三郎

- 読み応え十分な歴史漫画。ここまで、キャラクターのイメージと絵が合う作品は稀。一気に漫画の世界に入っている作品。次が気になって発売が待てません。

ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村 哲彰

## 「BARBARITIES」鈴木 ツタ

- マンガ力が高いとでも言うのか、一ページページ細かく丁寧にマンガとして凄くキチンと描かれた作品なので、BLというカテゴリで手に取る人が限られてしまうのは兎にも角にも勿体無い！純粋に面白いマンガはジャンルを問わず気軽に読まれるべきなので、特に男性におススメしたいです。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出 麻悠美

## 「バイオレンスアクション」浅井蓮次・沢田新

- 主人公の殺し屋ケイちゃんがかとにかく可愛い。ド派手で残酷でキュートでほんわか。なんだこれ！！甘い、辛い、甘い、辛いのがくり返しがくせになります。

三省堂書店 / 内野 智未

- 主人公のケイちゃんの強さにしびれます。殺し屋として一流な彼女の陰の暮らしがまったく見えないのがまた良いです。このまま強さだけを描いて頂きたい！

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- なんだかんだで待ち望んでいた単行本化が今年だったので、個人的には2017年といえばコレ。残虐で意味不明で可愛くて面白い。主人公の絶妙にズレている感覚だったり淡々とした残虐描写が原作者らしくて流石だと思います。

(株) TSUTAYA 首都圏カンパニー / 井出 麻悠美

- とっても優しい？うしじまくん。とでも言いましょうか。怖いんだか優しいんだか、とにかく変(笑)！絵柄も主人公もとてもかわいいので、変に狂喜染みしています。アクションマンガとしての面白さもありつつ、実は主人公の強さにも何か特別な理由がある？ようで。とっても柔らかいマンガなのですがバイオレンスというシュールな漫画です。

会社員 / 佐藤 優

## 「はぐちさん」くらっぺ

- 正体不明の生物「はぐちさん」が突然現れて、励ましてくれたりお世話してくれたり……。傍にこんな人がいてくれたらなあ羨ましくなります。読むと心がほっこり温かくなって、明日も頑張るぞって気持ちになります。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

## 「ハクメイとミコチ」檜木 祐人

- 作者さんの頭の中を覗いてみたいと思わされる作品。ここまで綿密に舞台を創り上げているというだけでも素晴らしいが、さらにはそこで過ごしている小さな登場人物たちの生き生きとした描写。自分の暮らしの気づかないところにもハクメイやミコチはいるのかもしれない、と思わされるだけのリアルさ。ひとつの作品として、とても美しいと感じられ、そして素直に面白すぎる。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 身長9センチの人々のお話。世界観が素晴らしく温かい。家族で読める作品

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

- 小さくて可愛い

tetote 代表 / 力丸 真

## 「はじめアルゴリズム」三原和人

- 読んだ瞬間「ビビっ」ときました。まだ1巻なのに、すでに続きが読みたい！数学という世界を研修してきた老人が、新しい世代と向き合って、まさらな彼が、どんな世界を切り開いていくのか。数学という難しくも美しい世界を、楽しく魔法のようなものとして捉えていくお話。きっとこの天才君は、自分の中の自由だった遊びの世界から「数学」という学問の中に入って行って、ぶつかったり挫折したり色々あるんだろう。でもそのドラマが見たい！！数学が全くわからない私も、その世界に魅了されそうです！

舞台女優・Generalist / 大倉照結

## 「ハピネス」押見修造

- エグい！可愛い！エロい！でもエグい！押見先生の作品はすべて読んでおりますが、そのなかでもこの作品は直接的なエグさが強いと思います。でもそんなことより、のめり込んでページを読み進めてしまうのは、やはりこの作品に魅力が強いからだだと思います。登場するキャラクターひとりひとりに強い意志があり、身を焦がしながら生きていく姿が哀しくも愛らしく感じます。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松 新

## 「春と盆暗」熊倉 猷

- 冴えない男の子と少し変わった女の子が出てくる4つの短編作品。終始ニュートラルな温度感で展開していくのが読んでいてとても心地よい。各話に登場する女の子達のひねくれ具合、天然具合、突っ走り具合が絶妙でみんなめっちゃくちゃ可愛い！困ったりちょっと怒ってる顔なんかもう最高。繰り返し読むと気がつける短編ならではのちょっとした仕掛けがあるのも嬉しいポイントです。

しょうゆ製造業 / 小野塚博之

## 「バンデット」河部真道

- 日本史ファンには嬉しい作品。南北朝動乱期を駆け巡る異形な者達を描く秀逸な作品。筋骨隆々の後醍醐天皇とい新しいイメージを提案。足利高義をこう使うかと感心。この時代のコアなファンだが、寺田法念は知らなかった。作者は、赤松氏や佐用の庄にも詳しいし、兵庫県民であろうか。「応仁の乱」、「観応の擾乱」の新書が売れるという珍しい時代に即して現れた作品。週刊誌での連載はいったん終わったが、続編が待たれる。

弁護士 長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

## 「BEGIN」池上 遼一・史村 翔

- 「サンクチュアリ」の夢ふたたび！池上遼一先生の描く男はカッコいいだけではなくセクシーで哀愁が漂ってるのが最高に素敵。古く感じられる部分もあるかもしれないけど、こんな「男の物語」も大切にしたい。いちお、男だし。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「左ききのエレン」nifun・かっぴー

- ワンパンマンと同じ流れをくみ、WEBマンガ掲載から本格的な漫画展開となった作品ですので、基本的なクオリティは保障されているといっても良いのではないのでしょうか。内容はクリエイティブ業界のお話なので、読み手によって浅い深いや嘘だ本当だと意見はあると思いますが、物語の人物像の掘り下げが丁寧かつ繊細なので知らなくてもしっかり読み込めます。作者自身が経験した業界のお話と、(もしかしたら)作者がかつてイメージした理想像としての自分自身？とのコントラストが、読書自身の思い出や経験に反応して面白さになっているのだと思います。まだ1巻しか出ていない段階にも関わらず登場人物やスピード感、複線など気になることはもう目白押しですので、今期一番、続きが気になるマンガです。あと、僕自身はジャンプ+から入り、大元のWEBマンガはあえて読まずにいるのですが違を楽しむのも一興だと思います。

会社員 / 佐藤 優

- ジャン＝ミシェル・バスキアという画家がいた。1988年に薬のオーバードーズによって世を去っていて、新作も出ないままこれからは埋もれていく可能性も皆無ではなかったが、逆に名を高め作品も値上がりをして遂には123億円といった値段で取引されるものまで出てしまった。アーティストの精神がそのまま映し出されたような激しさが、かといってサイケのおどろおどろしくはなく、乱暴だけれどまっすぐな感じが漂っていて、見る人の心を滾らせ燃え上がらせたのかもしれない。若くしてオーバードーズで世を去ったという経歴も、音楽でいうところのシド・ビシャスでありジミ・ヘンドリックスでありジャニス・ジョプリンであったりといった夭折の天才たちの系譜に名を連ねさせ、象徴として位置づけさせたのかもしれない。ゴッホとはまた違った天才にして先駆者。そうしたバスキアの生き様を、そして作品を似たようにパッションで描くひとりのアーティストの代名詞にした漫画が登場した。かっぴー原作でnifun漫画の『左ききのエレン1』だ。朝倉光一という26歳の青年がいて、目黒広告社というところで駆け出しのデザイナーをしている。先輩に活躍しているクリエイターもいて、その下でプレゼン用のデザインを必死に作ってそれがコンペを通ったら、部長から経験不足だからとプロジェクトを外されたりもして、不満を感じながらもそれでも自分の才能を半ば信じつつ、半ば疑いもしながら次の仕事へと取り組んでいる。そんな会社での日々に、混ざるように描かれるのが光一の高校時代の日々。美術部に所属

しながらも幽霊部員としてあまり描こうとはせず、それでも自分には才能があると信じて美大に行き、広告代理店に入って格好いいデザイナーになるといった夢をそれなりに自信とともに持っていた。そんな光一のどこか浮ついた考えを1枚の落書きが打ち砕く。「横浜のバスキア」。横浜にある美術館の壁にスプレーによって落書きされた、バスキアを思わせる激しいグラフィティアートを見て、光一は自分などとてもかなわない天才がいると気付く。というよりその絵を天才と気付いてしまったところに、光一のある種の才能が感じ取れたりもする。見る目があるだけに、自分の才能はまだまだ達していないと分かってしまうのは、人生において最大の苦しみかもしれない。いったい誰が描いたのか。どうやら同じ学校の生徒らしいと感じ取った光一たちは、「横浜のバスキア」を誘い出そうと学園祭でライブペインティングの展示を行う。もっともその正体を、光一に関心を抱いている同級生のさゆりは感じていた。山岸エレン。さゆりとは幼馴染みで、画家の父親がいて自身もずっと絵を描いていた。もっともそうした活動が、美術部に入って絵描きになるといった王道には乗らなかった。挫折したのか父親が自殺し、彼の才能を信じていたエレンの心に傷を残す。目に映る他の多くの絵など父親に比べたらはるかに下手なものに見えてしまう。それでも描こうとする凡庸さにエレンの天才が爆発し暴走する。心の赴くまま、手の動くままに描かれたグラフィティが見た光一を打ち振るわせる。いつかそこまで近づきたいと思わせる。学園祭でついに会ったエレンから罵倒されても、「オレはオレが諦めるまで諦めない」と啖呵を切る。そんな光一の吐き出すような思いは、けれどもエレンの軌跡と交わることはなく、光一は美大に行きデザイナーとなって広告会社でクリエイティブの職に就き、現実との軋轢や才能の限界といった苦難にあえいでいる。美大に行った誰もがクリエイティブな職に就けるとは限らない社会で、すんなりと広告代理店に就職してデザイナーとなり、仕事もまかされている光一は十分に幸運な立場にいると言える。高校時代にさゆりは、上位1000人に入れるような才能で十分といった考えで光一の行方を見守っていた。それにはピッタリとはまっている。今は苦悩していても、やがて会社の組織の中でそれなりのポジションに就ける可能性だってある。悩むことなどないと言える。エレンは違う。今という時代に語られるだろう10人のアーティストに入れなければ意味はないといった考えを持っている。というより自分が自分を出せなければ意味がないと感じている。だから妥協はしない。おもねりもしない。そんな2人、ある意味で商業デザインの秀才でもある光一と、アートというジャンルに括ることすら本人にとっては迷惑かもしれない天才のエレンとの、まるで交錯せず、対比すら困難な生き方が綴られる作品に、どちらが自分に近いのだろうかと考えてみたくなる。もちろん天才ではあり得ない。職種はまったく違って、日々を決まり事の中で精一杯に自分の能力を出して生きている光一に、誰もが自分を重ねて見てしまう。そして同時に、秘められているかもしれない、秘められていたかと思いたかった才能だけを誰にはばかることなく溢れさせて生きていける天才への憧れも覚える。音楽のジャケットを頼まれ、描いた絵に不満を言われても、それは絵が彼等を選ばなかっただけだと言い放てる天才になりたい。だったらと絵に会わせて音楽を変えさせる天才になってみたい。それはどんな境地だろうか。嬉しいのだろうか。誇らしいのだろうか。経験してみたい境地だ。もっとも、天才にはそうした感情すら存在しないのかもしれない。ただ描き、ひたすらに描いて描くことでしか自分を保てないのが天才というもの。逆に自分という存在のどこかを切り崩して毎日を埋めていくのが、天才ではないその他大勢の人間たちなのだ。そうした差異を描いていく中で、今はまだ自分を諦めようとしないう光一の精一杯のあがきを描いているのが、『左ききのエレン』の第1巻のストーリーだと言える。時折現れる今のエレンは、傍目には傲慢なアーティスト然とした態度を見せて世界と対峙する。それでも天才だからと世界は彼女を認めている。そんなエレンを逆説的な意味での引き立て役にして、光一の日々が綴られていく。もっとも、いつまでもそうした立場にエレンがいるはずはない。いつか爆発的な才能を迸らせ、暴力的な振る舞いによって光一たちを襲うはずだ。その時、光一にいったい何が起こるのか。ああはなれないと絶望に沈むか。ああはなりたくないと思えばたくことをやめて日常に足をつけるのか。刺激され超えていく姿が見られるのか。すでに原作者による漫画がネットには上げられているけれど、見ずにnifuniを描き手に選んで商業媒体で綴られているこちらの作品で展開を見守りたい。

- amazon の評価がパッキリ 5 と 1 に分かれてるのがこの作品らしくておもしろい。本当はオリジナルの方を推したかったけど 8 巻越えてしまってるしそもそも電子書籍しかない（そういえばマンガ大賞のレギュレーション的にはどうなのでしょう？）のでリメイク版に。クリエイティブ業界のいわゆる「業界マンガ」としても十二分に面白いけどそれはこのマンガの一側面でしかない。天才と凡人。アーティストとデザイナー。夢と現実。組織と個人。誰が読んでも非常にわかりやすい対比でどこにでもある社会人の悩みや成長をとんでもない熱量と緻密な構成力と賛否両論の画力で描いた傑作。…ってのは結局オリジナル版を全部読んだ後でないと出来ないことなんだけど。絶対に映像化すると思うので今から読んでキャストिंगの妄想を楽しむのもよし。個人的には映画じゃなくて絶対連ドラ期待。さっさと企画あげて！テレビ局の中の人！

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 営業戦略部 店舗開発課 / 大山敏樹

## 「火花」武富 健治・又吉 直樹

- いつも作品の意図やシャレにすぐに気づけず、何回も読んだ後、暫くしてからやっとわかる自分のような鈍い人間でも、又吉直樹さんのこの作品の凄さと武富先生のペンから注ぎ込まれた血が伝わってくるような気がしました。作中にある事務所の人達との飲み会で主人公を感じるあの想いを、原作を読んで感じた感覚そのままに漫画で表現する武富先生に鳥肌です。ドラマ化や映画化で既に知名度高い作品ですが、それでもこの作品を推したいです！

バンドマン / ターシー

## 「百姓貴族」荒川 弘

- 『水がなければ牛乳を飲めばいいじゃない』漫画を生業とする前の職業が、生家の家業農家に従事していた時の話やらご家族や周りを含むお話やら、毎回びっくりするような話が多い。（でも、本当はもっと凄いらしいけど、書けないことばかりらしいです）酪農や農業での苦労話や、国との戦い？も含めて我々消費者には考えさせられるエピソードも多いです。ギャグだけではなく、読み応え多し！

専業主婦 / 柴 佳衣

- 作者は『銀の匙』でマンガ大賞 2012 を受賞した荒川弘だが、個人的な本命はこちらの作品。爆笑あり、ホロリあり。最新刊の 5 巻では 2016 年の晩夏に十勝を襲った連続台風についても描かれている。被害の程度に比して道外ではさほど認識されていないが、この台風は“日本の食料庫”である十勝に甚大な被害を与えた。作柄には今後 10 年影響が出るとも言われ、著者の実家も被害を受けたと聞く。だが本作はコミックエッセイの本分である、クスリと笑える読後感をおろそかにしない。作風を堅持してこそ、伝わるものがある。それはエンターテインメントの力。十勝の皆様にとって、今年が少しでもよい一年になるようお願いを込めつつ。

編集者 / ライター / 松浦達也

## 「ヒャッケンマワリ」竹田 昼

- 内田百閒作品のコミカライズではなく、百閒の周りの風物・人物を玩味するコミックエッセイ。軽やかな描線が目目に心地いい。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 雑誌『楽園』連載時から好きだったけど、こうやってまとめて読むとまたさらに面白い！ 一條裕子先生の『阿房列車』も良いけど、『阿房列車』シリーズだけでなく百鬼園先生自体が好きな人にはこちらもおすすめ！ 黒澤明の『まあだだよ』と一緒に読むと至福のひとつときが訪れます。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「ファイアパンチ」藤本 タツキ

- この作品はネットニュースで話題になった際に知ったのですが、第 1 話の劇的な展開に衝撃を受けたのを今でも覚えています。壮大な復讐劇と思いきや、物語の方向性が少しずつ変化して、主人公の気持ちもそれに伴い変化して、ああ、人間ってこういうところあるよなあ〜と考えさせられます。人の美しさも汚さも愛も狂気も見える作品です。面白い！

デザイナー / シンガーソングライター / 平松 新

- メタ的でありつつ話としても読ませるのがすごい。着地点が見えないまま走っているのも含めて。

ブロガー / サイトウマサトク

## 「ふうらい姉妹」長崎 ライチ

- 面白い

tetote 代表 / カ丸 真

## 「ふしぎの国のバード」佐々 大河

- 日本に来た外国人がカルチャーギャップを描いたコミックエッセイや、外国人が間違っ覚えていて日本の文化を日本のその道のプロが行って訂正するといったテレビ番組があります。これらの読者・視聴者の立ち位置は日本側にあります。日本に住んでいると当たり前だと思っていたことに対して驚いたり感心したりする外国人を見る側です。ですが、この明治前期の日本を旅するイギリス人のバードさんの物語では、我々も外国人として日本を見て驚く側になります。それほど現在の日本とは別の国のようです。思えば40年前ぐらいは舗装されていない道も多く、道端の水溜りにはボウフラがうじゃうじゃ湧いていたし、クーラーもないから夏は窓を開けて蚊帳を吊っていたし、台所にはハエトリ紙がぶら下がっていたけれど、今の若い子はもう知らないんじゃないだろうか。ゴキブリホイホイだけはいまだ現役なのは、凄いなあ。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

## 「不死の獵犬」八十八 良

- 人が死んでもすぐに生き返る「復活」が日常な少し不思議な世界。その仕組みを乱す「ベクター」とそれを追いかける刑事達。小気味よくグロいアクションシーンも見せてくれますが、なにより岐路に置かれた登場人物達の覚悟にハッとさせられます。大事なときに良い判断、できるようになりたいものです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

## 「舟を編む」三浦しをん・雲田はるこ

- 大好きな小説がマンガになってよかった！！と心の底から思った。こんなに思ったのははじめてです。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 辞書作りの苦難を描いた三浦しをんの人気小説を、「昭和元禄落語心中」の雲田はるこが渾身のコミカライズ。上下2巻で美しく完結しました。コミカライズ、ノベライズがますます盛んな昨今ですが、その中でも最良な形で実現したプロジェクトの1つではないでしょうか？ 小説に寄り添いながら、コマの端々にマンガならではの創意工夫に溢れていて、最後は号泣です。もともと三浦しをんの希望で、雑誌連載時の挿絵を雲田はるこが担当し、単行本にまとまったときも広幅の帯に描き下ろしのカラー絵を添え、そのビジュアルは映画化にも影響を与え、アニメ化に際してはキャラデザを担当し、背景も雲田の挿絵の設定に沿ってデザインされた……という経緯自体が、とても希有だ。結果としてジャンルを跨いだ大プロジェクトになったわけですが、すごくパーソナルな匂いが濃厚で、それが魅力です。このような数年に渡る経緯にマンガの持つ推進力を強く感じました。

菓子研究家 / 福田里香

- 三浦しをんさんの大人気原作小説の挿絵を担当されていた雲田はるこさんによるコミカライズ！これを待ってました！原作の雰囲気やキャラクターを三浦しをんさんと同じくらい深く理解なさって、それを大事にしながらも雲田さんの漫画にしかできない表現もあり、原作ファンとしても雲田さんのファンとしても大満足でした。原作未読の方でも「言葉」を愛している人なら絶対に心に響くはず！ぜひ読んでいただきたいです！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- マンガ大賞に挙げる作品は「まだ知られていないものを推したい」と思って出しているのですが、既に各種メディアで展開されている本作品を推したいと思ったのは、漫画としての底力を感じたからです。小説も映画も堪能した後も、一作品の漫画として褪せることなく楽しめました。雲田はるこさんの絵がとても人懐っこく、色っぽく、一見頼りないような主人公や周りのキャラクター全員が、きちんと芯をもって生き生きと描かれています。上下巻でコンパクトにまとめられていますが、原作の素晴らしさを余すところなくぎゅっと詰め込まれています。ものをつくる、ということはとても地味で地道ではありますが、貫き通すこと、ひたむきであること、またその姿が美しく、いとおしく、魅力的である、ということに気づかされます。骨太の原作があって、既にたくさんの方が知っている作品ではありますが、一番煎じそのままの美味しさです。ぜひぜひ漫画で表現された「舟を編む」を嗜んでいただきたいと思います。

会社員 / 宇田川 結衣子

## 「プリンセスメゾン」池辺 葵

- 自分の感覚ではありますが、池辺葵先生の作品にはいつも「孤独感」が漂っていて、この作品に関してはそれがとても強く感じました。そして、「でも、それでも、幸せ。」と訴えてくるのも同様にとっても力強く感じます。また、主人公の言動だけでなく、他のレギュラー登場人物達や1話しか登場しない人達の台詞に毎回ノックアウトです。。。寂しさを感じるのにこのように生きていきたい。読み終わる度にチカラをいただいています。

バンドマン / ターシー

- 最初のうちは優しい絵柄も相まって、ふわふわした物語なのかと思いきや、これ以上ないくらい地に足の着いた物語でした。20代女性がひとりでマンションを買うということを通して、哲学的なことではなく、現実的なこととして、生きていくとはどういうことかを考えさせられます。マンションを買う主人公の沼越さんがばりばり稼ぐキャリアウーマンではなく、チェーン居酒屋で働く一見地味な女の子（でも、ものすごくしっかりしている！）であることも、この物語の要ですね。マンションを買ったらゴール！ではなく、むしろこれから本番という感じがするのも、とても現実的です。

映画館スタッフ / 堀江千秋

## 「ブルーサーマルー青風大学体育会航空部一」小沢かな

- グライダー（といってもエンジンは無いがしっかりとコックピットも羽根も副翼もあるしっかりとしたもの）を駆る大学のバリバリ体育会系の航空部にふらりとはいった少女つるたまのストーリー、どんどん成長していく彼女の物語と、空の蒼さに惹かれる作品です！ちょっと完結までが駆け足になってしまったのが残念です。もう少し彼女の成長をゆっくり見ていたかったです。

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉 雄

## 「BLUE GIANT SUPREME」石塚真一

- 漫画から音が聞こえてくる！熱い一作。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「ブルーピリオド」山口つばさ

- 絵が描きたくなる、という衝動がおこる作品。出たばかりだが今後は楽しみ。

株式会社つくるひと / 小野ゆうこ

- あったらしい美術をテーマにしたマンガ。その名の印象通り、とっても新鮮な印象で気持ちいい。魅力的なキャラクターたちへの期待も止まりません。ヒロイン、ユカちゃんだよね？ね？ 個人的にも美大に憧れがあったので、けっこう気持ちを投影して楽しんでます 40 歳。

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- 夢を追うときの、不安と胸の震えるような感動を丁寧になぞってくれるので、読んでいて心が熱くなります。例えば主人公が絵の先輩から勇気もらって行動するエピソードがあって、その彼の行動に読者である私も勇気もらえる、そんな連鎖が起こる。この真っ直ぐ前を向いてもがこうという感覚は、忘れないで生きていきたいなあって思います。

会社員 / 末永龍介

- 美大受験という題材によって「美術」という感覚的っぽい領域の事柄を論理的に断言してくれていることが気持ち良い。そういった土台があるから感性や感覚の部分として描かれたこともスッと心に入ってくる。美術と聞いて身構えちゃう自分のような人にオススメ。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「フルドラム」箱石 達

- ラグビーを主題にした作品です。自分の好きな可愛いヒロインがいて、主人公の成長があって、ライバルがいて…という王道の展開ですが、主人公が天然でぶっ飛んでいるが運動神経は並以下という所に好感が持てます。ラグビーは15人のスペシャリスト同士のぶつかりという展開が好きだったので、昨年末で完結となってしまいました…なぜだ！！w

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

## 「ブレンド・S」中山幸

- 一巻からオススメしている作品。今回の四コマ枠です！萌え系といえば萌え系ですが、きらら作品にしては男子もしっかり出てきてそれぞれのキャラクターの性格分けがしっかりとしていて読んでいて楽しい作品です！イラストの可愛さも良いですよ。こんなに目つきの悪いヒロインはなかなかいません(笑)

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉 雄

## 「ペリリュー —楽園のゲルニカー—」武田一義

- いまそこにある戦争と平和。絵と内容のギャップの伝える力が凄い。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

- 武田先生ご本人がタイムスリップをして、戦争を体験したのではないかしら？と思うほど、リアリティがあります。『さよならタマちゃん』で命を深く見つめた作者さんだからこそ描ける表現なのだと思います。戦争漫画ですが、可愛らしいタッチで読みやすいので、たくさんの人に読んでもらいたいです。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 戦場をさまよう主人公を軸としつつ、いくつかのエピソードを並行して語る構成力にうなる。3巻終盤、生きながら朽ちていく体をスミベタで表現、絵の「品」を保ちつつおぞましさを胸を深くえぐる。秀逸。

朝日新聞記者 / 小原篤

- シンプルな線、可愛い絵で描かれた戦争物ほど、怖いものはないと思う。軽い気持ちで読み始められ、気づくと後戻りできない所まで来ている。玉砕の許可が出て喜ぶっておかしいだろうと思う反面、同様に安堵する自分も、すでに地獄にいるのかも。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- こちらもタイトルに反して「地獄」を描く作品。戦争体験を「美談」に仕立てることを頑なに拒否し、ひとの愚かさ・狡さ・弱さを淡々と、着々と描いていく筆致に迫力がある。(絵柄はかわいい2頭身なのに！)

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- リアルな戦争体験が語られる秀作。ホンワカキャラとのギャップがいい！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「辺獄のシュヴェスタ」竹良実

- 圧倒的！！！！意志の力で、人間はここまでできるのか、人間の可能性は拡張できるのかを信じ込まされた作品。中世ヨーロッパで魔女と関わりがあるとされた女子が送り込まれた修道院という清新な一方で陰惨な世界を舞台に、人間のおそろしさと、それに対抗する意志と人道の力が描かれる。想像を絶する苦闘を圧倒的な意志と発想で乗り切る主人公のエラの孤軍奮闘と思いきや、次々現れる意志を共有する仲間。ただ、まったく人間としての力を発揮できない弱い存在もそこには等しく存在する。逆境を驚くような発想で最後まで乗り切るミステリーの緊張感を維持したまま、2017年、ほぼ完璧な形で6巻で完結！想像もしなかった世界、思考の限界を拡張してくれてこそそのマンガ！超おすすめ！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

## 「へんなものみっけ!」早良 朋

- 博物館で日々どんなことが行われているか丁寧に描かれており、色々な知識が入ってくるタメになる漫画。主人公も変わっているのですが、周りも周りでもかなりアクの強いキャラクターたち。博物館のリアルがここにありま。ブックエクスプレスディラ西船橋店 マネージャー / 中村 哲彰

- 博物館で働く人達やその仕事にスポットを当てた作品。時間を忘れフィールドワークに没頭し動物の死体や糞を集める事に目を輝かせる主人公を見ていると、まっすぐに夢中になれるものがある人は本当にかっこいいなと改めて思い知らされます。フィールドワークの様子のみならず、博物館に持ち込まれた植物を同定したり特別展示の準備をする様子が描かれていたり、博物館のバックヤードで何が起きているかということを実際に描いている作品なのかなと感じることができて大変面白いです。

しょうゆ製菓業 / 小野塚博之

## 「放課後ていぼう日誌」小坂泰之

- 釣りをあまり知らない私でも楽しめるし、釣りが好きな友人に聞いてもしっかりしていて面白かったといわれた釣り(+生き物)作品です。イラストも萌えすぎず濃すぎず万人に受け入れられる色々が丁度良いバランスの作品です。ちょっと表に出てみたいなんて思っている人におすすめです。読めば釣りに行きたくなる!?

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉 雄

## 「宝石の国」市川 春子

- 昨年末に8巻が刊行され、最後のチャンスと思って推します。この賞が、刊行が8巻までのマンガを対象としていてよかった。ちょうど8巻目で、物語は大きな転機を迎えます。以前選考した際に突き抜けたオリジナリティと言いましたが、改めて、あらゆる意味において次元が違うマンガだと思いました。8巻で様々な謎が明かされましたが、答えが示された訳ではなく、今後の展開が楽しみでなりません。アニメ化もされ、既に十分評価されていると思いますが、今一度、マンガとしての素晴らしさを伝えたいと思う作品です。

映画館スタッフ / 堀江千秋

- 伏線の回収が素晴らしすぎて脱帽です。ぞくぞくするほどの物語の進み方。平成版「火の鳥」!

アニメイト 営業支援部 書籍課 営業チーム / 鈴木寛子

- フェーズが変わったというか、ギアが1段上がったというか、歯車がガチャリとかみ合ったというか、そんな段階に到達したと感じた人がきっと大勢いるだろう。市川春子による漫画『宝石の国』シリーズは、海へと没した生命に微生物が入り込むことによって無機物の結晶となり、それが集まって意識を得て人の形となって立ち上がり、それぞれが宝石や鉱物の名前を得て、先生と呼ばれる僧侶のような恰好をした者の下につき、ある者は手に武器を持って月から宝石たちをさらいに来る月人たちを相手に戦い、ある者は日々を記録する仕事についていた、そんな構図がどこかギムナジウムのような場所で戯れ合う、美形そろいの少年たちといったビジョンを見せ、読む人を楽しませてくれていた。そうした中であって、どこか落ちこぼれの感があるフォスフォフィライトは、少しの衝撃で粉々砕けてしまう弱さゆえに、月人との戦闘には出られず日々を観察することを命じられていたものの、月からやって来た海のようななめくじのような不思議な軟体動物、アドミラピリス族の王によって飲み込まれ、吐き出され連れられて海へと引き込まれ、足を奪われ代わりにアドミラピリス族の殻を与えられたりして地上へと戻る。その後も海に落ちて両手を失って、金と白金の合金に置き換えられることで不思議な強さを発揮するようになっていく。結果として待望の戦闘職につけたフォスフォフィライトは、月人たちの戦いの中で先生が月人のことを知っているのではないかといった疑問を抱き、真相を知ろうとした矢先に今度は首を失い、ラピス・ラズリの首をもらい受ける形で復活を遂げる。そこまでが第6巻から第7巻にかけて描かれたストーリー。フォスフォフィライトが含有している微生物が持つインクルージョンの能力が、他の鉱物との融合を容易にしているといった設定が強くて、フォスフォフィライトは他の宝石たちとは違った存在となり、それ故の役回りを与えられて停滞していた世界を動かす鍵となる。身体を多くを他の鉱物と置き換えられながらも、フォスフォフィライトとしての意識を継続しているところが少し不思議。だからこそ先生と月人との関係を疑う気持ちも保持されて、やはり月へと行って確かめなくてはといった思いにかられ、それを決行してしまう。先生を信じ宝石たちをさらって月へと連れて行く月人たちと戦うのが使命という、与えられた定式に疑問を抱いて自分から踏み越えてしまえるフォスフォフィライト

の好奇心の強さはその性質なのか、元より出自に少し変わったところがあったのか、気にかかる。第8巻、月へと乗り込んで見た月人たちの日常と、そして王子とよばれるエクメアとの対話によってフォスフォフィライトは先生の正体を知り、その存在意義を聞かされ、月人たちが何者かも教えられて、自分たちはいったい何をすべきなのかを迷う。文明が栄え人類が繁栄していた地上がいったん滅亡して後、肉と骨を地上に残して昇天した魂が先へとゆけず迷っているのを祈りによって解き放つ。それが先生に与えられた使命。それを忘れてしまったか、拒否したかで祈らなくなった先生を刺激するために、月人たちは宝石たちをさらい月へと連れ帰り、飼犬に似た者を送り込み自らを作り出した博士の偽物を見せたりもする。言われていたようにアクセサリーにするためなんかじゃない、自分たちの行く末を開こうとして懸命だった月人たちの宝石狩りの意図を知り、どうすればそれが止まるかも知ったフォスフォフィライトは動き出す。美しい宝石たちがいて恐ろしい月人がいて海に軟体動物たちがいたりするファンタスティックな世界観に説明がつけられ、宝石たちと月人たちとの永遠ともいえる時間続けられてきた戦いに理由が示されて、作品世界のフェーズが1段上がったとも、ガチャリと歯車が廻って次のからくりを動かしたとめたと見えそうな第7巻と第8巻。その巻末で、フォスフォフィライトや一部の宝石たちが決断して動き始める。自分たちの存在意義を確かめるために。先に待つのは融和は、それとも対立か。寂しさを自覚すらない先生が本来の役目を取り戻すのか、それとも永遠の戦いを続けるのか。遠い未来のとてつもなく進化してしまった人類の姿を描き、その先を示そうとするSFとしてのビジョンを本格的に見せ始めた『宝石の国』の結末が、ますます楽しみになって来た。そうしたビジョンが超絶的な動きと造形を持ったテレビアニメーションによって描かれる時を願いつつ、これから先の作品としての進展、コンテンツとしての展開を見守っていこう。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「ポーの一族 ～春の夢～」萩尾 望都

- まっ……ってた!! この年になってまさか新作が読めるとは思わなかった!! は……とても、面白かったです。もしかして、さらなる続刊を望んでも、いいのかしら……。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 萩尾望都先生のポーの続きが読めるなんて……感激。涙何度も読み返しました! 宝塚歌劇団でも上演されたりと、不朽の名作の歴史に新たなページが加わった事、うれしくてたまりません。

アナウンサー / 松尾翠

- 何十年も時を経て新作発表。読むのが楽しみでもあり、怖くもありました。世界観が変わってしまっているんじゃないか、私の中のポーの一族が変わってしまうんじゃないか、そんなことを心配したり。読後は、永遠の時を生きるバンパネラたちに久しぶりに会えた感じ。会っていなかった間に私も彼らもお互いに色々あった、少し変わっていたけれどそれでもエドガーはエドガーで、アランはアランでした。

三省堂書店 / 内野 智未

## 「僕たちの新世界」せきやてつじ

- 未来改編のストーリーだが、設定が練り込まれていて、次の展開が気になって仕方ない。

MANTANWEB / 河村成浩

## 「ぼくたちは勉強ができない」筒井大志

- 天才には決して勝てない秀才。いやそれぞれに悩みがあるものなんだよ。というよりどちらもうらやましいですわ。毎年ひとつだけ入れる少年漫画今年はこれ!

プロデューサー / 小林トモユキ

## 「僕のジョバンニ」穂積

- 「天才に抗う者」が主人公のお話。展開は早いのに、空気が濃密で二巻まででもかなりの読み応えがありました。続きが楽しみな作品です。

会社員 / 工藤圭

## 「僕と君の大切な話」ろびこ

- 昨年に続いて推してみます。単行本が2017年に2冊出たので、わたしにとってはたいへん幸せな1年でした。高校生の男女のすれ違いを会話だけでみせる技。1巻は駅、2巻は学校の中庭、3巻は文芸部の部室といった具合に、しかもそれぞれベンチに舞台装置がほぼ固定されているのに、まったく退屈にならない技がすごい（4巻は図書館と喫茶店だとか）。たしかに高校生の生活半径はそれくらいで、それでも退屈などとは無縁なのかもしれないが、それをマンガという道具立てでやるのは生半可ではないはず。構成力とか画力とか観察力とか演出力とか、読めばそういう「マンガの技」を存分に享受できます。メガネ男子・東くん恋するあまりに挙動不審なヒロイン・相沢さんに関して、作者は「個別に言うと、相沢さんだったら、東くんが軽いジョークを言って相沢さんが冷たい顔をしているところ。ああいう、好きな人相手でもシビアに見てる部分が、私の中で一番女の子だと思うところなので。」（2016年の講談社コミックプラス「ろびこさんスペシャルインタビュー」より抜粋）と解説している。それを10代の頃に知っていたなら…と遠い目をさせるリアルさがいい。なお、相沢さんが赤面した表情はパターンが実に豊かでどれもたいそうかわいく、男女を問わずそれを確かめるだけでも単行本を購入する理由になりうると思います。絵がうまい少女マンガはやっぱ良い。

会社員 / 天野賢一

## 「僕はまだ野球を知らない」西餅

- もー、大好きすぎる！！過去作『ハルロック』『犬神もっこす』にもこれでもかと笑いを搾り取られた西餅さん。電子工作にハマっちゃた女子、感情がないのに演劇部に入っちゃった大学生、と、奇人の奇行を愛を持ってドライに描き続けるまったく他と違ったギャグマンガの最新作は、野球の最新統計学理論、セイバーメトリクスにハマった工業高校の物理の先生！彼が、高校の野球部を率いることになるのだが…！ 就任して一番始めにやるのが、グラウンドに金属探知機を埋め、言ってしまえば単なる中年男性である他校の監督をストーキングするところ、というところから、という奇行っぷり。登場する変人は相変わらず全員がおろかで楽しそう！！まだ1巻ですが、この先、心から楽しみ！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- これまで野球が好きで数々の野球漫画を読んできたが、野球漫画なのに泥臭くないストーリー展開もすんなりと入り込んでしまいました

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

## 「北北西に曇と往け」入江 亜季

- 老若男女、美男美女がかっこいい！そして映画みたいに広がる景色と空気感が素敵な物語。

主婦 / 紺野 泉

- 作者があたためてきた作風、素晴らしい内容を最大限味わえる「手触り」のある造本でした。「マンガを作る」という共同作業の最大化であったと思います。電子書籍の波もだいぶ強くなってきましたが、紙の本であるからこそこの楽しみ。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「北極百貨店のコンシェルジュさん」西村 ツチカ

- いろいろな絶滅動物が買い物に訪れる百貨店で働く女性が主人公……と書くとなまらなそうに見えちゃいますが、これが本当に面白い！動物も味があって、働く人間たちもそれぞれ色がある。このままのんびり、続けてほしい

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

## 「骨が腐るまで」内海八重

- 精巧かつ綿密に練られたトリックとストーリー……という感じでもない印象なのに、サスペンスとしての部分だけでなく読ませる力があるな？と。

音楽屋 / 杉本善徳

## 「舞妓さんちのまかないさん」小山 愛子

---

- 派手なアクションなどは一切ありませんが、京都の一角の晴れやかな舞妓さんたちの裏側を垣間見える一冊。食漫画にも分類されるかもしれませんが、とにかく癒されたい人におすすめです！とても優しい漫画です。このマンガを読んでいて、舞妓さんと芸妓さんに違いを知りました。

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉 雄

- 今年もたくさん刊行されたグルメマンガの中でも、「暮らすこと」「美しいもの」への丁寧なまなざしが感じられる作品でした。少年誌連載でかわいい女の子に目が行きますが、京のお茶屋や街の風景、着物、食べ物、調理器具などへの、愛あふれる描写を見てほしい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 不思議な魅力を持った作品です。ふと思い返すと、特にこの話がよかった！特にこのキャラクターがよかった！という大きな印象に残らないのですが、最初の1ページをめくった時から、ほんわかした雰囲気と安心感に包まれて暖かい気持ちになれます。この幸せ感を毎話詰め込めるのって本当にすごいなあと思いながら、仕事で疲れた帰りの電車のなかで癒されています。

ゲーム会社 / もちづき かずよし

## 「マイホームヒーロー」朝基まさし・山川直輝

---

- よくある猟奇的な復讐劇かな？と思って読み始めていたんですが、良い意味で裏切られた感のある知的好奇心をくすぐる内容で、とてもおもしろいです。海外ドラマ的な展開も魅力的。

音楽屋 / 杉本善徳

- 冴えないサラリーマンのおっさんが主人公で、娘のボーイフレンドを殺害するところから始まり、いかに完全犯罪を成立させるか。そのドキドキ感が毎話最高潮でまとめて読みたいけど、毎週最新話も読みたいと非常に悩ましく感じる作品です。冴えないおじさんのはずなのに、やたらかっこよかったり、心強く感じられる場面もあり、やっぱり頼りなく感じつつも親近感を覚えたり。

ゲーム会社 / もちづき かずよし

## 「まいりました、先輩」馬瀬 あずさ

---

- この歳で少女マンガにこんなにキュンキュンするとは思わなかった。このカップルの幸せを心から祈りたい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 先輩のカッコよさ、主人公の真摯さに読んでてキュンキュンがとまりません。(30歳男性)

往来堂書店 / 三木雄太

## 「魔女と野獣」佐竹幸典

---

- 初単行本とは思えない。これほど売り場に複製原画を掲出したいと思った作品もないほどカッコよさの演出に惚れました。きっとマンガ表現の歩を先に進めてくれる作家だと思います。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「町田くんの世界」安藤ゆき

---

- 勉強も運動も苦手。でも人間好きで、周りの人間からも愛されている高校生・町田一の世界。最初はその良すぎる人柄にジーンときていただけだったが、ここまで来ると猪原奈々とのさらなるラブを期待せずにはいられない。頼むぜ町田くん(笑)。

ネットラジオ「ザ・ノイズズ」パーソナリティ / 北山友之

## 「マチネとソワレ」大須賀 めぐみ

- 恋とは命のやり取りであり、命とは恋のやり取りである。死んだ兄は天才俳優だった。俳優として、兄の呪縛を越えようとする弟。彼を訝しみながらも目が離せず追いつける周りの人たち。命を削りながら舞台上に立ち、削った分だけまた演劇にのめりこむ。確かに全力で演劇に「恋」をしている。この作品は漫画の域を超え、もはや「舞台」だ。一度触れたら惹きこまれる。できるだけ多くの人にこの作品を「観劇」してほしい。

Books アイ茗荷谷店 / 野口 忠義

## 「まどろみバーメイド」早川パオ

- 著者が星座ブラのデザイナーということで気になって読んだが、意外としっかりとお酒の知識も入っていて読みやすく。まだ3人の関係性・それぞれの話も全然進んでいないので先が楽しみ。一定の読者の付いているお酒漫画だけど、すそ野を広げられそうだし、アニメ化されてる「たくのみ」「お酒は夫婦～」などよりもストーリー性がありそうで漫画を読むと考えると、良い。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

## 「魔法使いの嫁」ヤマザキコレ

- 今年9巻が発売されますのでここで推せるのも今回までとなります。昨年からのアニメ化により、漫画の世界観に声や動きや音楽が加わり、よりたくさんの方の元へ作品が届いている最中かと思います。8巻まで読んだ感想としては、とても続きが気になるところで終わっているのもどかしいのですが、チセもエリアスも、あとルツもまだみんな子供で、チセは思春期、エリアスは幼稚園児、ルツは小学生男子みたいな。血のつながりはなくても家族になろうとしている3人(シルキー入れて4人)というか、一緒にいるためにもがいて、あがいている最中というか。見守ることしかできないけど、一人一人のキャラクターがみんな愛しいので、みんなの幸せを願わずにはいられません。どうかもがいてあがいた先に、穏やかな時間がありますように。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 連載開始から今年で四年目。話が進みエピソードを重ねるにつれてどんどん面白くなり、今、すごい事になってます！「今更」ではなく「今こそ」受賞してほしい作品です。あと、書影が好きでたまらないという事に今回アニメ化フェアで並べて気が付きました。本屋冥利。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

- アニメを見ていて徐々に最初から読み返したくなりました。家族に捨てられた？救われないはずだった少女と心優しき(子供のようにもある)魔物とのラブファンタジー。

TORICO まんが王 第一営業部課長 / 日吉 雄

- チセとエリアスの間に生まれる亀裂に物語は一段と盛り上がりを見せる。二人の成長を応援したくなり、どどどのめりこんでいく。

マンガ家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「マロニエ王国の七人の騎士」岩本ナオ

- 前回のファイナリスト作品でバリバリに好きでだった、「金の国水の国」その作者の新作だったら、読まずにいられないではないですか。兄弟の名前が少しわかりにくいけど気にしない。岩本ナオさんの絵はちょっとの筆の差で登場人物の感情の差をかき分けていて本当にすごい。恋の始まりに胸キュンしてしまう。7人がそれぞれにどんなことをしていくのか、次巻の発売を心待ちにしている一作。

鳥取県 美術教諭 / 佐川 由加理

- 金の国水の国の岩本先生の最新連載。今回も面白い。まだ1巻めなので推薦しようか迷ったのですが、我慢できませんでした。牧歌的な設定の中に見え隠れする陰謀、複雑なお国事情と、魅力的なキャラクター造詣が相変わらず見事です。

啓文堂書店 本社 / 山川美香

- 背景がとても綺麗です。読んでいるうちに、何か自分がその話の中にいるのではないかと思う程、引き込まれます。映像で見たら、これまた綺麗だろうと思います。この先がどうなるのか、とても気になって仕方がない。早く先が読みたい！

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- マロニエ王国という欧州をモデルにした国の7人の兄弟のお話。それぞれ、「眠くない」「博愛」「暑がりや」「寒がりや」「獣使い」「剣自慢」「ハラペコ」と名前の通り個性豊か。自国のお姫様をいつかかこよく助けることが望みということで、早速お姫様について他国へ行くわけだけど、そこでなにやら怪しい雲行きになるようで…。まだ1巻なので、これからこの7人がどういう風に活躍するのか、またお姫様との関係も気になるところ！

舞台女優・Generalist / 大倉照結

## 「まんが 新白河原人 ウーパ！」守村 大

- 「暮らす」「生きる」のプリミティブな喜びがある。最新刊の6巻では、「釣り」の楽しみが凝縮して描かれていて、実に面白い。

プログラマー / サイトウマサトク

## 「まんがでわかるまんがの歴史」ひらりん・大塚 英志

- いわゆる「学習マンガ」のカテゴリーなので、この賞に推すのはふさわしくないかもしれない。しかし最近「学習マンガもマンガではないのか？」と思うことがあり、さらに、昨年読んだ中で1番インパクトがあった本なので、あえて推すことにします。どういうインパクトかということ、「鳥獣人物戯画」や「北斎漫画」を起源に語られがちな「日本マンガ史」を更新するような視点が示されていること。手塚治虫と「桃太郎 海の神兵」の関係はこれまでも語られていたと思いますが、16歳の手塚少年が「海の神兵」の「何に」それほど衝撃を受けたかについて、私はこの本で初めて理解できました。(あわててDVDも買って観ました。) それは、本書はそこまで言及してないけれど、宮崎駿監督の「風立ちぬ」や庵野秀明監督の「シン・ゴジラ」の見方も変わるということです。サブカルチャーの歴史に興味のある人なら必読だと思います。

読売新聞東京本社文化部編集委員 / 石田 汗太

## 「水木先生とぼく」水木プロダクション・村澤 昌夫

- 水木ファンとしては外せない一作。久々に水木先生の新作を読めました。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「ムシヌユン」都留泰作

- しょせんは下等生物と変わらない、生まれて死ぬまでの間、遺伝子を次代に伝えるだけの存在でしかない人間が、それでも人間として正気を保っていられるのは、とり澄まして社会生活を営んでいられるのはなぜか。その「紙一重」性を、沖縄の離島の濃密濃厚な亜熱帯環境を舞台に描く怪作。ひとことで全体像を語るのはとうてい困難だ。たとえば最新5巻のある見開きから単語を拾うと「スティング構造体」「海兵隊員」「生殖行動」「DNA」「電気パルス」「集積回路」「邪心」「フロイト的な強迫観念」「スーパーコンピューター」「中性子星」「核」「虫の巣」「超新星爆発」……。強いことばがわずか2ページにぎゅっと圧縮されている。ミクロから宇宙まで一気に拡散し瞬時に収斂するマンガならではの大風呂敷に圧倒される。そしてマンガの主人公としてはおよそ例がないほどの主人公のキモさ。連載は1年半ばに完結したということだけど、テン年代の奇書のひとつとして後世に伝えられることは疑いなし。人間誰も持ちつつ隠しておきたい下劣な欲望と、顔を背けたくないような保身、過剰で「ぐっちゃんぐっちゃん」で、眉をひそめたくないような描写がもたらす身の毛もよだつ恐怖。大手出版社(小学館)のメジャー誌(ビッグコミックスペリオール)で連載されたのがおよそ信じられない。読者を選ぶかもしれないけれど、強力な磁場を持っているマンガです。

会社員 / 天野賢一

## 「MUJIN 無尽」岡田屋鉄蔵

- 読んだ後にこんなに清々しい気分になれるマンガは他にあまり見当たりません。幕末の剣客伊庭八郎が江戸を舞台に紡ぐ物語は、粋と誠実さに彩られていて、背筋が伸びる思いがします。このマンガを読んだあとは、いい一日を過ごせる気がして仕方ありません。

Sler・システムエンジニア / 廣瀬 公将

## 「名探偵コナン 犯人の犯沢さん」かんば まゆこ・青山 剛昌

- 初めて存在を知った時にこれはやべえと確信し、1巻が発売されるのを心待ちにしていました。全力で発注しましたよ。配本少なくてしぬかと思いました。まず表紙からしてずるい。剛昌先生の帯もずるいし。カバー下もずるいよ。内容はものすごく気楽に読めるギャグまんがです。蘭ねえちゃんはやっぱり最強でした。この春新生活を始める人におすすめ。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「眼鏡橋華子の見立て」松本 救助

- 実在のブランド眼鏡をとりあげつつ、その人にあった眼鏡とは何かをちょっと良い話も織り交ぜつつ突き詰めていく。そんな羊の皮をかぶった超絶眼鏡フェチ漫画です。いろんな人に読んでいただきたいのですが、眼鏡が似合わないと敬遠してきた方に特にお勧めしたいところです。何故なら、あなたはあなたに似合う眼鏡に未だ出会っていないからです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

## 「めしにしましょう」小林銅蟲

- 『美味しんぼ』が拓いたグルメ漫画は、もう一つの大・料理漫画『ミスター味っ子』の寺沢大介さんが『将太の寿司』で寿司だけで大河マンガを作れることを示して以降、そこから30年を経て、超・細分化の世界に入っています。一つの調理法を突き詰めたり、地域を限定したり。そんなグルメ漫画の世界で、まったく違った想像力を持った料理マンガが、こちら、『めしにしましょう』。一言で言うと、異常高額グルメの世界！ウニ・トリュフ・鯨・大トロ・ウツボ etc…！ありえないほど贅沢な食材を想像もできない調理法で料理に替えていくさまは圧巻。確実にこの先生自分でその料理を作っていて、実際にやらないと絶対わからない細かいノウハウも満載。あ、あと漫画家さんが修羅場を迎えてそのアシスタントがいつちゃったテンションで料理する、という舞台背景も、異様なキャラクターが次々登場しては勝手に闊歩していくさまだけでもすごいのに！ グルメ漫画がふつう標榜する日常性を全部ごっそりぶっ飛ばして、その創作料理は日常を越えた異様なリアリティで迫ってくる、という怪作。たしかに、メスで料理しちゃいけないって、誰も言ってないんですよ…！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

## 「モキュメンタリーズ」百名 哲

- その本の体裁がフィクションであろうとノンフィクションであろうと、読者である自分の中ではどういう点が実であり虚であるのかという内省には影響しないという発見がありました。まずは最初のみえがきを見ないで読み進めるのがオススメかも。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「元女神のブログ」本間 実

- ファタジーは大好きなので、読み切りから連載に至り単行本化した時はガッツポーズでした。どのママさん達のストーリーも、ただホンワカさせず、且つシリアスにもなりすぎないバランス感覚が本当に凄いです。また、癒しの存在である子供達…特に吸血鬼の息子君の可愛さ半端ない！涎だらけにされて、「有り難や…」って自分も言いたい！！

バンドマン / ターシー

## 「モブ子の恋」田村茜

- 「地味で目立たない自分は物語の主人公にはなれない」と思っている人に一歩踏み出す勇気を与える作品です。主人公の田中信子のように自分に自信がないという部分に共感してしまうほどです。それでも頑張る姿は応援したくなります。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

- まだ1巻しか発売していないものですがおすすめ。タイトル通り、普段なら主人公になれない脇役のような存在のヒロインがとても愛らしい。世の中人気者になれる人は限られた人で、その他は、自分も含めてモブ。なのでモブ子の考えや行動、気持ちがとても共感でき応援したくなる。もはやモブではなくモブ子が主人公でその淡い恋に自分も落ちました。とても良作。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

## 「やがて君になる」仲谷 鳩

- 百合作品ですが、ラブラブという訳ではなく、読ませてくる作品です。恋を知らない侑と、そんな彼女を好きになった燈子先輩。一癖も二癖もある二人がどんどん惹かれあっていく。でも簡単に好き同士になれるわけではなく……。「生徒会」「先輩と後輩」といった王道展開ですが、ストーリーの構成から、表情や仕草の描写のクオリティの高さもあり、今までのどの作品にも当てはまらないなと思いました。百合作品というジャンルを牽引していく作品です。男性女性問わず、今一番多くの方に読んで貰いたい恋愛マンガです。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

## 「山と食欲と私」信濃川日出雄

- やってみたいくなりました

tetote 代表 / カ丸 真

- ガッツリ山女 (not 山ガール) している主人公の姿にあこがれます。あとキャンプグッズが欲しくなる。グルメマンガ…のようでいて、たまに挑戦的メニューが出てくるのも楽しい!

商品企画 / 畑中瀬路奈

- 変わらず好き。この空気感が好き。いつか山に登りたいのだからと夢を抱き・・・今日も読んで妄想するのです。

アナウンサー / 松尾翠

## 「やれたかも委員会」吉田貴司

- 「あのときのあのシチュエーションは、もしかしたら『やれた』かも!？」という、まあ、それだけでは品のないマンガのようですが、ちょっと違います。心の中にしまっておいた若いころの(そうでもない頃も含めて)甘酸っぱい思い出、あれは大人になった今から振り返るとどうだったのだろう、という内容です。それを3人の採点者が「やれた」「やれたとはいえない」で評価。そのときの一言がなかなかたまりません。男女問わずおすすめできるマンガです。あ、一応18歳以上で。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- このバブリーで軟派なタイトルのせいで、しばらく手に取らなかったのだが、読んでみたらむしろ硬派な恋愛マンガで驚いた。読み終わった後ではタイトルも味わい深く見えてくる。「こういう落ちの付け方は見たことない」と感嘆できるマンガを、本当に久しぶりに読んだ気がする。「これじゃ読者が楽しめない」と、編集者にダメ出しをもらい続けたというエピソードも考えさせる。面白さって何なんだろう……。巻末の保坂和志さんとの対談は、蛇足という人もいるでしょうが、これはこれで楽しめた。

読売新聞東京本社文化部編集委員 / 石田 汗太

## 「憂国のモリアーティ」三好 輝・コナン・ドイル

- 愛すべき悪役、モリアーティが主人公の本作は今までのシャーロック・ホームズのコミカライズなどにはない斬新で新鮮な物語に今後も期待しかありません。とにかく好きな作品。

丸善 丸の内本店 コミック担当 / 八重田幸子

## 「夢で見たあの子のために」三部 けい

- 主人公とヒロインの背景やお互いの関係が少しずつわかってきたと思ったら、ハメたはずの相手に逆にハメられて急展開。話が次々に進んでいく気持ちの良いスピード感がたまりません。

教師 / 持丸宏司

## 「ゆるキャン△」あfろ

- これ読むと、キャンプ熱が一気に燃え上がる！！かなり影響を与えたで、賞。冬のキャンプも楽しそうだなあ
- レジャー系漫画も手を変え品を変えて発表されますが、ガチアウトドアの一步手前で悩んでる人達の背中を押すが如くの「ゆるいキャンプ」が題材ながら、作中では延々と冬キャンプの良さを描くなど、萌えのコーティングの中に潜むこだわりを見せてくれる作品。ツーリングオンリーの単車乗りにも刺さる心憎さ。

アナウンサー / 松尾翠

住職 / 蟬丸P

## 「ようことよしなに」町田 翠

- 何か、自分の昔とシンクロしました。ようこちゃんの奔放な感じも、何か身に覚えがあるような、なつかしい気持ちになり、そして、本当の友の思いに、キュンとしました。今はない、でも決して忘れられない友達がいるあなたへという帯に、何か切なくなりました。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

## 「ヨチヨチ父 とまどう日々」ヨシタケシンスケ

- 近年大人気の絵本作家による「育児イラストエッセイ」ですが、1話が基本4コマで完結するので、あえてマンガとして捉えてより多くのパパママに読んでもらいたい。子どもが生まれた時にはすでに、母親に大きく差をつけられていて戸惑うしかない父親という存在の悲哀とまた喜びを、絵本の作風そのままに、思索的で内省的な著者が独自の視点でコミカルに描き出します。

会社員 / 矢野耕次

## 「夜廻り猫」深谷 かほる

- 主人公は毎日の食事にも困る野良猫なので、何の力も持っていない。心で泣いている人を見つけ、ただ話を聞いて、にっこり笑って寄り添うだけ。中島みゆきが聞きたくなります。
- ネット発で静かなブームになっていたそうで。猫の遠藤さんが夜な夜な徘徊し、「涙のにおい」をかき取り話を聞いてまわります。最新刊では実話からの書き起こしもいくつかあり、これらもじーんと来ます。猫の世界も生きづらい、人間の世界も……。でも、みんな頑張っているんだ、と実感できます。つらいとき、大変な時期、毎晩少しずつ読み進めて、少しだけ元気をもらって明日も頑張ろう、と思うようにしています。

丸善ジュンク堂書店営業本部 / 小磯洋

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- たった8コマなのに涙が…！じんわりと染みる暖かい煮物のような漫画ちなみに時々でてるご飯が素朴で簡単なものなのに無性に食べたくなり真似して作りましたこれは電子書籍でなく紙でゆっくりページをめくりながら読みたい作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「来世は他人がいい」小西明日翔

- 前作も好きでしたが、今回も面白い！そしてもっと面白くなって行きそうな予感

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「ライミングマン」若杉公德

- これぞ原点回帰とも言うべき、HIPHOP版「DMC」。腹痛いほど笑ったので、とりあえず目についた人に読んでもらって、やっぱりおんなじように腹抱えて笑ってたから、笑いたいならこの1冊。原点回帰なので、見た目貧根暗男子が実はめたくそ凄んだぜ感も健在。ラップとは何ぞ？という哲学にも発展しかねない展開に、最高としか言いようなし。

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

## 「ラジエーションハウス」モリタイシ・横幕智裕

- 放射線科医、放射線技師のお話です。外科医で手術をバンバン行う！という漫画ではないですが、それと同じくらいに大切な医療の現場が描かれている作品だと思います。絵も見やすく好みなのでとてもオススメです。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 数ある医療物の中で、放射線技師に焦点を当てた作品が読める時代にいることを幸せに感じます。主人公の人間模様も踏まえつつ、病気で悩む人々の思いも描き出し、ぐいぐい引き寄せられます。(本音) 我らがモリタイシ(「いでじゅう!」)の最新作が読めるなんて！生きててよかった！

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 嶋岡桃子

## 「ランド」山下 和美

- 想像をしていた話の流れを良い意味で裏切ってきて、特にこの世とあの世のばれ方とか含めてどんな風に終わりを迎えるのか想像できないワクワクがあります。

Migimimi sleep tight/ ギタリスト / 涼平

## 「リウーを待ちながら」朱戸 アオ

- なんの変哲もない日常が、あるできごとをきっかけに壊れていく。崩れ落ちるといったほうが近いかもしれないスピード感。自分だったらどうするか、あの人だったら……と、我が身に置き換えて考えてしまうシーンが次々に現れる。起きていることは本当に大変なことなんだけれど、その中にはホッとする時間もあれば、主人公はじめ、登場人物たちが逡巡する瞬間もあって。そこに、生身の人間を感じて、また物語のなかにグイと引っ張り込まれる。“医療もの”が好きな人はもちろん、そうではない人にも読んで欲しい一冊です。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- アウトブレイク系は、フィクション感の強弱で方向性が大きく違ってくると思うんですが、比較的「現実みのある」作品として読めるものの中で、つよい存在感をはなっていると思います。

音楽屋 / 杉本善徳

- “その後”のことを考える。新たな患者の発生がなくなり、命を失わずに済んだ感染者は回復して誰かに移す心配が消えて、横走市から完全にペストの痕跡が消え去って後、人は横走市で暮らし続けてくれるだろうか、あるいは人は横走市へと入ってきてくれるだろうか、と。有史以来、幾度もあったペストの大流行で大勢の人が死んだ都市も、今は普通に人が暮らしているし、当時だって出ていかなければ入ることを妨げもしないで、普通に日常へと戻っていった。これが現代の日本ではどうなるかが不安でならない。富士山の麓にある横走市で自衛隊員が倒れているのが発見された。病院で血を吐き生命も危ぶまれたものの体力があったからかどうにか回復。けれども周囲では1人また1人と呼吸障害で倒れ、そのまま亡くなる人も出て、病院で働いていた看護師の女性も元気だったことが嘘のように数日後、寝たままで亡くなってしまった。何が起きている。内科医の玉木涼穂の懸念はそのまま現実のものとなって、横走市で肺ペストが流行り始めていることが判明する。原因は中央アジア。そこで流行していたものを派遣されていた自衛隊員が持ち帰り、駐屯地のある横走市に広めてしまった。何という失態。けれ

ども今は6世紀の東ローマ帝国でもなければ、2000万人から3500万人が死んだという中世ヨーロッパでもない。薬はある。医者もいる。だから大丈夫。誰もがそう思った。涼穂も。ところが……。朱戸アオによる漫画『リウーを待ちながら』に描かれるのは、現代に蘇った中世ヨーロッパにおけるペスト大流行の恐慌にも似た事態だ。最初の発生は、自衛隊が原因を隠蔽するためにペストの可能性を黙って事態を悪化させることはなく、現代だからこそその物療と医療体制で押さえ込むことが出来た。看護師だった母親から感染したらしい女子高生の鷯月も生き残った。光明を見たその矢先に、煉獄が口を開いて横走市を飲み込んだ。『リウーを待ちながら2』で明らかにされた新たな事態が、抗生物質の大量投与によって押さえ込めたはずの肺ペストを、逆に増殖させる結果となって感染爆発の危機を呼び込んだ。横走市は閉鎖され、外部との行き来は禁じられて家族や恋人に分断されてしまう人たちも出た。それだけならただの悲運や悲恋で終わるものが、ペスト菌はそうした人間ドラマを容赦なく死の色で染めていく。毎日のように運び込まれる感染者に対し、決定的な治療薬もないまま、ただ延命措置だけ施して経過を見る。それで回復するはずもなく次々に死んでいく様に、涼穂たち医師はどんな気持ちを抱いただろう。憤りだろうか。悔しさだろうか。無力感だろうか。諦めの感情だろうか。第2巻で病院に運び込まれた母親が、いっしょに運び込まれたはずの息子がいないことを訴えていたのを聞いて、涼穂は上司の止めるのも聞かず、別のテントに運び込まれていた息子を探し出して母親の傍らへと連れて行く。母親に会えて安らかな表情に戻った子供を愛おしく抱く母親の絵が上半分に描かれたページの下半分には、空っぽになったベッドが描かれる。その対比がとてつもなく悲しい。どうしようもなく悔しい。もっとも、読者として浮かべるそうした悲しみや悔しさは、物語の中の涼穂たちにとってはすでに日常と化していたものだろう。だから、涼穂は涙しながらも「いい事があったの」と、単身で乗り込んでそのまま居着いた疫研の原神の問いかけに答える。人の命を救うのが使命の医師にとって、命を失わせるのがいいことであるはずがない。それでも死を看取るしかない煉獄では、親子をいっしょに逝かせてあげられたことをいいことと思うしかない。矛盾。葛藤。懊悩。現場の医師たちに浮かぶ行き場のない感情に、なおいっそうの悲しみや悔しさ浮かぶ。どうしようもなかったのか。どうしたらよかったのか。もしかしらいつか自分たちが襲われるかもしれない事態に対して、何が起こるのかというビジョンを見せ、そこで抱くだろう覚悟のようなものを与えてくれる物語。それが『リウーを待ちながら』だ。防げるのなら防ぎたいけれど、防げなかったのだとしたらどう向き合い、どう生きて、どう死ぬかを考えたいし、考え続けなくてはならない。ひとつの指針がある。半ば運命として死がかたわらに横たわった横走市では、誰かを失った悲しみを受け入れずとも身には感じて、今を生きようとする人たちの連帯が生まれていく。タイトルの元となったアルベルト・カミュによる小説「ペスト」にも、ペストで大勢が死んだアルジェリアのある街が、大流行を抜け出て平常を取り戻していく様が描かれている。そしていつか現実に、同じような事態が起こっても、自棄にならず慈しみの中で終焉を迎え、再生へと向かうことを心から願う。もっとも、世間の横走市を見る目は厳しく、外では文字通りの“病原菌”として見做された横走市への無理解と嫌悪が広がっている様子も描かれている。それはそのまま現実のこの世界にも当てはまってくる。中世ヨーロッパよりも、そして194X年のアルジェリアよりも情報が発達し、流言が光の速さで伝わる現実の世界では人は、悪意を簡単に肥大化させて悪疫のように広めてしまえる。肺ペストよりも恐ろしい言葉の疫病に罹らないための準備をも、この作品を読むことで考えたい。“その後”の横走市に人が集い、往来があってそこに暮らしている人も、これから暮らす人も誰からも愛され、慈しまれることを願って。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「竜と勇者と配達人」グレゴリウス山田

- 神は細部に宿る。世の中にはいろいろな職業があって、それぞれ市井の人々はたくましく生きています。  
マンガ研究 / ライター / 会田洋
- これめちゃくちゃ好き。とにかく世界観がしっかりしてるから、中世ファンタジー世界とはいえ現実味を帯びていて、わかりやすく一言で言うなら「ドラクエの町の市井の人々の日常」的な。地に足ついた幻想世界はなんだかもすごく夢がありますよね。  
オリオン書房ノルテ店 / 池本美和
- 「マンガでなければできないこと」をやってくれてる感が凄い。あと、想像の膨らませ方を学ぶテキストになっちゃうんじゃないだろうか、これ。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「LIMBO THE KING」田中相

- 設定がとても面白くて丁寧なSF、洋画を見ているような作画センスが大好きです。このまま丁寧に描いてほしい、期待しています！

WEB デザイナー / 河本智芳

## 「ルーヴルの猫」松本 大洋

- 昨年開催された「ルーヴル No.9」展は、パリのルーヴル美術館をマンガで表現するという試みで、フランスはもちろん、日本の漫画家さんも参加し、素敵な作品を見せていただきました。「ルーヴルの猫」はその作品の一つ。あのルーヴル美術館に住み着いた猫と従業員たちとのひそかな共生、50年前に行方不明となった少女の行方。マンガというより芸術作品の一つのような装丁、奇想天外ながらも洗練されたストーリー、不思議な魅力を持つ猫たち。大人も読める「第九芸術」です。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「ルポルタージュ」売野機子

- 現代の少し先にあるかもしれないお話。かなり興味深くキャラクターの気持ちを追っています。最後まで読みたいです。

bar 図書室 / 岡部 愛

- 人はどうして恋愛をするのか。客観的俯瞰的に見ているからこそ、より興味が湧くその感情を、繊細なタッチで描くこの作品、現在のレーベルでは完結しましたが、続きが読めるとのことで、今からとても楽しみです。

KADOKAWA ニュータイプ編集部 / 鳩岡桃子

## 「レイリ」室井大資・岩明均

- レイリ最高かよ！！！！ってなった。4巻がすごい。ストーリーはもちろんののだが、とにかく絵、絵がすごい。鬼気迫るカッコよさ。スタイリッシュ殺陣アクション。これ読んできると死生観が訳わからなくなるから危険。でも読む。

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

- レイリを読むと躍動感や息遣いが伝わってくるまるで映画を見ているかのような感覚に陥る生と死の狭間で揺れ動く人間の気持ちの描写は秀逸である

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 最初からおもしろ雰囲気を感じ取っていましたが、ようやくレイリが解き放たれた4巻、期待を大きく超えて凄まじくおもしろい。あと、レイリの目！人を喰ったようないつもの表情もステキですが、この目には魂を持っていかれます。あれ？オレ惚れてる？

Tokyo Otaku Mode Inc. / モリサワタケシ

- 歴史物語としてよく知られる甲斐武田氏の滅亡。しかし、その武田氏が迎える終局への道を、このような角度から切り取り、そしてレイリという絶妙な設定の主人公を配すことでドライブ感あふれる物語に昇華させることができるとは！さすがエウメネスを選び出した男・岩明均！

会社員 / 矢野耕次

## 「レディ & オールドマン」オノ・ナツメ

- コーヒーを片手に気が付くと一口も口を付けずに読み込んでいた。オノ・ナツメワールドにどっぷり浸かってしまいました。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

## 「ローカル女子の遠吠え」瀬戸口 みづき

- 都落ちして地元に戻ったOLの生活を描いた四コマ。とはいえ悲壮感はまったくありません。地元愛が満載です。マンガ大賞で四コマが選ばれる事がほぼ無いのは判っていますが、この作品は色々な人に読んで頂きたい、そんな作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

## 「ロッタレイン」松本剛

- どの人物もストーリーのために動いてないというか、メイン以外のキャラクターの気持ちもとても理解できて、とてもやりきれない思いにさせられる。ここまで“ どうしようもない ” に説得力がある話、なかなかないと思う

bar 図書室 / 岡部 愛

- ある事件がきっかけで一緒に暮らすことになった 30 歳の兄と 13 歳の義妹の心が重なっていくという映像化もされそうなドラマチックなストーリーなのですが、逆に漫画だからこそその力強い絵での表現に心を揺さぶられます。見開きの風景やヒロインの初穂の瞳や唇の表情が特に印象的で何度も心臓が跳ねる思いでした。特に 1 巻の表紙の初穂の表情を見ただけで、この美しい女の子と一緒に暮らしたりしたらそれはもう絶対好きになっちゃうし、ゆるやかに破滅していくしかないかなとも思います…。連載開始から最終回まで単行本化されず完結後に 3 巻連続で発売されたのでぜひ一気読みで濃密な体験をしていただきたい作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

## 「わたしと先生の幻獣診療録」火事屋

- ふんわりメルヘンかと思いきや、垣間見える奥深い設定に唸らせられる作品。とはいえ、頑張る「私」と厳しくも優しい「先生」の物語には頬が緩みっぱなしなのです。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「私の少年」高野 ひと深

- ストーリー展開、心理描写もさることながら、大事なシーンに出てくる少年の描写がとても美しい。主人公の聡子さんと少年が、互いに思い悩みながらも惹かれ合う様が心にグッときます。感情と現実の間で揺れ動く人間模様にはハラハラしながらも、どうか素敵な結末になって欲しいと応援したい作品です。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松 新

- 30 歳 OL と 12 歳の少年の話ということで、昨年 2 巻まで読んだときは、なんて危うい夢のような物語なのだろうと思いましたが、4 巻まで刊行され、ぐっと踏み込んだ展開になりました。決して夢のような話ではなく、とてもリアリティのある展開に胸が締め付けられます。純粹な愛というのは、どこまでが許されるものなのだろう？ 2 人の関係にはらはらしつつ、最後まで見届けたいと思う物語です。

映画館スタッフ / 堀江千秋

- 自分の中にある「女」の部分が揺さぶられる感じがして、恐ろしいような、興味深いような、不思議な気持ちになりながら読んでいます。

ライター、早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

## 「ワニ男爵」岡田卓也

- ジェントルマンで素敵

大日本印刷 / 佐々木愛

- シニカル！

tetote 代表 / 力丸 真

- ワニ男爵との最初の出会いは、週刊モーニング。不定期連載で始まった。1 話でもう引き込まれた。まず、なぜワニ？ そして彼は非常に紳士・・・で、相棒は口が悪くてちょっと情けないさぎという組み合わせ。そんな二人がぶら食べ歩きするマンガなのだが、独特の風味で繰り出されるシュールな笑いにもう夢中。脇を固めるキャラクターもいい味（グルメマンガだけに）。まず、ピーバーの「ジャスティン」。もう一度言う。ジャスティン（ピーバー）。彼はラビットボーイのライバルという存在で、連載の途中のタイミングで初めて姿を見せるのだが、そのインパクトたるや。このマンガがグルメとワニのキャラクターだけじゃない、もう一段階別の笑いをとれるんだぞ、というのを見せ付けられたのであった。これはギャグマンガなのかグルメマンガなのか？ そんな疑問も一瞬で忘れてしまう。ただただ癒しの笑いを届けてくれる唯一のグルメ漫画。絵柄もいい雰囲気。絵本にもあいそう。誰にでもおすすめできるので、すでにいろんな人に声をかけている。

会社員 / 西尾美里